

**NO.102  
SUMMER  
1996**

# **英語展望**

**ELEC BULLETIN**

## [特集] マルチメディアが英語教育を変える

マルチメディアの発展と英語教育の可能性

金田正也

急速に進む学校でのマルチメディア活用

佐藤 勉

インターネット・ツールとしての英語

阿部 一

マルチメディア学習環境における英語授業

見上 晃

世界をつなぐ英語教室

朝尾幸次郎

パソコン・ライティング

静 哲人

すぐに使えるソフト・CD-ROM情報

菅野 晃

英語教育におけるマルチメディア導入の基礎

山内 豊

書評特集：『マルチメディア時代の子どもたち』、『インターネットで英語学習』、『インターネット サーフィン』、他

アメリカの人種と民族

普遍文法と第一・第二言語獲得

國弘正雄

有元將剛

## 特集 マルチメディアが英語教育を変える

マルチメディアの発展と英語教育の可能性	金田正也	2
急速に進む学校でのマルチメディア活用	佐藤 勉	6
インターネット・ツールとしての英語		
—世界を結ぶ共通語への意識変革	阿部 一	15
マルチメディア学習環境における英語授業	見上 晃	19
世界をつなぐ英語教室		
—リアルタイムのインターラクション	朝尾幸次郎	23
パソコン・ライティング		
—書く英語はこう教える	静 哲人	29
すぐに使えるソフト・CD-ROM 情報	菅野 晃	36
英語教育におけるマルチメディア導入の基礎	山内 豊	42
アメリカの人種と民族 (31)	國弘正雄	53
英語教育の情報と資料 (41)		
普遍文法と第一・第二言語獲得	有元將剛	60
新刊書評：『マルチメディア時代の子どもたち』	尾関修治	48
『インターネットで英語学習』	笠島準一	49
『インターネット サーフィン』	橘 俊一	50
『国際化の中の英語教育』	荒井正道	67
『定着重視の英語テスト法』	豊田尚正	68
Cultural Understanding and		
English Language Education	ジェマ・バーネット	69
新刊案内：『現代英語教授法総覧』、『新しい読みの指導』ほか	70	
マルチメディア関係新刊から：『学校の先生とパソコン』ほか	14,	51
展望通信		71

## マルチメディアの発展と英語教育の可能性

金田正也

### I. 英語教育でのマルチメディアの諸相

特集のタイトルにまで「マルチメディア」が挙がるとなると、最初にまずその中味を整理しておく必要がありそうである。これについては既に鈴木博氏が本誌1995年の夏号で、広狭の二つの見方のあることを指摘されている。例えばOHPとテープレコーダー(TR)など複数の媒体を組み合わせて使うのがその広義の場合であり、「メディアミクス」とも呼ばれる。これに対してコンピュータを媒体とした、映像・音声・文字などの有機的な結合による情報の授受が狭義の場合であり、今やこちらが「マルチメディア」の本流となっている。既に在る「コンピュータ」という語がこれになじまないのは、当初の字義通りの「計算機」としてではなく、その後急速に発展した、多様な様態による情報の授受に関わる手段・媒介物としての面が強調されるからである。

メディアという言葉は、教育界では歴史的に視聴覚教育論の流れの中で1960年代から70年代にかけて多く使われだした。単純なレコード、スライドの時代から、TR、OHP、カラーテレビ、VTRなどへ多彩な展開のあった時期である。視覚メディア、聴覚メディアによる教材論に花が咲いた。したがってそれらの総合・融合としての「マルチメディア」という語の響きの中には、情報の提示面が色濃く残るけれども、その融合がコンピュータの中で行われたことによって、実はコンピュータの側の大変な属性が密接不可分の要素としてそこに入り込んでいることを認識する必要がある。マルチメディアの観点から、それらの属性を機能別に分類すると、次のようになる。

①提示系：音声や映像のデジタル化によって、文字・数字以外に音声・自然映像までもその場で自由に編集して扱えるようになった。TR、スライド、OHP、テレビ、ビデオ、映画、LD、CDなど、あらゆる視聴覚メディアの機能がここに一体化している。その具体的なハードウェアの一例が、現在ではCD-ROMである。

②入力系：今までのメディアが情報を送り出す一方であったのに対して、このメディアはキーボード、マウス、マークカード、スキャナ、マイクその他の付属機器によって、双方向に情報を入力することができる。これは大きなポイントである。

③制御系：情報を提示し、受信するに際して、その手順・時期・量・質などを自在に変化させ、その間の諸現象を解析し、その結果を告知し、記録するなどの定められた処置を瞬時にする。

④変換系：音声を認識して文字や波形で表示したり、画面の文字を音声化したり、訳語化、翻訳など各種の変換をする。

⑤検索系：画面上での検索はもとより、辞書ファイル中の検索、特定語に着目して検索し配列するKWIC、スペルチェックなど。また、ハイパーテキストに見られるように、関連項目へのジャンプ、その他。

⑥伝搬系：各種の通信機能による電子メール、インターネットなどの通信網の構成。

⑦その他、計数や計算(たとえばreadability)、比較(採点)、作表、データベースなど、文字・数字にまつわるコンピュータ本来の機能面のあることは言うまでもない。

たとえば、在来の紙の辞書を引く作業をコンピュータに代行させるとすると、そのことだけに着

目すれば、提示系の「マルチメディア」という語感からは遠く感じられる。しかし、引いた結果が文字だけでなく絵や写真も与えられ、その写真が動き出し、その語の発音も聞けるとなると、まさにマルチメディアそのものである。このように、マルチメディアとコンピュータとの間には一線を画しがたい。本稿の表題の「マルチメディアの発展」とは、CD-ROMや音源などを一体化した、いわゆるマルチメディアパソコン自体や、その用い方の発展にほかならない。

## 2. マルチメディア教材の特性

マルチメディアが以上のような機能・属性を持つことを踏まえて、それが英語教育に教材・教具としてどのように関わるか、またその特質は何かを眺めてみよう。

### 1) 全域性

従来のLLでは音声機器を中心に構成されていたために、聞く・話す面の学習が主であった。マルチメディア・パソコンを備えたLLでは、文字も扱えるので、読む・書く面を含めて、4技能の全域にわたっての練習が可能である。このため音声学・会話・オーラルコミュニケーションなどの科目で主に使われていたLLは、英語科のどの科目でも活用できる可能性が出てきた。

### 2) 原動性

従来の視聴覚メディアは、教師が指導内容をクラス一斉に提示する際の補助として、主に役立っていた。手押し車のように、教師が常に直接操作して進行をはかる必要があった。マルチメディアでは、特定の内容・手順を仕組んでおけば、あるいは、仕組んである教材を選びさえすれば、教材の提示・説明・発問・学習者の反応の受信・その正誤の判定と告知・記録・適切な次問の選択などに至るまで、そのつど個々に直接教師が細かく介在しなくとも進行する。つまり、原動機のついた車のように、授業そのものの補助として役立てることができるようになった。

### 3) 応個性

原動性があるために、これを個々の学習者に適用すれば、一定の指向性の下に各個人に最も適し

た進度や内容量の学習が展開できる。したがって落伍者という概念がなくなるが、進度差の処理方法をあらかじめ考えておく必要がある。1つの学習単位ごとに、あらかじめ当人の取り組む作業を選別するステップを配置（カフェテリア方式）したり、作業を細分化して段階的に配列し、到達点に幅を持たせるなどの策があるが、これを外的進度差対応という。これに対して、問題文の提示時間や、そのヒントの質や量、英文を聞かせる場合のポーズの長さの加減など、発問の難易による操作もあり、これを内的進度差対応という。

### 4) 耐復性

ことばは習慣であり、習慣形成には反復が不可欠である。ところが、全く同じ条件での知的練習の単純な反復は、飽きがきて注意が散漫になり、効率が落ちる。マルチメディアでは、英文音声という1つのメディアの同一刺激の反復にも、これにともなう映像メディア面をそのつど変化させることによって、常に新鮮さを保つことができる。

### 5) 補述性

述べるべき内容を、ことばを用いずに描写できる場合が少なくない。Hello!の一語にしても、声の調子や映像によって、それがいつ・どこで・誰が・誰に・何故言ったかが汲み取れる。日本語を介さない意味理解、文化的背景や習慣の理解に映像と音声の合体は非常な強味である。また、教材編成上で、使いたくない未習の表現を避けてストーリーを展開できる点も大きい。これは、マルチメディアになって初めてではなく、映画やビデオの特性がそのまま引き継がれてのことである。

### 6) 部分性

全域性、原動性、応個性があっても、これによって英語学習のすべてが行われるものではない。せっかくのマルチメディア教室での授業であるからそれは大いに利用されるべきであるが、あくまでも授業の一部である。教材の選択と配置、全体進行の管理・評価、学習者への激励、質問等への個別対応など、教室教師への期待もますます大きい。生身の人間相手の言語活動など、他の英語クラスとのカリキュラムの調整も必要である。

### 7) 寄合性

マルチメディアの教材は、せっかくある各種の

機能を活用しようとして、一般的に大規模なものが多い。また、個別学習によって、とばして学習したり、未利用になる部分も、原理的に出ざるをえない。また、制作者側も、できる限り多くの要望に応えようとして、結果的に非常に多機能になっている場合が少なくない。つまり、幅広い大勢の要望や期待の寄り集まつたものである。したがって、検定教科書のように、隅々まで全てを扱うことが前提でなく、役に立つ部分をいかに上手に拾い出して使い、残りを「使わず捨て」にするかが活用のポイントになりそうである。

#### 8) 汎用性

活字によるテキストを作るだけでも相当の経費がかかる。これに音声・音楽・効果音などが不可分のものとして加わり、多量の映像や挿し絵、それに「使わず捨て」覚悟の多彩な機能を盛り込もうとすると、制作費のかさばるのも無理はない。一方で、目下急増中とはいえない数の新L Lの、しかもその生徒数ではなくマルチメディアパソコンの数だけ、場合によっては1校1つという微々とした販路では学校用に特定した教材の出回ることは期待薄である。このようにして、商業ベースの英語のマルチメディア教材は、その多くが当分は個人をエンドユーザーとした一般市販性のある姿をとることが予想される。

### 3. 教材の現状と今後の可能性

マルチメディア教材でどんなにすばらしいことができるか、詳細はこの後の各記事に委ねるとして、大まかに種類別に代表例を見ておこう。

ヒアリングの力をつけるために、紙芝居をしている感じで物語を楽しめるDynabook シリーズ、もちろん途中で必要な部分を何度も聞き返せるし、英文・和文で確認もできる。少し進むごとに簡単な確認問題が1つ間にに入る。答の正誤に応じて、自動的に発問の難易度が変わり、英文中のポーズの長さが調整されて、学習者の力に応じた提示に調整される。応答が途切れるとAre you there? と注意されるし、それでも反応がないと、自動的にプログラムが終了する。章ごとに練習問題もついていて、スコアも出る。

話す力の第1歩として、マイクに向かって英文をある程度正しくまねて発音しないと先に進めない作りのソフトや、波形の出るものもある。

本を読むに際しては、声に合わせてテキストの色が変わってゆくDiscis Bookシリーズ。クリックすれば、その部分の日本語も聞けるし、音響効果や背景音楽もつけられる。解らない単語をクリックすれば、発音や意味が確認できる。クリックした語の単語帳も自動的に作ってくれて、暗記作業に役立つ。美しい挿し絵のほとんどどこをクリックしても、その部分の名称を声や綴りで教えてくれる。

受験勉強用に実際の入試問題を材料にして、本文はもとより、単語・熟語の発音や解説、例文を参照したり、文脈をとる練習のできるReading Magicなどの作品もある。

会話の練習用に、概要の把握から細部の理解まで、各章ごとに3ラウンドで積み重ねる独特の構成をとったLisnovate、会話や語句・文法・歌など英会話総合のBBC English、ゲーム感覚で学習者の応答に応じてストーリーの変化してゆくNova City、その他にも英検対策や、絵による文型練習のRosetta Stoneなど、かなりの作品が出回ってきた。また、英語のマルチメディア専門の雑誌English Networkには、映画、TV (CBSドキュメント)、TOEICミニテスト、英語マルチメディア関係のフリーソフトなどを毎号CD-ROMに収録して添付している。

読み・書く面では、何と言ってもインターネット利用は実際的であるために迫力がある。このあたりが突破口になって、英語を習ってからその英語の利用に取りかかるのではなく、日本語を介さずに英語でbilingualに育ちつつ英語を習うという進み方も一方で考えられてよいのではなかろうか。その目で見れば、英米の小・中学生向き、あるいは一般向きのあらゆるマルチメディア作品から候補を選んでくることができよう。わかる部分だけがわかればよい。motivationこそが学習の最大の鍵であり、マルチメディアはそれをかき立てる要素を限りなく持っているのである。

この場合はしかし、従来あまりにも慣れ親しんできて、教育にはこの道しかないと考えてきた行

き方を、時として一步広げる必要がありそうである。すなわち、通常は英語の毎時間の指導にはテキスト上の進度の目標があり、予定された新語・新文型があって、その導入・展開・定着が最大の関心事であった。評価は全て目標に対する到達度で測られ、無理のない進行のために教材は易から難へ整然と配置され、授業は教室で1人の教師によって一斉進度で行われるというものであった。例えばインターネットの場合、そこには新語も新文型も何が出るかわからない。試験で確かめるような到達度もありえない。教材の配列が柱ではなくて、学習者の興味・関心が柱となって、全く個々に多岐な経験を深める中に学習が展開される。学校教育における体育祭、文化祭、クラブ活動といった教科教育以外の学びに対するとらえ方が、こんどはその教科教育の中でも持ち上がってきただと見ればよいのか、今後の展開を見守ることになる。

広がりに対して、逆に非常に精密な取り組みも可能性として考えられる。ことばの要素の組み合わせは無限であるが、要素そのものの数は手の届かない範囲ではない。例えば学習する単語は、指導要領によれば高等学校までで2,900語である。数え方にもよるが、文法項目にしても100にも満たない。個々の生徒が、そのどれを習得したかを、取り組んだマルチメディア教材への反応を解析して、毎時間ごとに個人別に詳細に記録することは、パソコンにとっては極めて容易なことである。相当な人数が1台のパソコンに掛かったとしても、今やギガバイトの記憶容量の時代であり、全く支障がない。このように個人ごとの詳細な学習カルテを保存して、次の時間の教材の解析情報と照らし合せれば、どこでこの学習者がつまづくか、何を新情報として与え、何を補えばよいか、本人が辞書やヒントを引くのを待つまでもなく、事前に瞬時に診断・予測ができる、別途蓄えられたデータベースから最も効率のよい練習課題を処方しつつ進行することができるはずである。また、映画でも新聞でも書物でも、その中味を解析にかけて本人の諸データと比較すれば、あとどのような練習を何時間積めばこれが理解できるようになるかなど、かなり精度の高い予測もできるようにな

るであろう。これをマルチメディアにおける学習歴対応トレーニングと言う。

#### 4. 問題点と対策

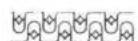
しかし、現状のマルチメディア教材には、手放しで喜んでいられない面が少なくない。

Windows95によってかなり規格の統一が図られたものの、機種や、設定された環境の微妙な違いによって、ソフトが動かなかったり、動きが不安定であったりすることがある。また、メニューバー、ツールバー、ダイアログボックスなどで操作性の統一も進んできたが、ソフトによっては未だかなり操作法が不統一であり、中には始まつたら途中で終わらないものなども散見される。

原動性がマルチメディア教材の大きな特徴であるが、これに対応するための教材そのものの作製技法や授業での指導法が未分化である。特に教師の動きに対する価値観が、何でも「手作り」を尊ぶ精神主義と、時代の流れ・環境の変化にともなう効率主義との狭間で揺れ動いている。長い年月の間に練られてきた教授法改良に匹敵する精力を原動性対応技法の開拓にも注がれなければならない。当然、新しいいろいろな授業形態が生まれてくるであろう。また、効率が高度に問われるために、英語教育の基本に帰って、校種別・学習者の目標別に、指導内容の再吟味・再配列が必要となってくる。

教材が出回りつつあるとはいえ、国内制作の絶対数はまだ少ない。これには著作権の保護と開放の問題が潜在する。学校教育用の成績や学習記録の管理ルーチン定型化の問題もある。マルチメディア教材のための基礎実験研究も進めなければならない。いろいろと夢と現実が交錯するのが現状である。その中のせっかくのマルチメディアへの取り組みである。その研修や情報交換にも、今後はインターネットなどを存分に活用して力を合わせて行きたいものである。

(かねだ まさや／名古屋学院大学)



## 急速に進む学校でのマルチメディア活用

佐藤 勉

### I はじめに

今まさに平成の教育改革といわれ、国を挙げて21世紀に生きる子供たちに必要な資質や能力を育成するための施策が次々に展開されつつある。この教育改革の諸目標の実現を促進していく手段の一つとして、マルチメディアを活用することが期待されている。

その中で文部省では、平成元年3月15日に学習指導要領の改訂を行った。今回の学習指導要領の改訂は、生涯学習の基礎を培うという観点に立ち、21世紀を目指し社会の変化に自ら対応できる心豊かな人間の育成を図ることを基本的なねらいとし、次の4つの方針に基づいて行ったものである。

- ①心豊かな人間の育成
- ②自己教育力の育成
- ③基礎・基本の重視と個性を生かす教育の充実
- ④文化と伝統の尊重と国際理解の推進

学習指導要領は、これらの4つの方針に基づいて改訂されたが、特に、学校教育の改善としては次の2点に留意している。

まず第1は生涯学習の基礎を培うことである。情報化や国際化などの社会の変化は、今後ますます拡大し、加速化して進展することが予想されている。このような中で健全な社会生活を営んでいくためには、学校教育における学習のみではなく、いわゆる生涯学習として常に新たな知識や技術の習得が必要になる。

特に、義務教育である小・中学校教育においては生涯を通して学び続け、たくましく生き抜いていくための基盤となる力として、自ら学ぶ意欲と社会の変化に主体的に対応できる能力の育成が求

められている。特に情報化に関しては、情報を正しく理解し、自ら主体的に考え、判断できる能力や態度を育成することが大きな課題であるといえる。

昭和62年の教育課程審議会の答申によると、学校教育における情報化対応のねらいを、「社会の情報化に主体的に対応できる基礎的な資質を養う観点から、情報の理解、選択、処理、創造などに必要な能力及びコンピュータ等の情報手段を活用する能力と態度の育成」としており、いわゆる情報活用能力の育成においている。そのため、発達段階に応じた指導や情報機器の利用のあり方を十分に検討しながら、教育活動全体の中で、マルチメディア等の情報媒体・機器の適切な活用体験等を通じ、情報処理・活用能力の育成につとめていくことが重要である。

### 2 マルチメディアの進展

今やマルチメディアということばを耳にしなかったり、目にしなかったりする日は一日として無い状態である。マルチメディアということばについては現在いろいろな定義がされているが「マルチメディアの発展に対応した文教施策の推進に関する懇談会」(以下マルチメディア懇談会とする)の審議のまとめによると

- 文字、数字、映像、音声等の多様な情報の一體的な取り扱いが可能であること。
- 一方的な情報伝達にと留まらず、利用者による主体的な情報の編集、加工、検索等を可能とする機能を持つこと。
- 高度情報通信ネットワークによって相互に結

ばれることにより、上記のような特性を生かした多様で大量の情報交換が可能になること。

等の特色を持つ情報媒体・手段であると説明している。国としてもマルチメディア時代の到来を見越していろいろな取組が進んでいる。平成6年8月には、内閣に「高度情報通信社会推進本部」を設置し、情報化の推進に向けた取組がスタートした。その推進本部から平成7年2月に「高度情報通信社会に向けた基本指針」という報告書が提出され、この基本指針を受けて文部省でも「情報化実施指針」を策定した。

いずれにしても文部省でも学校教育における情報化、特に「マルチメディアの活用」についての施策について検討を重ねてきた。前述のマルチメディア懇談会では、具体的な物的条件整備として「21世紀初頭までに、全ての国公立の小・中・高等学校・特殊教育諸学校において、1人1台のパソコンを使った授業を行えるようにする」また「全ての都道府県に数ヵ所の教育ソフトウェアライブラリーの整備」といった整備目標が示されている。

### 3 現在までの整備状況

文部省では、平成2年度から平成6年度までの5年間で、公立の小学校で3台、中学校で22台、普通科高等学校で23台、特殊教育諸学校で5台の整備水準で計画的整備を進めてきた。その結果、平成7年3月31日現在、ハードウェアに関する調査結果では、コンピュータの設置率は、小学校77.7%，中学校99.4%，高等学校100.0%，特殊教育諸学校97.2%となっており、小学校以外は、ほぼ全ての学校でコンピュータが導入されている。(図1)

また、コンピュータを設置する学校における平均台数は、小学校6.1台、中学校23.1台、高等学校57.6台、特殊教育諸学校8.2台となっている。(図2)

機種別ではいわゆるマルチメディア対応の可能な32ビットパソコンの導入台数が平成5年度調査で初めて16ビットパソコンを上回り、現在では、32ビットパソコン(340409台、56.5%)が一番多く、次いで、16ビットパソコン(238481台、39.6%)、8ビットパソコン、ミニコン等の順になっている。(図3)

設置率の推移 (%)

	62年	63年	元年	2年	3年	4年	5年	6年
小学校	13.5	21.0	30.9	41.0	50.2	57.7	66.1	77.7
中学校	35.5	44.8	58.9	74.7	86.1	94.7	98.4	99.4
高等学校	93.7	96.3	97.8	98.5	99.4	99.7	99.9	100.0
特殊教育諸学校	49.9	62.9	71.0	77.7	82.1	86.8	92.5	97.2

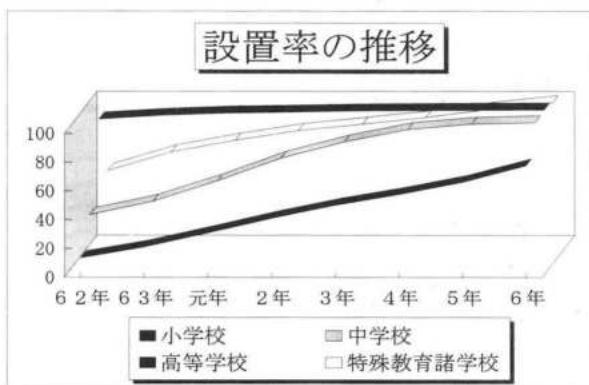


図1

設置台数推移（台）

	62年	63年	元年	2年	3年	4年	5年	6年
小学校	2.9	3.0	3.1	3.3	3.8	4.3	5.3	6.1
中学校	3.5	4.3	5.5	8.3	12.8	19.2	22.1	23.1
高等学校	19.7	25.5	29.8	35.3	40.6	46.5	53.7	57.6
特殊教育諸学校	3.3	3.8	4.1	4.6	5.3	6.5	7.6	8.2

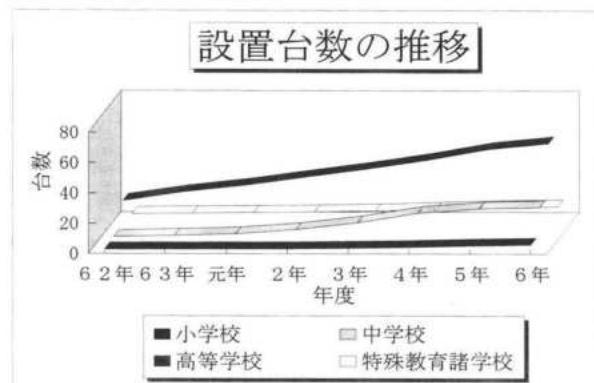


図2

機種別設置台数 (%)

	62年	63年	元年	2年	3年	4年	5年	6年
8ビット	30.3	24.0	18.8	12.7	9.4	5.9	4.3	3.4
16ビット	67.9	74.1	78.3	78.5	71.4	56.8	45.8	39.6
32ビット	0.5	1.1	2.4	8.2	18.8	36.7	49.2	56.5
その他	1.3	0.8	0.7	0.6	0.4	0.6	0.7	0.6

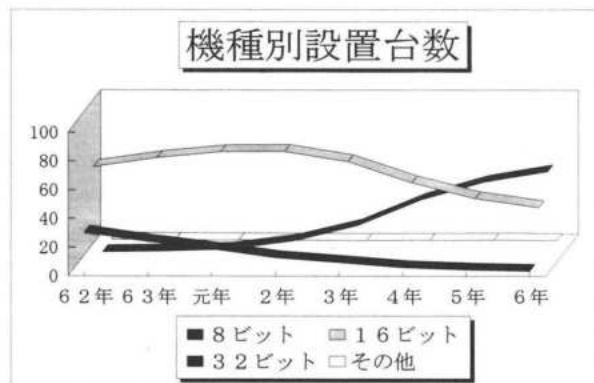


図3

#### 4 マルチメディア対応の新機種整備

前述の通り、文部省では、平成6年度までに補助事業として「教育用コンピュータ整備事業」を

進めてきた。しかし、社会の情報化はめざましく、このような情勢に適切に対応するためにも整備水準を引き上げる必要がある。このため、標準的な学校における教育用コンピュータの整備水準を平

成6年度から平成11年度までの6年間で小学校22台、中学校・普通科高等学校42台、特殊教育諸学校8台に引き上げるとした新整備計画をまとめ、6年度よりスタートした。

新たに整備される教育用コンピュータの台数は、全国数でみると、小学校25万台、中学校17万2000台、普通科高等学校3万9600台、特殊教育諸学校で2500台、総台数46万4100台となる。

また、コンピュータの技術革新は著しく、その機能や役割も飛躍的に伸びている。特に最近のコンピュータはより人間に近くなり使いやすくなってきた。また、マルチメディア化が進み、文字や音声はもとより画像、特に動画までが自由に扱える機能が充実しつつある。しかし、これまでの買い取り方式では、最低6年間の使用が義務づけられていたため、マルチメディアに対応した最新のコンピュータへの取り替えがタイミングに行えない状況であった。新整備計画では、今後コンピュータの導入経費はレンタル／リース方式での導入を前提として地方交付税により財政措置されている。

## 5 マルチメディア対応のソフトウェアの充実

ソフトウェアの整備状況については、表1のように、一校平均189.8本しか保有しておらず、平均種類数も30.2種類である。外国語に関しては図4の通りここ数年飛躍的に伸びてきているものの、マルチメディア対応のものはまだ不足しているものと考えられる。

現場の先生方から「ハードは導入されたが、ソフトが揃っていない」「購入の予算がない」という声をよく耳にする。優れたマルチメディア対応のコンピュータもソフトウェアがなければただの箱になってしまう。あらゆる教科でコンピュータの利用を呼びかけても手元に使い勝手のよい良質のソフトウェアがなければ活用の輪は広がっていない。

ソフトウェア購入の予算は、これまで地方交付税によって措置されてきたが、新たに導入または更新されたコンピュータのみが購入の対象機器になっているにすぎなかった。これに対して平成6

年度からの新方針は「ソフトウェアをコンピューター一台についていくら」というように、全ての導入台数が積算の対象になった。

学校別に一台あたりのソフトウェア経費をみると、小学校16万2000円、中学校19万2000円、高等学校34万8000円、特殊教育諸学校35万2000円である。これを6年間に分けて毎年措置される。

また、学校現場で活用できる良質なマルチメディア対応の教育用ソフトの開発を行う「学習用ソフトウェア開発事業」を6年度より実施している。

これは、新しい学力観を目指す教育を実現するためには、コンピュータを活用した指導の充実を図る必要があるが、そのためには、より実際の教育活動に即したソフトウェアやコンピュータの持つ機能・特性が引き出されるようなソフトウェアの開発が求められている。しかし、現在も学習用のソフトウェアはたくさんの種類が市販されているものの、なかなか現場のニーズに対応したものは数少ないと言われている。

そのため、文部省では6年度よりソフトウェアの開発事業にも力を入れている。これは、さまざまな教育活動の実際を充分に踏まえ、教育的観点に立ち学習に適切に対応する学習用ソフトウェアを開発し、将来的には学校に供給しようという事業である。開発の方法は、教育委員会や教育関連団体などを通じて教育関係者・企業などで構成する開発グループが事業対象になり、7年度は、1チーム約2000万円で、10チームが開発に当たったが、本年度より予算も5億円に増額し、委託件数も17チームから20チームへと拡充した。さらに来年度以降ももこの予算を大幅にアップしていくたいと考えている。

また、ソフトウェアのスムースな流通を図るために「教育用ソフトウェアライブラリセンター」設置事業を7年度より開始している。この事業は、文部省の補助事業として全国の都道府県及び政令指定都市を対象に59カ所の設置を目指している。この事業は、東京・霞ヶ関の国立教育会館にホスト局を設置し、各都道府県及び教育委員会に設置された「ライブラリセンター」とをネットワークで結び、それぞれの間で情報のやりとりを行う事業である。国立教育会館の総合センターには最新

### ソフトウェアの整備状況

平成7年3月31日現在

		コンピュータを配置する学校 (A)	ソフトウェアの保有本数 (B)	平均保有本数 B/A	ソフトウェアの保有種類数 (C)	平均種類数 C/A
小学校		校 (15,950) 18,716	本 (1,226,527) 1,651,699	本/校 (76.9) 88.3	種 (227,310) 319,342	種/校 (14.3) 17.1
中学校		(10,359) 10,452	(3,199,996) 3,873,333	(308.9) 370.6	(491,553) 565,339	(47.5) 54.1
高等学校		(4,152) 4,163	(799,911) 930,040	(192.7) 223.4	(118,693) 125,569	(28.8) 30.2
特殊教育諸学校	盲学校	(66) 66	(3,246) 3,406	(49.2) 51.6	(1,586) 1,674	(24.0) 25.4
	聾学校	(104) 103	(5,471) 6,555	(52.6) 63.6	(3,158) 3,713	(30.4) 36.0
	養護学校	(657) 710	(23,418) 28,169	(35.6) 39.7	(13,999) 17,160	(21.3) 24.2
	小計	(827) 879	(32,135) 38,130	(38.9) 43.4	(18,735) 22,547	(22.7) 25.7
合計		(31,288) 34,210	(5,258,569) 6,493,202	(168.1) 189.8	(856,291) 1,032,797	(27.4) 30.2

表1

※( )は前年度を表す。

### ソフトウェアの本数

	62年	63年	元年	2年	3年	4年	5年	6年
外国語	3507	24349	25200	50922	120760	192993	380582	529838

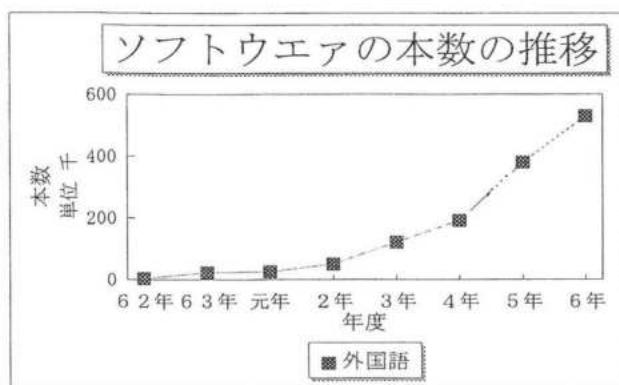


図4

の技術環境に対応したソフト、海外の優れた教育ソフト、文部省が委託開発したソフト、地方自治体の情報教育活動を支援していくためのソフト等を収集して、情報の提供を行う予定である。

また、市販の教育用ソフトウェアの2次情報についても、データベースを構築してソフトの活用事例なども含めて総合的な情報提供体制も整備していくことにしている。

さらに、本年度よりマルチメディア時代の学習形態、あるいはマルチメディアに対応した教材のあり方などを研究する「新しいメディアに対応した教科書、教材に関する調査研究」も開始することになっている。

## 6 マルチメディアの教育利用

マルチメディアの教育利用の一環として、「へき地研究開発事業」を実施している。これは、へき地学校の場合、1学級の児童・生徒数が非常に少なく社会性の育成等に問題があったり、学級数も小規模であり授業の構成にも困難がある。こうした問題の解決を図るねらいがある。具体的には、へき地の小・中学校と都市部の小・中学校とを光ファイバーで結び、テレビ会議システムなどの最新技術の情報通信設備を活用して双方向で授業を行うものである。すなわち、ネットワークでつなぐことで、バーチャルな教室空間を作りだし、その上で共同授業を行うのである。児童・生徒にとって、多様な考えの中で学習ができること、また、双方にとって、授業の内容が非常に豊かになるといったことから大きな期待を寄せている。そのため、この取組は評判も高く、特に、へき地校から「生徒に積極性が出てきた」とか、「生徒同士の交流が始まった」とか、教育効果に大きな成果が見られるとの報告もあり、他のへき地校からも大きな注目を集めている。そして、学校間をオンラインで結ぶことで双方の交流が始まると共に、さらにオンラインへと発展することで、互いの交流が深まり、発展していくれば、学校教育そのものがさらに豊かになるものと確信している。

## 7 すべての教員に コンピュータリテラシーを

マルチメディア懇談会の審議のまとめによると、高度情報通信社会の発展を支える高度な専門性を身につけるための教育の充実を図ると共に、教員等については、西暦2000年までを目途に、すべての教員がコンピュータの活用に関する基礎的な知識・技術を身につけるなど、専門的な人材の育成の必要性を提言している。特に教員については、現在、養成、研修の各段階で情報化の進展への対応が図られてきているが、今後、その内容の一層の充実が望まれており、その中で情報教育を推進する中心的な役割が期待される中堅教員等について、従来の研修体制との整合性を図りつつ、コンピュータ関連の基礎研修の充実を図り、情報処理・活用能力を向上させることが求められている。

文部省においてはマルチメディアの発展に対応して必要となる専門的な人材の育成を目指して、数学、理科、技術の教員を対象に次のような研修講座を毎年実施している。

① 指導主事講座	数学	10日間
1会場	47名	
② 指導主事講座	理科	10日間
1会場	47名	
③ 担当教員講座	中学数学	5日間
3会場	各48名	
④ 担当教員講座	高校数学	5日間
3会場	各48名	
⑤ 担当教員講座	中学理科	5日間
3会場	各48名	
⑥ 担当教員講座	高校数学	5日間
3会場	各48名	
⑦ 担当教員講座	中学技術	10日間
6会場	各40名	

本校座を受講した先生方を中心に、それぞれの都道府県で独自の研修を実施している。このようなマルチメディアを中心とした最新の専門的な研修とは別に、その一方で、教職経験者に対して10年目研修と、20年目研修を実施してきた。これは一定年数が経過した全教員が研修を受けることに

なっている。この研修の中でコンピュータの基礎研修を充実しようと考えている。この内容はあくまでも初心者を対象におこなうものだが、全ての教員にコンピュータに接してもらうことで情報教育に理解を深めてもらう。

## 8 情報処理技術者の学校配置事業がスタート

学校におけるコンピュータの導入整備が急速に進んでいる。しかし、コンピュータを操作できる先生が37.5%と少なく、(表2)、(図5)情報教育の進展の問題点として指摘されている。

その対応策の一つとして、校内において先生方の研修やコンピュータ利用授業における指導の援助等のできる専門家がいれば助かるとの現場の声があった。文部省では、コンピュータ教育開発センター(C E C)の支援のもと、企業の協力を得て「情報処理技術者等委嘱事業」をスタートさせている。

この事業はC E Cの呼びかけにより各企業の協力を得て「情報処理技術者等」の人材バンクを設置する。そして、教育委員会からの委嘱計画に応じて、その人材バンクから適当な候補者を紹介するシステムである。

## 9 マルチメディア活用の展望

前述の通り、新しい学力観は変化の激しい時代に主体的に生きていくための資質や能力を育成することにある。具体的にいうと、例えば、自分の課題を見つけ、自ら考え、主体的に判断し、表現するなど、問題発見、問題解決、問題提示等の能力である。さらに、情報活用能力で考えると自分にとって価値ある必要な情報を収集し、選択し、再構成し、新しい情報を創造し、表現、発信、伝達していく能力であるともいえる。

これらの学力観の育成を目指す学習指導は、生徒にないものを一方的に教え込むという考え方から生徒が本来もっているものを見つけて、引き出し、育てて、伸ばしていくという発想の転換をすることである。すなわち生徒の主体的な活動を支援する道具として、コンピュータを位置づけるこ

とが大切である。外国語においても、課題研究や調べ学習、制作活動、コミュニケーション活動など、体験的、問題解決的な活動と連動した形での活用方法が望まれる。マルチメディアを理解するキーワードにはデジタルとかネットワークとかインターネット(双方向)とかいわれている。すなわち多様かつ大量のデジタル情報を高速度の通信網を経由し双方向でやりとりするということであり、そういう基盤整備がマルチメディア社会実現の大きな要素となる。

日本でもアメリカの情報スーパーハイウェイ構想に対応して、光ファイバー網の整備計画が郵政省の電気通信審議会の答申により進められている。それによると、2000年までに行政機関、図書館、学校、病院、福祉施設等を結び、2005年までには10万人都市、2010年までには全家庭をネットワークするという。NTTによると全国の大都市間は既に敷設が完了しており、その実現は予想よりも早くなることが期待されている。

そして、現在のようなパッケージ型マルチメディア利用からネットワーク型マルチメディア利用への移行は急速に進展するものと思われる。このような高度情報化社会においては、すべての人々が情報と主体的に関わることが可能な時代になり、マルチメディアは今まで情報を一方的に受信するだけでなく発信者としての資質や能力も要求されることになる。

また、学校教育においても、教室や学校の中での教育からその枠を越えて、時間的、空間的に広がった知的創造の場を実現することになる。例えば、インターネットを活用すれば、今までの学校教育では、いろいろな制約があり不可能とされてきた、世界各地の自然や社会現象へのリアルタイムでのアクセスといった能動的な学習が実現するとともに、情報発信による高度の思考活動や豊かな表現活動の実現が可能となる。すでに、インターネットで海外の学校とコミュニケーションを深めている実践校によると、異文化の理解、人種差別、エイズ問題、人権問題、環境問題などをテーマにして共同作業を行っているとの報告もある。

このようなコンピュータやインターネットの活用は、教室が世界へとつながる窓となり、教育環

## 教員の実態

平成7年3月31日現在

		教員数 (A)	コンピュータを操作できる教員数 (B)	割合 B/A	(B)のうちコンピュータに関して指導できる教員数 (C)	割合 C/B
小学校	人	人 (423,028)	人 (103,126)	% (24.4)	人 (35,206)	% (34.1)
		420,829	119,096	28.8	42,878	36.0
中学校	(259,589)	(107,720)	(41.5)	(47,424)	(44.0)	
	254,703	112,912	44.3	51,121	45.3	
高等学校	(214,555)	(101,784)	(47.4)	(42,520)	(41.8)	
	213,863	106,776	49.9	45,383	48.5	
特殊教育諸学校	盲学校	(3,336) 3,317	(1,717) 1,874	(51.5) 56.5	(603) 682	(35.1) 36.5
	聾学校	(4,660) 4,641	(1,598) 1,774	(34.3) 38.2	(642) 804	(40.2) 45.3
	養護学校	(39,414) 40,168	(7,837) 9,520	(19.9) 23.7	(2,821) 3,572	(36.0) 37.5
	小計	(47,410) 48,126	(11,152) 13,168	(23.5) 27.4	(4,066) 5,058	(36.5) 38.4
合計		(944,582) 937,521	(323,782) 351,952	(34.3) 37.5	(129,216) 144,440	(39.9) 41.0

表2

※( )は前年度を表す。

## 操作可能教員数 (%)

	3年	4年	5年	6年
外国語	25.7	30.9	35.5	37.8

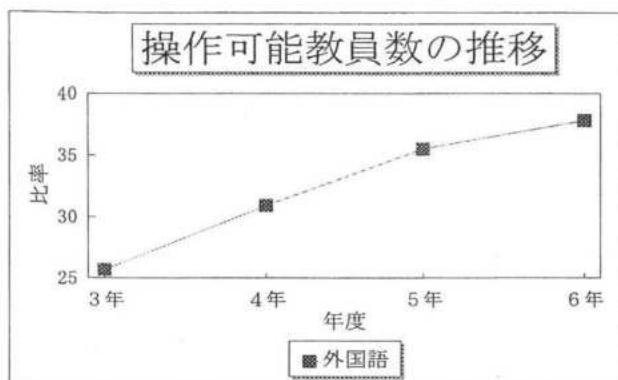


図5

境を一変させる可能性を持っているといえる。

具体的な例としてすでに、ネットワーク利用環境提供事業（通称100校プロジェクト）によると平成6年2月から回線、通信機器、クライアント／サーバの設置が開始され、昨年の6月にはすべての対象校でインターネットへの接続とサーバの稼働が確認され、名実ともにスタートしている。対象校における今年2月現在のWWWサーバホームページの公開状況は学校独自のデータ公開が97校あり、その内英語で公開されているものが26校ある。そして、それぞれに特徴ある自主企画を運営している。

例えば、千葉県の東金女子高校では、アメリカのビル・アーネット氏の手によるThe nine Planetsを翻訳ボランティアを募って翻訳し、日本語版のミラーサイトを運営している。また、広島県の広島大学附属福山中学校では広島大学と共同で酸性雨の調査を企画し、観測機器の提供と調査結果の分析、公開を行っている。さらに、佐賀県の武雄北中学校では、みさと天文台の土星の輪の観測情報を佐賀大学のリフレクタを経由して、武雄市のケーブルテレビ放送し、中学生に土星の輪が消える現象をリアルタイムで観測させた。

#### —マルチメディア関係新刊から—

『学校の先生とパソコン 幼稚園から高校、特殊教育学校まで19人の教師に聞く』 館石万里著、A5判、197頁、1,800円 サイビズ

遊びを通じて豊かな感性と知的好奇心を育てる幼稚園、クラス文集の作成、アルバム作り、教材作成に取り組む先生方、生徒のグループ研究プレゼンテーション、準備委員会を作り半年間の検討を行った後に研究会を組織して取り組んでいる学校など、パソコン活用の実践を具体的に紹介。あわせて、パソコンを始めた契機とその後の取り組み、パソコン教育を支え自宅でも研究に励む先生方の姿を活写し、これからパソコンを始めようとしている先生方にも勇気づけになる。

#### 10 今後の課題

100校プロジェクトの実践校によると、インターネットでは日常的に外国語に接するため、外国語に対する抵抗感が自然と無くなり、逆に自分を表現してみたいという内発的な動機付けが高まり、自己表現の手段として外国語を学習するという意欲的な取組をするようになったという。

しかし、次のような課題も浮き彫りにされてきている。

- ① ネットワークを利用する際のモラルの育成をどうするか。
- ② 有害情報にどのように対処するか。
- ③ 外国語教師とインターネット担当教師とのTTなどの柔軟な授業運営のあり方。
- ④ 生徒の主体的に取り組む学習を教師としてどのように支援していくか。
- ⑤ 本当に必要な交流相手をいかに探し出し、国際間の信頼関係を築いていくか。

等である。

いずれにしても、担当教科に関係なく教師自身が情報化社会に対応した広い意味での情報活用能力を身につけることが緊急の課題となっていることは疑う余地のないところである。

(さとう つとむ／文部省)

『マルチメディアが教育を変える 米国情報産業の狙うもの』 中村悦二・小門裕幸著、四六判、209頁、1,500円 日刊工業新聞社

公立学校において、生徒10人に1台以上のコンピュータ普及率といわれるアメリカのマルチメディア教育の現状を実例中心に紹介。連邦政府の政策、各州の教育改革、学術・教育ネットワークの整備・推進、情報産業の教育分野への進出、教育ソフトの開発競争、そして新しい教育の実践などを詳述し、マルチメディア時代の教育のあり方と可能性を示す。副題は挑戦的だが、教育改革に取り組む政府、企業、市民・教師・保護者の活動報告は、日本における教育改革の進め方にも参考になろう。

# インターネット・ツールとしての英語

## —世界を結ぶ共通語への意識変革

阿部 一

### 0. はじめに

今、急激な勢いでインターネットという名の巨大な波が世界中に押し寄せている。インターネットはコンピュータによるデータ通信の標準規格であり、極めて便利なコミュニケーションの道具である。このまま普及していくけば、21世紀にはデータ通信の95%以上がインターネットを通じることになる、と予測されている。

ジョージ・ギルダーはその著『テレビの消える日』の中で、近い将来、情報が中央から末端へと一方的に流れていくテレビの時代から、端末がそれぞれ情報の受・発信を行なうパソコンの時代へと移行していく、と予言したのはほんの数年前のことであった。事実、アメリカ国内のパソコン販売台数は昨年ついにテレビを追い抜き、今や3000万台以上のパソコンが各地で情報の受・発信を行なっているのである。

日本国内に於けるパソコンの販売台数に目を向けても、同じような推移が見てとれる。現在、前年比で約150%ほどの伸び率であり、確実にアメリカと同じようなコンピュータ化が進んでいるといえる。このコンピュータ化の特徴はマルチメディアであり、そこでは、インターネットなどの通信機能をはじめ画像処理や音声処理などの機能など数多くの仕様が考えられるが、現時点ではやはり通信機能の質及び量の充実ぶりには目を見張るものがある。

### 1. ネットワーク化と情報リテラシー

現在、通信機能を使っての端末同士のネットワ

ーク化での立役者はインターネットであるが、インターネットの持つインパクトは單に我々が電子メール（E-mail）をはじめとした日常生活の中で情報の受・発信を行うという便利さを享受するだけでなく、実は必要に応じて国際的な規模での膨大な情報アクセスができるか否かということに関わってくる。すなわち、必要な情報を素早く入手できる人と、そういう情報ネットワークから全く疎外される人に二分されていく怖れがある。いわゆる、「情報リテラシー」の問題である。

しかし、情報リテラシーといつても別に恐れる必要はなく、要はこれまで一部の人々に占有されていた（というより、どこで入手すればよいか分からなかった）情報がインターネットを使うことでだれでもが手軽に利用できるようになったという点で歓迎されるべきだろう。つまり、これまで学校なら教師→生徒、会社なら上司→平社員のように教師や部・課長あるいは社長を頂点としたピラミッド構造の中で、知識・情報を上から下へ一方的に授ける垂直型のコミュニケーションが中心だったのに対して、インターネット社会ではこと情報データへのアクセスという点では上司でも平社員でも完全に対等である。「情報の水平化」が起こっているのである。

### 2. インターネットと情報の水平化・地方化

ギルダーは我々のコミュニケーションがこれまでのような中央集権的構造が分散することでパソコンレベルの超分散的構造へと変化していくのだと述べているが、そうなると21世紀文明はインターネットをはじめとしたマルチメディア抜きには

考えられないものになるだろう。これまでの中央集権的な垂直型社会では、情報の独り占めが行なわれたし、ある分野や業界で専門家や学者として君臨するためには、国内外の情報を攢んでしかも特定の“ネタ元”を海外の特殊な文献などに持つことが多かった。しかも、社会の構造上それらのネタ元は一般の人々にはアスセスの仕様がなかつたのである。

しかし、インターネット時代ではネットをうまく使いこなすことで、地理的なハンディ無しで個人が大組織に立ち向かえることになる。日本のみならず世界各国の機関や研究者に直にアクセスできるようになる。(その意味では「地方の時代」をある意味で一足先きに具現化したものといえる)。一昔前なら全く不可能だった海外の学者や政治家に質問したり、こちらの意見を伝えたりといったことが時にはリアルタイムでできる。つまり、個人でも世界的に受け手がある情報発信基地になることができるというのである。また、必要な文献やら資料にしても以前に比べると格段に調べやすいし、入手しやすくなっている。

### 3. ネットワーク社会の英語教師

さて、このような“超情報化ネットワーク社会”で我々英語教師が留意すべきことは一体何であろうか。まず、情報リテラシーについて触れる。現時点では別にインターネットやコンピュータを使っていなくてもいきなり時代に取り残されるということはない。ただ、ほとんどのデータが英語なので必要な人には大いに役立つし、使い方によっては授業をサポートしたり教材作りには面白いヒントを与えてくれることはまちがいない。

英語教師でパソコンやインターネットにはまっている人の中には、「これから英語教育はインターネットだ！」という過激な人もいるが、もちろんインターネットが万能ではあり得ない。大切なことはパソコンやインターネットで何が役に立ち、何が役に立たないのかということを自分できちんと理解した上で利用できるところをうまく利用することである。

インターネットの持ち味は大ざっぱにいうとそ

の情報性と迅速性にある。まず、その情報性についていって世界の主要な大学や図書館並みのデータベースを必要に応じて検索したり、調べたりできるといえばその規模と便利さが分かるだろう。現在では高速の検索ソフトも無料で配布されているので、自宅に居ながらにしてcorpus linguisticsやcognitive scienceといったキーワードを入力すればおびただしい量の文献リストや要約などが瞬時に入手できる。しかも、定評のあるサイトは数日ごとに情報を新しくしているので助かる。たとえば、筆者の関係する分野(applied linguistics)なら6月14日にThe Applied Linguistics WWW Virtual LibraryのData Archives Sectionにアクセスしたところ、Last modified: 12 June 1996と出ており、ほんの数日前に改訂したことが分かる。

### The Applied Linguistics WWW Virtual Library

#### Data Archives Section

Last modified: 12 June 1996

- Empirical pedagogy/interlanguage databases (Birkbeck College, University of London): under preparation:
  - CALL
  - Cross-linguistic Influence
  - Fossilization
  - Learning Strategies
  - Learning/teaching Strategies
  - (Putative) positive transfer
- Aboriginal Studies Electronic Data Archive
  - Archives of the Center for Computer Analysis of Texts (CCAT)
  - Text Files and Computing in the Humanities
  - TESL Gopher
  - Resources in Language Testing
  - The Multilingual PC Directory
  - CELIA EFL CALL software archive
  - Various corpora
  - Parallel corpora
  - Indiana University Library Electronic Text Resource Service for links to language and linguistics materials, free software and electronic texts
  - International Association of Learning Laboratories software database
  - Collaborations
  - The ShATR multi-simultaneous-speaker corpus
  - Center for Electronic Texts in the Humanities (CETH)
  - Translation software

Applied Linguistics Virtual Library | Applied Linguistics at Birkbeck College |  
Venue Internet Ltd

This page has been visited 2,129 times

Gutenberg approved



This Virtual Library is maintained by Larry Selinker (Department of Applied Linguistics, Birkbeck College, University of London), lselinker@app-lng.bbk.ac.uk and Alex Nunes (Venue Internet Ltd), alex@venue.co.uk. See the submission guidelines if you would like to contribute something to this list.

Web space and technical consultancy for the Applied Linguistics Virtual Library provided by Venue Internet Ltd

WWW Virtual Libraryのアドレス  
<http://www.vlib.html/>

#### 4. インターネットの情報性を生かす

このVirtual Libraryは各ジャンルで現在積極的に進められているもので、たとえば語彙研究で有名なP. MearaなどはUniversity of Wales SwanseaにVocabulary Acquisition Research Groupを作り、そこでVirtual Libraryを開いており、出版予定の論文を含めて各国の研究者に入手できるようにしている。もちろん、直接Mearaに読後感想を送ったり、こちらの文献を送れば国際的な開かれたアカデミック・ディスカッションが可能となるし、他にも数多くあるResearch GroupやForumなどに参加しネットを通した共同研究をやることも可能である。

[vlib.html / www.swan.ac.uk](http://vlib.html / www.swan.ac.uk)

University of Wales Swansea

Vocabulary acquisition research group

Virtual Library

The virtual library contains unpublished papers in the area of vocabulary acquisition and word handling in an L2. Most of the papers have been produced by the Vocabulary Acquisition Research Group at Swansea, but work by close colleagues is also included in the list.

The following papers will be available shortly in the Virtual Library.

Patsy Martin Lighthow, Randall Helter and Paul Meara

*Classrooms as lexical environments.*

status: discussion paper

date: October 1995.

John Shillie

*The application of Reach modelling to Yes/No vocabulary tests.*

status: discussion paper

date: April 1995.

Norbert Schmitt and Paul Meara

*Researching Vocabulary Through a Word Knowledge Framework: Word Associations and Verbal Suffixes.*

status: submitted for publication

date: September 1995.

G Vives Boix and Paul Meara

*A note on the reliability of Yes/No Vocabulary tests.* status: discussion paper

date: October 1995.

[back to CALS Research Home Page](http://back to CALS Research Home Page)

p.m.meara@swan.ac.uk 4 December 1995

Meara氏を中心とした語彙研究グループのホームページ、E-mailアドレスはp.m.meara@swan.ac.uk

研究とまではいかなくても、インターネットでブラウジングしながら世界のホームページを見て歩いたり、時には面白そうな材料を教材化のためにダウンロードして歩くのは実に楽しいものである。最近、筆者が注目しているのは画像と音声をそのまま生かした有名人のインタビューライブリーである。通常の文字情報でないのでダウンロードが時間がかかることもあって実にやっかいだが、資料としてはそれぞれ一級品である。(なお、

音声の再生にはフリーソフトのReal Audioが使いやすい。)

#### 5. 英語のコーパス作りをやってみる

さて、コンピュータが教材化や指導の手助けとして大いに力を発揮するのは、英語のコーパス作りが割と容易にできるようになったからである。テキスト・データは若干古い文学作品などは各地のArchiveでほとんど無料で手に入るし、「コーパスの作り方の手引き」や各種の「検索ソフト」も無料かシェア・ウェア(少しの分担金を払う)という形で簡単に入手できるので到れり尽せりである。

KWIC/KWOC形式対応コンコーダンス操作ツール

#### KKC for Win16 ver.0.15

with KKC機能拡張DLL KKCITOOL.DLL ver. 0.03

(c) by 浅口 駿(HAMAGUCHI Takashi)

『英語教育』95年8月号pp.29-31の「パソコン利用による自学自習のすすめ」のなかであたかもフリーソフトであるかのように紹介されていますが、このソフトはユーザーに開発経費の分担を御願いしているシェアウェアですので、お間違えのないように。

はじめに  
再配布について  
使い方  
著作権  
免責  
サポート場所  
テキストデータ高CD-ROM情報  
KWIC形式の使い方  
プログラム名について  
生成の定位  
御要望の優先順位  
参考文献  
シェアウェア  
KKCITOOL.DLLについて  
バージョンアップについて  
削除  
KKC for Win16 Q&A  
不具合が見つかったら  
履歴  
ではごゆるりよ

国内では定評のあるKWIC/KWOCシェアソフトの新バージョン「KKC for Win 16 ver. 0.15」

ただし、ある程度のお金を出す覚悟があるのなら、現在BNC (British National Corpus) や COBUILD (Bank of English Corpus) などの億単位のコーパスをオンラインで使うことができるようになってきた。

うまくインターネットを使うことで世界的な規模の情報検索を素早くしかも余録付きで行なえるわけである。それに加えて、ネットを通じて共同研究を行なったり友達の輪を作ったりといったことも可能だということになる。そうなると、この“ネットワークキング”という概念はこれからの方々にとっては文字通りの国際化や国際理解につながっていく重要な鍵であるともいえよう。

## 6. コミュニケーション・ツールとしての英語

つまり、現在の英語教育の目標がコミュニケーション能力の習得ということなら、インターネットにはそこに入り込みさえすれば文字通り受信の機会も発信の機会も十二分にあることになる。もちろん、情報データのはほとんどは別に外国语学習に加工されているものではないので、学習の途中の人にはきついところもある。とりあえず、だれでも入りやすい受信タイプのインターネット利用としては、New York Times紙やUSA TODAY紙あるいはCNNなどが配信しているニュースで興味のあるものを読んでみることが挙げられる。

従来の新聞やテレビとこれらが違うのは特に興味のあるネタに関しては、そのホームページに飛んで電子メールのアドレスに「投函」すれば、たちまち一次情報を得ることもできるという迅速性にある。たとえば、CNNならCNN Interactive (<http://www.cnn.com>) が情報源になる。その意味では確かに電子メールは発信面で速度と広がりを持った実に便利なコミュニケーション・ツールといえよう。

現在、インターネットの英語といってもそのほとんどが文字情報で行なわれている。その点ではコミュニケーション・ツールといっても読む力や書く力の養成には役立つものの話す力や聞く力の養成にはあまり役に立たない。その意味では閉じられたソフトであるとはいえCD-ROMなどにはバーチャル感覚溢れた実に興味深い“edutainment”的英語教育ソフトが少なからず登場していくことを考えれば今後の大きな課題である。

ただし、この面で先行しているアメリカでは使用中のCD-ROMから関連するホームページに飛び、さらに詳しく調べたり発展学習を行なえる「インターネットとの融合型百科事典」や「インターネットとの融合型教育ソフト」がもう近々登場する予定だという。

また、インターネットは国際的にはそのほとんどが英語の情報が飛び交っているもので、量的にはやはり受・発信ともにアメリカが圧倒的に多い。

しかし、ネット上で行なわれるディスカッションやチャットあるいは電子メールを見ると、英米語の規範からはずれたものが少なくない。それでも皆、気にしないで堂々とデータ通信を行っている。そう、我々英語教師がインターネットから学ぶべきは実は“国際コミュニケーションの手段としての英語”的将来的な姿とそれに対して我々がどんなスタンスを取り、それをどう現場の指導に生かしていくかという点なのかもしれない。

もっとも、現時点では電子メールを使いこなすためにはやはりある程度の英語力は必要となる。そして、その書く力を養成するのに手助けしてくれるサイトもあるので利用しない手はない。

## 7. おわりに

将来的には、マルチメディアではより自然な音声やバーチャル感覚の動画をフルに使ったネットワーキングが行なわれるようになるだろう。そうなると、今はあまり問題視されていないコミュニケーションの際の「相互交流性」といったことがより現実的な問題としてクローズアップされていくことになる。(ディスプレイなどを通じた直接対面型の会話が可能になるからである)何といっても本格的なコミュニケーションは相手があって成り立つわけなので、参加者同士の駆け引きや呼吸あるいは間合いといったものをトータルに捉えることが大事なわけである。

もちろん、その頃にはハードやソフトも格段に技術革新が行なわれ、学習者は今のA-V機器やDVDあるいはCD-ROMでは味わえないような、時空間を超えたバーチャル感覚や相互交流性を文字通り教室で自ら体験しながら、世界の人々と4技能をフルに駆使したコミュニケーション活動を行なっていることになるだろう。そして、そういった「仮想空間」の中の学習者がそれだけに満足することがないように、実世界のすばらしさや、そこで行なわれるコミュニケーションが折りなす愛や涙のドラマに気付かせるようにするのも我々教師の重要な役割になってくるといえるだろう。

(あべ はじめ／獨協大学)

## マルチメディア学習環境における英語授業

見上 晃

### 基本的な現状認識

#### マルチメディアとは

マルチメディアという言葉が聞かれるようになって久しい。ここでお話しするマルチメディアは複数のメディアという意味ではない。複数のメディアが存在するのはメディアミックスと考えられている。マルチメディアはコンピュータが必要と判断した映像、音声、画像、文字を提示し、人間が入力したデータを保存、提示、比較、判断してくれるシステムで英語教育では更にこれにインター・アクティブ性を加えたものと筆者は定義している。つまりコンピュータがテレビやテープレコーダやスライドの役割と教師の役割の一部を行ってくれるシステムでしかもこれらが1つの統合した働きをしてくれるものである。

#### アナログからデジタルへ

コンピュータの世界では以前は小さなコンピュータが映像の処理をするには処理速度が遅かった。そこで映像は別の機器（たとえばレーザーディスクやビデオ）に任せていた。コンピュータ1台にレーザーディスクを5台つないだシステムといったものが存在した。しかしコンピュータの性能が上がるに連れて映像の処理を内部で行うような方向に進んでいる。映像機器の代わりに映像をデジタルデータとして持ちそれを必要に応じて提示する方法が小さなコンピュータでも可能となった。ただし現時点ではデータ量が多いためそれをどこに保存するかが問題でこれをまたCD-ROMなどに保存するため一見レーザーディスクがCD-ROMに置き代わっただけのように思える。アナログの再生機がデジタルの記憶装置に代わったの

で、ただ大きなデスクが小さなディスクに置き代わっただけではない。

#### データの転送

またコンピュータのデジタルデータは何回コピーしても劣化しないのが特徴である。距離にも関係ないのでデータを日本からアメリカへ送っても、東京都内から都内へ送っても受け取ったデータは送る前と同じである。デジタルになることで距離の差は無視できるようになった。

#### データの種類

コンピュータの記憶装置内部にはプログラムと呼ばれるコンピュータに作業の手順を教えるものと作業の途中で与えられる加工されるデータが同じ形で保存されている。初めてコンピュータに触れた人たちが訳も分からぬデジタルファイルに会って驚くのはこのためである。

データファイルの中が更に文字、音声、静止画像、映像と分かれている。マルチメディアにとつてはこの4つがデジタルファイルであることが非常に重要である。すべてコンピュータ上で扱え、しかも転送しても加工しても劣化しないからである。

#### 同一チャネルによる複数メディア転送

テレビはマスマディアのひとつで映像を送っている。新聞は同じマスマディアのひとつで文字を紙に印刷して配布している。このふたつが統合された形でテレビの文字放送がある。サービスのひとつとして聴覚障害者向けに番組のセリフやト書きを文字として送る場合もあるが、番組の内容と関係のない株式市況や天気予報を送っている時もある。同じチャネルで映像と文字情報を同時に送っているのである。

またインターネット経由で文字、音声、画像、映像を送ることができる。今まだそれほど活用されないのは音声や画像、映像を送るには転送の時間がかかりすぎるためであろう。

このようにひとつのチャネルで文字、音声、画像、映像のデータを送ることができる。デジタルファイルを送れるチャネルが整備されなければこれらは自由に教室に送ることができる。受け取ったデータは複数のメディアとして加工ができる。

## マルチメディア学習環境時代の問題点

### 最適のコースウェアは見つかるか

マルチメディア環境が整備されたとき学習環境にはどのような変化が見られるのだろう。まずマルチメディアを授業に持ち込む場合にコースウェアは誰が書くのか。昔はコンピュータのBASIC言語を使ってワープロソフトを作っていた人がいた。必要なものはすべて自分で作るという時代であった。しかし今やワープロソフトを自分で書いている人はいない。マルチメディア教育ソフトも同じである。教員が自ら作るのはごく僅かとなるだろう。

授業の手順は教員がそれぞれ無意識のうちに自分のものを持っているはずである。ある教員の教授手順に入っている項目が別の教員の手順にも必ずあるとは限らない。他人の作ったソフトを利用すれば教員は自分の授業手順は無視して誰かが作ったコースウェアに従って進めていかざるを得ない。「学習者に自由を与えない」という教師の選択もあると思うが「授業の手順を学習者が選べるようになっている」というコースウェアを選ばなければならないときも出る。教員は学習者に与えるコースウェアを作るのではなく、市販のものから選ぶ時代になるのである。

### 最適のコースウェアを選ぶ基準

次にお仕着せのコースウェアを使うことで我慢することにしてどのコースウェアを選ぶかが問題である。コースウェアは授業の手順そのものであるから我々はコースウェアを見てそれを使った授業の良し悪しを判断する事になる。ここでコースウェアを評価する基準が必要となる。企業のOA

化が呼ばれるときそこで行われるのは今までの仕事の分析、コンピュータで行う作業と手で行う作業の仕分け、そして人員整理へつながる作業の簡素化である。定型の作業をこなせば誰にでもできるようなエキスパートを必要としない仕事への転換である。教員がコースウェアを(つまり授業を)見直すときに自分の存在を否定はできない。効率化を目指す営利企業ではなく教育の場としての明確な判断基準を示せるのだろうか。卒業生が「先生の授業では何をやったか覚えていないが進路の決定について話してくれた雑談は非常にためになった」というような授業は、英語授業としては無駄な遊びの部分を持っているが教育という面では人間味のある良い授業と考えられるのではないか。ただ効率だけを基準にしてはこういったコースウェアは残していくのだろう。

### 全国画一化されたコースウェア?

また何らかの基準を設けることができたとして全国の学校で同じような基準を用いて選んだコースウェアを使っていいのだろうか。日本の教育で欠けていたのは自分で考えて行動する人間を育てるという姿勢ではなかったのか。中学生が質問に対してただひとつの正解を求めるのは丸をもらえる解答とそれ以外の解答という二者択一教育がなされているからではないだろうか。全国で似たようなコースウェアが採用されることに問題はないだろうか。

### コンピュータという備品

コンピュータは学校では備品として扱われる。備品は壊れるか10年(?)しないと破棄することができない。ところがコンピュータの世界では5年するとコンピュータは陳腐化してしまう。3年前に購入したペンティアムマシンは今ではかなり遅いコンピュータとなっている。7年ほど前に購入した386マシンではWindows95も使えない。マルチメディアを利用するには音楽CDの倍以上のスピードで動くCD-ROMドライブが必要である。マルチメディア時代になんでも備品であるがために新たに購入することができない可能性がある。中学校で早くからコンピュータについて研修を行ってきた公立学校で実際にこのような例を聞いている。

## 高額な映像制作費

マルチメディア時代には映像は欠くことができない。しかし映像の制作費は高額である。現在のビデオ教材を見ても英語教育用に作られたものは一目で制作費がかかっていないことが分かる。たとえば小道具だけで背景などはスタジオのホリゾントだけといった教材がある。他方映画の世界ではコンピュータグラフィックスと実写の混じった魅力ある映画が登場している。映像の魅力は残念ながら掛けた金額に比例するようである。教育用に果たしてどれくらいの予算を見込むことができるであろうか。教材を作る企業はかけた予算に見合うだけの収入がなければ教材作成から撤退してしまう。コマーシャルでお金のかかった映像を見て目の肥えた学生が飛びついてくれるような魅力的な映像を供給できるだろうか。

## 電話回線のコスト

インターネットのようなネットワークを介してデータを転送する場合には現在のインフラを整備していかねばならない。アメリカ合衆国では電話代は毎月定額で電話は使いたいだけ使える。しかし日本では使っただけ請求されてしまう。また現在ISDNを使った場合に128kbit/secで転送できる。しかし大量の映像データを送った場合にはこれでもまだ足りない。さらに太いパイプが必要となる。学校でデータ転送にかかる費用を気にしないで自由に転送ができるのはいつになるのか。

## マルチメディア利用教育の進む方向

### やはりマルチメディア

今まで教室での授業は如何にして実社会を教室に取り込むかがポイントであった。ビデオや音声テープを使って教室の中で疑似体験をさせることが求められていた。それでも足りなければ学習者は教室を出て自ら社会に実体験に行くことが求められた。しかしマルチメディア時代は違う。教室は実社会をまねする場所ではなくなる。すでに教室は電話回線を通して実社会そのものである。実社会でも電話回線を通して情報を取り入れている。インターネットが大はやりの昨今、インターネットやインターネットを利用してお金をかけなくて

も自由に世界中から音声や映像を取り込むことができる。インターネット上のデジタル情報をそのまま見ているだけではつまらない。インターネットはそれ自身十分魅力的な情報源であるがそれをマルチメディア教材として利用すれば安価な教材ができる上がる。もちろん教育用として著作権所有者が提供してくれる場合に限られるが、特に教育用に作られたのではない実社会の実像をその場で学生に提供できればそれだけ学生の興味を引く教材ができるはずである。コースウェアやプログラムとしては市販の形で購入しデータはインターネットから引き出すようになっていれば数年間は新しいデータを用いた授業ができるはずである。コースウェアに飽きたら新しいものを購入するようすればよい。

### 新しい技術の導入

今までではまだ無理だと思われていたものが技術の進歩に伴い導入され始めている。

たとえば音声認識である。英語の授業を考えたときに音声がないことは致命的である。今まで提示は音声で、または音声を伴った映像で行っていたが学習者の反応はマウスなどの指示装置やキーボードからの入力であった。しかしすでに音声による学習者の反応で動くマルチメディア学習ソフトが市販されている。今見られるものは正解の解答を音声からデジタルでサンプリングしてその解答と学習者が発話した解答をサンプリングした解答とを比較して近ければ正解とするというタイプである。この欠点はイントネーション、ストレスを含めて正解として入力されている正解とほぼ一致しないと正解と認めてくれない点である。困ったことに現在あるものは複数のセンテンスで正解ができ上がっているときにも1つ分として判定するのでセンテンス間のポーズの間隔を間違えても誤答と判定する。

新たに出た音声認識はあるセンテンスに対して音声のデータベースを持っている。学習者が発話したセンテンスに対して正誤の判定の前に何と言ったかを判定する。その文をテキストファイルで生成するのでそれを解答と比較するようになっている。こちらの方が発話者の違いや文ごとのポーズに違いには左右されない。今のデータベースは

ネイティブスピーカのデータベースであるがこれに日本人の発話を加えればその日本人の選び方で難易度を設定できる。

このような音声認識の技術がマルチメディア教材に反映されるとますますインター・アクティブな授業が行えるようになる。世間ではL.L.によって行う教育を「機械的な教育」として批判するような向きもあるようだが、実際には身近な距離で先生や学習者同士が対話したり自分の不得意なところをほかの人に知られずに繰り返し練習ができるなど好評である。これは多くはインター・アクティブ性によると考えられる。マルチメディアの活用により今まで以上にインター・アクティブ性とリアリティが増していくべき更に進んで学習を行ってくれるものと考える。

#### 目指すべき方向

これからマルチメディアが進むときに目指して欲しい方向がある。

まず開発や研究は大きな単位ではなくできるだけ小さな単位で行って欲しい。マルチメディアを教室に持ち込みたいのは語学教育以外のマルチメディア教材を開発する企業や、ハードウェアを販売している企業であろう。しかしこういった企業が教材開発を進めると前に述べたような事態に陥る可能性がある。小さな単位で開発を進めて欲しい。そうすれば教材選択の自由度が大きくなる。横並びの教材は敬遠したい。

マルチメディアの教材開発では専門性はないと考えてもいいかもしれない。それは教材が教材だけの価値としてだけでなく美術的な意味や音楽的な意味を持ってくる可能性があるからだ。今まで教材と言えば教員だけが集まって作業をすること多かった。テープの音や教科書の絵は後から付けられることが多く、それも編集者任せっきりといったことが多かったように思う。こういった今まで後から教材作成に参加していた人々も教材の意図を生かしたり、楽しく学習ができる教材ができるように最初から教材作成に参加するべきである。音楽が好きで教材を繰り返して見ているうちに英語の力が付いてしまったというのは好ましい方向である。

マルチメディア教材は最初に述べたようにメデ

ィアミックス教材とは違う。もちろんメディアミックスにも優れた教材はある。しかしマルチメディア教材はインター・アクティブ性を特に重視して作られるべきでありそのため辞書や参考文献など学習に必要なものはすべて教材に載せておくべきである。学習者が何かをしたいと思ったときにすべての情報がコンピュータ上で得られることが望ましい。

マルチメディア教材が教室に入ってくると先生の役割は自然と変わってくる。学習者に授業中に教材を提示したり学習者が必要としている情報を与えるのはコースウェアである。そこには教員が入る必要はない。今までのような学習を目指せば当然教員は学習者の学習を中断して自分からのインストラクションを与える事になる。これでは2か所からインストラクションを与えられる事になりしかも自分で行っていた学習を教員によって中断される事になり不都合である。教員は教材の選定や時間配分等の設定といった裏方の仕事に回るべきである。これは決して教員の仕事の質の低下を意味するものではないが質が変化することは間違いない。今から変化に対応できるよう準備が必要であろう。

最後に

英語は暗記科目として学習者には見られているようだ。しかしマルチメディア教材の精選により学習者が自分でやってみて間違えがあれば訂正するという探求実験学習科目として英語が生まれ変わることが可能となる。これが実現するかどうかは我々教員の対応にかかっている。

(みかみ あきら／東洋女子短期大学)



## 世界をつなぐ英語教室

### ——リアルタイムのインタラクション

朝尾幸次郎

#### 始まった社会変革

次は過去10年間の『朝日新聞』と『ロサンゼルス・タイムズ』について、それぞれ「インターネット (Internet)」という語が現れる記事の件数を年次別に調べたものである。

朝日 LA Times		朝日 LA Times		
86年	1	91年	0	2
87年	0	92年	0	3
88年	1	93年	1	19
89年	1	94年	92	150
90年	0	95年	638	530

93年までは日米ともにインターネットは新聞の話題にはほとんどならなかった。それが94年、突如として新聞に繰り返し取り上げられるようになる。日米両国とも1994年はいわばインターネット元年とよぶべき年である。この年を境にインターネットは社会のあらゆる場面に姿を現すようになり、その加速度はさらに増しつつある。今年1月から5月24日までの5か月で、「インターネット」という語の現れる記事は『朝日新聞』ではすでに775件、『ロサンゼルス・タイムズ』では446件に達している。現代、および近未来を語るキーワードをあげるとするなら、そのひとつはまぎれもなく「インターネット」である。

インターネットとはひとことで言えば「ネットワークのネットワーク」である。コンピュータとコンピュータを接続し、相互に情報交換ができるようにしたしくみがネットワークである。学校、企業での構内通信網やパソコン通信はその例だ。これらネットワークを相互に回線で接続すると自分のネットワークを越えて情報交換が可能となる。

インターネットがこれまでのメディアと異なるのはその規模と思想性である。1995年初期の段階でインターネットに接続しているネットワークは5万、コンピュータは500万台と推定されている。インターネットに接続されるコンピュータの数は西暦2000年には1億になるという予測もある。インターネットには中央でコントロールをするというしくみがない。テレビや新聞といったこれまでのマスメディアは多分に中央集権的な性格をもっている。そこではメッセージの送り手と受け手が明確に分かれている。これに対し、インターネットでは参加者はメッセージの受け手であると同時に送り手でもある。そこに接続しているコンピュータはパーソナルコンピュータであり、スーパーコンピュータであれ、資格は同じである。インターネットはいわば「民主的」なメディアで、参加者は同じ資格で情報を受信し、発信することができる。インターネットは社会と生活を変革させる可能性をもつメディアなのである。

#### 電子メールの意義

インターネットの英語教育への利用で最も歴史が古く、広く利用されているのが電子メールである。電子メールは送信するとほとんどの場合、瞬時に相手側に届くという即時性、またネットワークがつながっているところであれば、どこでも送ることができるという広域性にその特徴がある。また、学校などでは、利用者は海外への送信も基本的に無料で利用できるという便利さがある。

しかし、電子メールは通常の郵便と比べて、速い、安い、便利だということにその意義があるの

ではない。英語授業の一環として海外の学校と郵便で文通するという試みはこれまでに行われてきた。しかし、郵便による文通が英語授業の柱になることはなかった。その役割は授業を側面から支えるところにあった。電子メールでは交流が日常的に行われ、この交流そのものが授業の中心になりうる。電子メールというメディアの意義は郵便に比べて速いといった、その効率、便利さにあるのではない。新しい人間関係、環境を創り出すところに電子メールの画期的な意義がある。

実際、電子メールをライティング授業に導入すると、授業そのものが大きく変わる。従来のライティングの授業では生徒に課題を出し、教師が添削し、返却するという繰り返しで授業が進む。そこで教師、生徒の関心は英語がどれだけ正確に書かれているかということだ。電子メールを使ったライティング授業では添削が行われない。そこで関心は英語が正確に書けているかどうかではなく、メッセージの内容そのものである。ふしきに見えるかもしれないが、これは電子メールを使った授業の実践に共通することなのである。

添削をしないライティング授業というものが考えられたことがあつただろうか。添削をせずにライティングの力をつけることができると考えたことがあつただろうか。電子メールを使ったライティングの授業を行つて氣づくのは、生徒は自分よりもちょっと英語ができる相手の英語に接することを通して自分の英語力を高めていくということだ。電子メールはこれまでとは違う、新しい英語学習の可能性を開いてくれるのだ。

また、メールを使うとリーディング、ライティングという従来の技能の区分があまり意味をもたなくなる。生徒は相手からのメッセージを読み、それに答える返事を書く。ここでは英語を読むという作業と書くという作業が不可分となる。ライティングの授業は同時にリーディングの授業ともなるのだ。

なによりも大きな変化は生徒はネットワーク上でライティングすることにより読者を得るということだ。従来のライティングの授業では生徒の作文を読むのは添削をする教師だけである。その教師でさえも、作文の内容を読みたいために読む

のではなく、添削をするために読んでいる。つまり、従来のライティングの授業というのは読者のいない文章をひたすら書き続ける作業だったのだ。ネットワークでライティングを行うことにより、生徒ははじめて相手に向かって、読者に向かって文章を書くことが可能となる。ひとことで言えば、ネットワークはわれわれに新しい表現の可能性と語学教育の新しい環境を与えてくれるのである。

### 電子メールを使った授業の進め方

授業にはじめて電子メールを導入し、海外の学校と交流をしようとするとき、まず迷うのがどのようにして交流校を探すかということだ。このようなとき、広く利用されているのがIECC (Intercultural E-Mail Classroom Connections) である。これはSt. Olaf Collegeがインターネットで提供しているメーリングリストである。メーリングリストとはネットワーク上に拠点を定めておき、ここに送信したメールは登録しているグループ全員にそのメールが転送されるしくみである。つまり、メーリングリストに加入すれば、つねに全員でメールを読み合うことができる。

IECCには次のような手順で登録を行う。大学の場合

IECC-HE-REQUEST@STOLAF.EDU

に、幼稚園から高校までは

IECC-REQUEST@STOLAF.EDU

に登録申請のメールを送る。メール本文にはsubscribeという1行だけを書く。題名(Subject)は空のままでよい。送信されたメールは自動的に処理されて登録が行われ、折り返し利用法についての説明がメールで届く。

また、IECCに登録をしなくてもWorld Wide Webを利用できる環境があれば、IECCの次のページからも交流校を探すことができる。

<http://www.stolaf.edu/network/iecc/>

このページに用意してある書式に交流の希望を書き込むと、IECCに登録している人々全員にそのメッセージが配信されるので、相手からの返事を待つだけでよい。

メールを使って授業を進める場合、自分のクラ

スと相手のクラスの生徒でそれぞれペアを組ませて行う場合と、メーリングリストを使って全員でメールを読み合うというふたつの方法がある。一般に自分のクラスと相手のクラスでは人数が違うのがふつうである。この点、メーリングリストを使えば、たがいに人数の差を気にしなくてよい。しかし、これだとひとりが受け取るメールの数が多くなりすぎる。そこで最近はメール交流のプロジェクトごとにニュースグループを作ることも多い。ニュースグループは書き込みが自由な電子掲示板で、全員でメッセージを共有しながら、自分の好きなメッセージだけを選んで読むことができるので生徒への負担が少ない。

### 期待の集まるWorld Wide Web

現在、インターネットの英語教育への利用で熱いまなざしをあびているのがWWWと略称されるWorld Wide Webである。電子メールが扱うのは基本的に文字情報だけである。絵や写真を使ってリーディングを助けるためのスキーマを与えたい、音声も扱いたいという要求は満たせない。WWWでは文字情報だけでなく画像や音声も含めたマルチメディア的な利用が可能となる。

WWWとはネットワーク上のコンピュータにデータを蓄積しておき、それを利用したい人がそこに接続してデータを取得するしくみである。これはページという単位で作られるデータ相互にリンクというつながりを設けることができる。このため、WWWはどこかに接続すると、そこから網の目のように張られたリンクをたどって世界中の情報を探索することができる。「世界的な規模のクモの巣」という名前はこれに由来する。

WWWは文字情報だけでなく、音声や画像も扱うことができるというマルチメディア的側面が大きく取り上げられることが多い。これも英語教育への利用にあたっては利点のひとつではある。しかし、そのほんとうの意義はマルチメディア的側面にあるのではない。以下、紹介するように、ネットワークに参加している人々が情報の受信者であるだけでなく同時に発信者になることができ、それを世界的に展開することができるという点に

大きな意義がある。

現在、WWWの特性を生かした英語学習の拠点がインターネット上に出現しつつある。その代表的なもののひとつがImpact! Onlineである。これは杉本卓氏 (University of Illinois, Urbana-Champaign) と Lisa Page (Passport Educational Publishing) のふたりによる、リーディング教材をインターネット上で提供しようとするプロジェクトである。

<http://www.ed.uiuc.edu/impact/>

この特徴はリーディングを現実の文脈のなかで展開しようというところにある。たとえば、地球温暖化を題材としたリーディング教材を選んでみると、地球温暖化の傾向を示すグラフとともに教材が提示される。教材のなかにはclimateのように青い色で表示されている単語がある。これは学習上習得すべき大事な単語で、これをマウスでクリックすると、その語義と用例が表示される。さらにPronunciationというところをクリックすると音声を聞くことができる。ページからページへリンクすることができるWWWの特性をうまく利用した方法だ。

しかし、Impact! Onlineが画期的なのはそのマルチメディア的利用法ではない。単語をクリックして語義を表示し、音声を再生するというのであれば、CD-ROMでも可能である。それが画期的なのは教材を現実の文脈と結びつけたところにある。この教材には米国の航空宇宙局 (NASA) や海洋気象局 (NOAA) などが提供する情報ページへのリンクが張られている。ここをクリックすればそれぞれのページに入ることができる。これらのページは英語のリーディングのために作られた教材ではない。気象に興味をもつ人のために提供される最新情報である。生徒は地球温暖化を話題とした教材を読むと同時にその内容を実際の情報と関連づけて考えることができる。この教材ではリーディングは練習のための練習ではなく、私たちが母語で新聞を読む場合と同じように、身のまわりの世界を理解するという実体験そのものなのである。ページにリンクを張ることができるWWWの特性を生かしたみごとな方法だ。

情報の受信者が同時に発信者となることができ

るというインターネットの特性を生かした例にEXCHANGEがある。これはイリノイ大学で教育心理学、英語教育学を教える教員が共同で運営しているプロジェクトである。ひとことで言えば、これは英語学習者が作る投稿雑誌である。

<http://deil.lang.uiuc.edu/exchange/>

ここにはWorld Cultures, World News and Events, Learning Resources, Storiesという4つの部門がある。英語学習のためのインターネット上の情報資源へのリンクを集めたLearning Resources以外は、英語学習者の投稿によってページが作られている。World Culturesは各国の文化、習慣の紹介、World News and Eventsは学習者がいわば新聞記者となって自分の国でできごとを報道するニュース、Storiesは物語や詩など創作を掲載したページである。

これらはすべて各国の英語学習者が投稿した文章をもとに構成されているのが特徴である。これらのページはだれもが自由に読むことができるだけでなく、思い立ったときいつでも投稿できる。投稿された内容が一定のレベルに達していると編集者が判断したものが順次掲載されていく。一般的の雑誌のように掲載されるための資格というものは必要なく、レベルに達していると判断されるものはその場で掲載され、世界に公開される。ここでは学習者は読者であるとともに、作者として世界中の英語学習者と交流ができる。

このように英語学習のために提供されているページのほか、インターネット上には英語教育に利用できる資源が無尽蔵に蓄積されている。たとえば、Time Warner社が提供するPathfinderからは主要な英語雑誌の記事を読むことができる。

<http://pathfinder.com/>

たとえば、ここからTIMEに入り、さらにTIME for Kidsを選ぶと、子供向けにやさしい英語で書かれたニュース記事を読むことができる。子供向けとはいって、その記事はきちんとしたニュース記事の手法によって書かれたもので大人でも十分読み応えがある。

SnoopyやNancyなどの子供向けのマンガはThe Comic Stripsで読むことができる。

<http://www.unitedmedia.com/comics/>

教材は教員が与える代わりに生徒自身が選ぶこともできる。WWWではインターネット上に公開されている情報を分類索引あるいはキーワードをもとに検索するしくみがある。子供のための検索サービスYahooligans!を使えば英語学習の素材として適当なページを簡単にみつけることができる。

<http://www.yahooligans.com/>

これを使うと生徒ひとりひとりが自分の意志で自分のリーディング教材を選び、学習するという新しい学習法も可能である。

なかには不思議なサービスを提供しているところもある。The Cyrano Serverでは、問い合わせていただけで、さまざまな文体のラブレターを英語で書いてくれ、それを相手に送ることができる。

<http://cgi.nando.net/toys/cyrano/version2/>

これは英語教育を目的にしたものではなく、遊び心で提供されているものである。しかし、このような発想があったのかと驚かせる新鮮さがある。

WWWはいわばインターネット上における英語教材とアイデアの無尽蔵な宝庫であるだけでなく、英語教育の巨大な実験室なのである。

なお、上に紹介したWWWページ、またその他の英語教育関係の主要なページは朝尾の次のページから入ることもできる。

<http://bosei.cc.u-tokai.ac.jp/~kojiasao/english.html>

### schMOOze University

インターネット上にはMOOというしくみがある。ネットワークに接続したコンピュータ上に町や学校を模した架空の世界を作り、そこに同時に接続した人が場所を移動しながら、たがいに話をしてすることで交流を進めるというしくみである。スーパーマリオのようなテレビゲームに似ているが、ピーチ姫を救うといった目的はないこと、参加者がたがいに話すことにより交流が行われること、またすべて文字情報だけで行われるという点に違いがある。

英語教育のために作られたMOOのひとつにschMOOze Universityがある。schmoozeとは二

ユーヨークで使われるスラングで「おしゃべりする」という意味である。これにMOOをかけて、この名がつけられている。これはJulie Falsetti (Hunter College) と彼女の協力者により運営されており、日本からは淡路佳昌氏（木更津高専）が参加している。schMOOze Universityの説明はWWWでは次のページで読むことができる。

<http://schmooze.hunter.cuny.edu:8888/>

また、淡路佳昌氏の次のページでは英語と日本語の両方で使い方についてのさらにくわしい説明を読むことができる。

<http://www.cc.rim.or.jp/~awaji/schMOOze/>

schMOOze Universityを利用するにはtelnetで次のアドレスに接続をする。

[schmooze.hunter.cuny.edu:8888](http://schmooze.hunter.cuny.edu:8888)

本格的に利用するには登録して「入学」するのがよい。試しに利用するにはゲストの資格で接続する。キャンパスに入ったら、キーボードからメッセージを打ち込む。すると、そのメッセージは同時に接続している人のうち、同じ「場所」にいる人全員の画面に表示される。つまり、たがいにキーボードから文字を打ち込み、それを画面で読み合うことで「会話」が行われる。

あるとき次のようなできごとがあった。ここに入学すると寮に自分の部屋を持つことができる。自分の部屋を持つとはいっても、コンピュータ上に自分用の領域をもらい、「丸いアーチ型の窓があり、海辺に面している」といった部屋の説明をつけるわけだ。学生のひとりが自分の部屋にSex Roomという名前をつけた。いくらなんでも、この名前は適当でないということで、学長のJulie Falsetti氏は説得するため学生にメールを書いた。学長と学生との間で何度もメールのやりとりが行われ、論議を重ねた結果、結局、Love Roomに名前を変えるということで決着した。

教室という人工的な環境で行われる英語教育をより実際の環境に近づけようという努力がこれまで行われてきた。ビデオを使ったり、本物のレストランのメニューを使ってロールプレイを行うのはその例である。しかし、皮肉なことに、教室をより現実に近づけようとすればするほど、そこで行われる活動の疑似性が顕著になる。schMOOze

Universityは仮想現実 (virtual reality) の世界である。しかし、上に紹介した学生と学長の間で交わされたやりとりは本物であった。従来の教室で本物の場面を作りだそうと試みたものが人工的で、インターネット上の仮想現実のなかで行われるやりとりの方が実は本物であったというのは皮肉なことである。

## 世界をつなぐ英語教室

電子メールとWWWを英語教室に導入したとき、教室はどのように変わるか、これを示すよいモデルがAndrew Hess (New York University) のThe Cities Projectという実践である。

この趣旨は自分の住む町の様子、生活をたがいに紹介しあうことを通して、英語の上達をはかり、問題解決の力を養い、異文化理解を進めようというものである。相手校と電子メールを使って自分たちの生活を紹介したことからこの実践は始まる。相手との交流がひととおり進んだところで、culture packageを交換しあう。これは自分たちの生活の様子を紹介した写真、生徒の美術作品、学校新聞、絵ハガキ、生徒の声を録音したオーディオテープ、町の様子を写したビデオテープなどをまとめて小包として送ったものである。小包が届いて教室でみんなで開けるとき、教室は一番高揚するという。

実践はここで終わるわけではなく、ここから先が大切な学習だ。送られてきた品物に接して、そこから感じた驚き、疑問について電子メールでさらに質疑応答を繰り返す。この経験をもとにクラスでプロジェクトを立てる。交流の相手の知りたいことがくわしくわかるような、自分の町のガイドブック作り、交流を題材にした学校新聞作り、異文化理解をテーマにしたミニリサーチ。これらを英語で行う。そして最後にこれらの作品をWWWのページに掲載して公開する。

この実践の特徴はまず、実際の世界、生活のなかで英語学習活動を行うという点にある。これまでの英語教室というのは聞く、話す、読む、書く、どの技能についても教室という擬似的な場面で、教科書という擬似的な素材を使って行うもの

であった。これに対し、The Cities Projectでは生徒がそこで接するものはすべて現実の生活の一部としての体験である。

もうひとつの特徴は電子メール、WWWというメディアを使うことによって国境を越えた共同作業が実現できたという点である。このプロジェクトにはアメリカのほかノルウェー、フランス、フィンランド、ホンコンなどが参加し、世界がひとつつの教室となった。いわば世界的なチーム・ティーチングだ。この実践のくわしい報告は次で読むことができる。

<http://www.nyu.edu/pages/hess/cities.html>

### インターネットの意義

コミュニケーション学者のマクルーハンはかつて「メディアはメッセージである」(The Medium Is the Message.) ということばでメディアの考察を行った。鉄道はそれまでの馬や人力による輸送の量とスピードを飛躍的に向上する発明であった。しかし、鉄道の発達のほんとうの意義は輸送力の能率向上にあったのではない。鉄道の発達がもたらしたものは社会生活の変革であった。鉄道によりそれまでにない新しい町が生まれ、仕事が起こり、レジャーが始まった。輸送手段の変革は社会と生活の変革であったのである。

インターネットを語学教育に導入するというのは電子メールの方が郵便よりも速い、WWWでは文字だけでなく画像も音声も送ることができるという、効率、便利さにあるのではない。ネットワークに英語教育を載せることにより、英語教育の意義が変わるのである。

インターネット上で英語教育を実践してみると、これまで当然と考えていた常識に疑問が起こる。たとえば、これまで私たちは教材を提示するとき、「易」から「難」に並べることと当然としてきた。しかし、WWWを使って学生に自由に自分が読みたいページを検索させ、リーディングの授業を行ってみると、学生が熱心に探して読むのはやさしい英語のページではない。熱心に読むのは自分に一番関心のある情報が掲載されているページである。外国語学習ではいったい何が「易」

で、何が「難」なのだろうか。言語素材の難易でなく、学生ひとりひとりの関心にそった内容によってシラバスを作るというのはとっぴな考えなのだろうか。インターネットに英語教育を載せるということはこれまで私たちが当然と考えてきた語学教育の常識を問い合わせることなのである。

英語教育とインターネットという組み合わせは英語教育に新しい表現手段と表現内容、そして新しい可能性を与えてくれるしくみである。英語教育はインターネットに載ってはじめて語学教育のあるべき環境を実現したと言えるだろう。

### 参考書目

『英語教育』(大修館書店)に連載の「英語教育ネットワーク通信」

ネットワークと英語教育についての最新情報を知ることができる。電子メールを使った実践の報告、解説は1993年8月号、1994年3、4月号、1995年2、7、8、11月号に掲載がある。

朝尾幸次郎「ネットワーク利用のライティング」『英語教育』1994年12月号。

従来のライティングの授業をネットワーク上で行ったら何が変わったか、実践に基づく紹介。このさらにくわしい考察は同じく、朝尾幸次郎「インターネットを利用したライティング授業」『東海大学紀要教育研究所』第3号、1995年に報告。

Warschauer, M. 1995. *E-Mail for English teaching: bringing the Internet and computer learning networks into the language classroom.* Alexandria, VA: TESOL Publications.

英語教育における電子メールの利用に関する解説書として、現在、最も信頼のできるもの。具体的な解説でわかりやすい。

Warschauer, M. (Ed.) (1995). *Virtual connections: Online activities and projects for networking language learners.* Honolulu. HI: University of Hawaii Second Language Teaching & Curriculum Center.

インターネットを利用した英語教育の実践報告集。各国で行われた125のプロジェクトを紹介。

(あさお こうじろう／東海大学)

## パソコン・ライティング

### —書く英語はこう教える

静 哲人

#### e-mailに魔法はない

インターネット時代を迎え、学校英語教育においてもパソコン・ライティングの機会が今後増えて行くと思われる。パソコンでライティングというと最近はまず第一にe-mailを連想する方が多いかも知れない。従来不足しがちだった「コミュニケーションのためのライティングの機会」を生徒に提供するという意味では確かにこの「電子文通」は有用であるが、結局は実際の読者とのやり取りの機会を与えてくれるだけであって、そのこと自体が動機付けというレベルを超えて生徒のライティング力を大幅に向上させてくれるわけではない。

そこで本稿では、ライティングの結果をメールでやりとりするという局面でなく、書く英語をレベルアップする局面に焦点をあて、(1) パソコンを使ったライティングは、紙と鉛筆によるライティングと果たしてどのように違うのかを探り、(2) パソコンの特性を生かした指導方法を提案する。

#### キーボードにも魔法はない

パソコンを使えば、紙と鉛筆を使って書かせる場合に比べて生徒の書く英文の質が大幅に向上するのであるか。答えはNoでありかつYesである。Hult (1985) は、L1において、ワープロの使用が生徒の書く英文の正確さに与える影響を探った。教授法とカリキュラムを極力同一にし、アサインメントの作成方法のみを、実験群をワープロ、統制群を紙と鉛筆と異なるものとし、一学期

間の訓練の最後のアサインメントの質を比較したものである。結果はスペリング・チェッカーを利用することができたワープロ群のほうがスペリングミスが少なかったという以外は両群の英文の質はほとんど変わらず、同じような誤りのパターンの分布が見られた。これはL1での研究結果であるがEFL教師としての我々の直観からもうなづけるものと言えよう。つまり鉛筆をキーボードに替える事自体には、大した御利益はないのである。

#### でもパソコンには魔法がある

しかしここで大切なことがある。それは（彼女の記述からは必ずしも明らかではないが、おそらく）この結果は提出されたアサインメントについてフィードバックを与えたり、それに基づいてリライティングをさせることも視野に入れた話ではない、ということである。プロセス重視の立場からはライティングは何度も書き直しながら最終ドラフトを生み出していく繰り返し過程である (Connar & Farmer 1990) し、ライティングとリライティングは同義である (Zamel 1987)。よって、パソコンと紙・鉛筆の比較は、リライティングをも含めたデザインによってなされなければならない。そのようなデザインの実証研究は見あたらないようだが、以下の点からパソコン・ライティングの優位は明らかだと思われる。

##### (1) 編集機能

優れた書き手とそうでない書き手の最大の違いはリライティングの大胆さにあるという (Krashen 1984)。前者はリライティングの際には内容に意識を集中し、センテンスごと、あるいはパラ

グラフごとなどの大きな単位で移動、修正、追加、削除などを繰り返しながら、自分の本当に伝えたいことを探っていく。このような過程においてパソコンのカット&ペースト機能が絶大な威力を発揮する。とくに最近のマウス、トラックボール、あるいはトラックパッドによって操作できるパソコンであれば、範囲の大小に拘わらず任意の範囲を瞬時に選択できるので、キーボードのみに頼る場合に比べてはるかに操作性がよい。さらにドラッグ&ドロップ機能をそなえたソフトが増え、より直感的な作業が可能となっている。

## (2) 保存・複製機能

フィードバックは完成品に与えるのではダメで、ドラフティングの中間段階で与えなければ効果が薄い (Knoblauch & Brannon 1981, Krashen 1984, Leki 1990)。次のドラフトに生かそうとするからこそ真剣にフィードバックに注意を払うのであって、最終提出物に対する教師からの赤ペンは、一瞥して溜息とともに忘れ去られることも多いだろう。リライトの指示の有無はフィードバックの定着に影響する (静 1996) ので、フィードバックしたら必ずリライトさせるのが大原則である。

しかし肉筆によるリライティングは時間のかかるつらい作業である。複数のパラグラフを書かせた場合などは指示する側もつらい。パソコンであれば保存もしくは複製機能を使えるので、リライトの労力は、本当に必要な箇所にだけ注げばすむ。紙と鉛筆の場合に必要となる、問題ない箇所の機械的な書写がない分、意識を問題箇所の改善により集中することができる。そしてその結果、紙と鉛筆による場合にはほとんど不可能なほどの回数のリライティングが可能となり、プロダクトの質も向上する。

## フィードバック

残念ながら中学高校の現場ではセンテンスを超えた、あるいは和文英訳以外のライティングを指導している教師はほとんどいない (Kanatani et al. 1996) と言われる。そしてその原因として「たくさん書かせたらあと始末が大変だ」とい

う教師の意識があるという。このような現状を改革するために、フィードバックの種類に拘わらず書かせること自体に意義があるのだからもっと文章を書かせよう、という提案 (Hatori et al. 1990, Kanatani et al. 1993, Tono and Kanatani 1995) もなされている。しかしパソコンはこのジレンマに別の方向から解決策を与えてくれる。

### (1) 速さ・美しさ

まずキーボード入力は肉筆よりも速く、疲れず、また何よりも出力が美しい。筆者のような悪筆は、ミミズがのたくったような文字を見られるのが苦痛で、赤ペンで訂正やコメントを書く手が鈍りがちだったが、キーボードならば推敲記号をつけ加えたり、コメントを書くおっくうさが半減する。わずかな差であっても、我々現場教師が40人、80人、120人の作文をさばく時には無視できない差となることを忘れてはならない。

### (2) 複写・保存

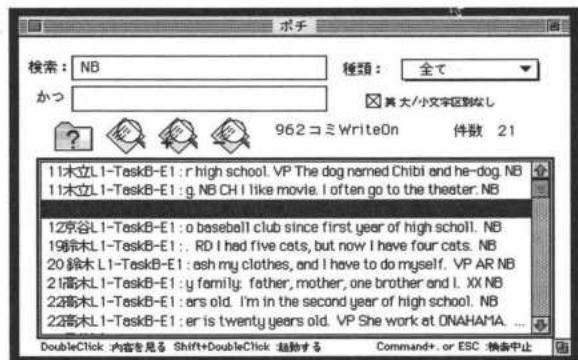
どんなに愛情あふれる教師でも、夜遅くまで眠い目をこすりながら生徒のペーパーに立ち向かう赤ペンを、思わず投げ出したくなる瞬間があったとすれば、それは「これだけ苦労しても、この生徒にしか伝わらない」というコスト・パフォーマンスの悪さが頭をよぎる時ではなかったか。パソコン上であればカット&ペーストによって、必要ななら同一のフィードバックを全員に与えることもたやすい。さらに、生徒の書いた英文とそれに対する自分のフィードバックを継続してハードディスクに蓄積し、後で述べるような方法で整理すれば、時間を超えて活用できる貴重なフィードバック・データベースが出来上がる。使い捨てとも言えるペンと紙の場合と違い、保存しておいてまとめて後で活用できると思えば、フィードバックを与える元気もわいてくる。

### (3) 自在な検索と抽出

ハードディスク上に蓄積した膨大なテキストの海を、データベースとして有効に活用するには検索ソフトをうまく使う必要がある。筆者が愛用しているのは商用ネットワークのNIFTY-Serve上で公開されているシェアウェア「ファイル検索大ボチ」(中谷賢一氏作 FMACUSL Lib1#589) である。たった1000円のシェアウェアだが、ファ

イルをいちいち開かずに複数のファイルの中身を覗くことのできるビューワーを備えている。任意のキーワードを指定し、検索対象として任意のフォルダを指定し、ボタンをクリックすれば、そのフォルダの全ファイルのなかでキーワードを含む行を一行ずつリストにして見せてくれる(図1)。さらにその中から特定の行をダブルクリックすると、もうひとつウィンドウが開き、その行を含む広い文脈を覗くことができる。この画面からコピー&ペーストによって必要部分だけを集めることができるのである。

図1 「ファイル検索ポチ」の画面



任意の語をキーワードにしてその語の使われたすべての文を一瞬で集めることも出来るし、後述するような一定の推敲記号をつけておけば、あとからその記号をキーワードとして検索し、特定の種類の誤り(冠詞ミス、時制ミス等)を含む文だけのプリントを作ることも簡単だ。このような生徒の“‘fresh’ errors”(Mann 1994)をもとにした教材は、生徒の興味関心を引き、真剣な取り組みを引き出す。

「ポチ」はマッキントッシュ用のユーティリティであるが、同様な検索ソフトはウィンドウズ用などにもいくらでもあるはずだ。またAWK(オーケー)と呼ばれるツールを使えば、テキストデータの中から条件にあうものだけを切り取って別ファイルとして出力するという芸当が一発ができる。

## パソコン・ライティングの手順

### (1) テキスト・ファイルのすすめ

パソコンを使ってライティングを指導する場合、テキストファイルとして保存させるのが後々何かと便利である。この形式のデータは汎用性が高く、マシンの機種やワープロのソフトが異なっても利用できるし、電子メールなどもすべてこの形式のデータである。また学習者コーパスとしてデータ化してあとあと分析したり、加工したりするにも便利である。筆者の勤務校では、生徒が個人で所有しているのはNEC、学校のコンピュータ室にあるのはマッキントッシュ、という状況なので、生徒はまず学校のマックで作成したものをフロッピーで家に持って帰り、NECで続きを打ち、完成させて提出する、という使い方をせざる得ず、テキストファイルが唯一可能な選択肢となっている。

### (2) フロッピーのフォーマット

今の記述からおわかりと思うが、勤務校は今現在LANを整備している最中で、筆者は5月現在まだ、生徒とのネットワークでのファイルのやりとりを行える環境はない。よって今日までの実践はすべて面倒ではあるがフロッピーディスクを介绍了やりとりに頼っている。マックとNECのように異なるプラットフォームで同一のフロッピーディスクを使用する場合にはひと工夫が必要である。通常NEC用として市販されているフォーマット済ディスクは「1.25MBフォーマット」だが、これは例えばマックでは読めない。プラットフォームを問わず読めるようにするには「DOS 1.44MBフォーマット」にしておく必要がある。

### (3) データのやりとり

さて環境が用意できたら、いよいよライティングの実際に入る。基本的な手順は以下の通り。まず生徒はドラフト1(D1)を作成し、フロッピーに保存して教師に提出する(ネットワークで結ばれているなら教師のコンピュータに送信する)。教師はD1をコピーし、それに対してフィードバックを打ち込み、違うファイル名(例:E1)で保存し、フロッピーを生徒に戻す。生徒はE1をコピーし、打ち込まれたフィードバックに基づいてリライティングしてD2を作成し、再び教師に提出する。この手順を、満足すべき最終ドラフトが完成するまで繰り返す。

単に作品を仕上げるためであれば、ファイルをコピーせず、そのまま上からオーバーライトすればいいのであるが、DファイルもEファイルも作業する前にコピーするのは、オリジナルを残すことで改善の過程を生徒自身に意識させるためと、教師の方で後で分析したり教材を作成したりする必要があるからである。

#### (4) 日本語使用の問題

伝統的に英語 (ESL) 教師は母語からの翻訳を極力排除しようと努めてきたが、どうやらそれは単純すぎる思いこみだったのかも知れない。我が身を振り返ってみても、もう20年以上英語学習をしているくせに英語論文を書く最初の構想の段階ではほとんど日本語でメモを作成している。もともと母語で記憶に保存されている分野のトピックについて書く時には母語で書いたものを後から英語に直したほうが内容的に豊かな作品が出来る (Friedlander 1990) という研究結果や、特に学力の低い生徒は直接英語で書くよりも翻訳で書いた方が内容・構成・文体の点で優れたものができる (Kobayashi & Rinnert 1992) という日本人大学生に関する報告もある。

しかしながら Kobayashi & Rinnert は、学力の高い生徒は、直接書いた方が翻訳よりも誤りが少ない、という結果をも併せて報告している。つまりレベルとの関わりもあるが、一般的に言って完成された翻訳を出発点とすると、その出発点に忠実であろうとするあまり、複雑な表現を使いがちになって結果的に誤りが増えるということらしい。よって、ドラフトの初期段階では日本語による構想を認めるが、日本語は骨組みだけとし、細部まで完成させる前に、徐々に英語に切り替えることをうながすのがベストではないだろうか。

### フィードバックの種類

#### (1) 内容・構成に関するコメント

もっとも大切な、内容・構成に関するフィードバックは、日本語によるコメントでいいだろう。この種類のフィードバックは類型化がむつかしく、あとで検索することはまずないからである。「このパラグラフは何が言いたいの?」「論理不明」

「どうして?もっと詳しく例をつけて」などと、簡潔に打ち込めばいいだろう。

#### (2) エディティング・コード

充分'Monitor'を働かせなかった結果だと判断される誤りに関しては直接訂正してしまうより、自力による改善を促すほうがよい (Ross 1982)。ただし自力といっても完全なセルフ・コレクションではかなり無理があり、何らかのヒントを与えてやる必要がある (板垣 & McNamur 1995)。

間接的フィードバックとしては(1)誤りの数を指摘する(2)誤りの存在する箇所を指摘する(3)誤りの存在する箇所および種類を指摘する、など salience の程度を変えていろいろ考えられる。ただし、テキストファイル上であるということでいくつか外的な制約がある。まず原則的に下線は使えない。また、「行」は、画面のサイズによって変わってしまうので、紙の上で行うように、当該の単語の下(行間)に何か書き込んでも画面が変われば位置がずれてしまう。よって、誤りの指摘のマーカーは該当箇所の直前あるいは直後に打ち込むか、該当センテンスの頭にまとめて打ち込むなどがよいだろう。手間はかかるが、該当箇所が2語以上にわたる場合はその部分を < >などの記号で囲み、その直後に誤りの種類を示すこともできる。ただしこれは結果がかなり見にくくなる。

どの方式をとるにせよ、後でデータベースとして活用するためには、自分で使用するエディティング・コードをある程度一定にしておくことが重要である。筆者は現在では、Mann (1995) が大学生用に授業で用いているというコードを一部アレンジしたもの(表1)を、原則としてセンテンスの頭に打ち込んでいる。

#### (3) 直接的訂正

誤りがその生徒の procedural knowledge ではなく declarative knowledge の欠如に起因している時は、エディティング・コードなどでヒントを与えてもまず無駄である。自己訂正の出来にくく誤りのタイプとしては語彙選択に関するもの (Ross 1982) などが知られており、そのような誤りに対しては直接、使うべき表現を示してやるほうが良い。ただし直接訂正は特に下位の生徒を補

表1 : Editing Codes 一覧

	名称	意味
AG	Agreement	主語述語の数の不一致
AR	Article	冠詞の欠如・不適切
CH	Choppiness	短すぎる文
FR	Fragment	破片
ID	Incorrect Idiom	正しくない熟語
IL	Illogicality	非論理性 論理がおかしい
IW	Insufficient Wording	不十分な言葉づかい
MC	Mechanics	スペリング/パンクチュエーション
NB	Number	単数・複数関係
PE	Poor Expression	いろいろな意味でまずい表現
PR	Preposition	前置詞が不適切
QP	Question Pattern	疑問文の語順やその他に問題有り
RD	Redundancy	同じ語句・表現が使われてくどい
RL	Relative Pronoun	関係代名詞が不適切
RF	Reference	代名詞の指すものが不適当
SL	Sloppiness	等位接続詞で文がだらだら続く
SV	Subject-Verb	主語と述語の関係が不適切
TR	Transition	つなぎ言葉が不適切
VO	Verb Voice	動詞の態が不適切
VP	Verb Problem	動詞の形が不適切
VT	Verb Tense	動詞の時制が不適切
WC	Word Choice	単語の選択が不適切
WF	Word Form	語形、品詞などが不適切
WO	Word Order	語順が不適切
XX		不必要的語がある。
??		意味不明、またはどうしようもない

注: Mann (1995)を基にしている

助する上で欠かせない指導であるが、正解を教えてしまうという性質上、紙の上で行つても單なる機械的書き写しになる危険性がある。ましてやテキストファイル上であれば、生徒が自分でその部分を打ち直す必要もなく、画面上で移動するだけで適正な文が完成してしまう。これを防ぐため、筆者は直接訂正はすべて大文字で打ち込むことにしている。こうすれば生徒は自分の手で打ち直さざるを得ないので、紙の上での直接訂正と同程度には、与えられた表現に対する意識を喚起出来る。

## 作品のpublication

“Just as members of an orchestra or actors and actresses in a play look forward to the final polished performance, so should the writer” (Mann 1994 p. 295). ライティング・プロセスは作品をpublishしてはじめて完結する。完成し洗練された作品を目にした時、書きあげた喜びと自信がわいてくる (Taniguchi 1991) のだ。この段階でこそパソコンの特徴を十二分に發揮し、美しくプリントアウトしてあげよう。テキストファイルはあまりこったレイアウトはできないので、一度ワープロソフトに読み込んだ上でフォントや段組みなどを工夫する。例えばCenturyの10ポイントで2段組みをすれば、600語程度のエッセイはA4の紙にうまくおさまる。これを人数分印刷して生徒に配れば、そのままリーディング教材にもなる。自分の作品を教師以外の読み手に読んでもらうという体験が、より読者を意識したライティングにつながる (Keh 1990)。

## 実践例

以上の記述のみからでは実際の授業の様子がわからにくいかも知れないので、最近の実践例をふたつ簡単に紹介しておく。

### (1) エッセイ・プロジェクト '96

1月末日締め切りの朝日英文エッセイコンテストを目標としてクラス40人に600語のエッセイを書かせた。冬休み中におおまかな構想を練らせておき、1月中の英語授業約30時間のすべてをライティング、リライティングに当てた。授業中は各自パソコンに向かって作業し、教師はそれを監督しながら個別あるいは全体に助言したり質問に答えるという形式をとった。テーマによっては英字新聞などを資料として与えた。40人のクラスを出席番号により偶数班と奇数班に分け、交互に2日に1回フロッピーを提出させ、原則として翌日には返却する、というサイクルで進めた。つまり教師にとってみると毎日20枚のフロッピーが提出されたことになる。これに対してさまざまなフィードバックを与えて返却するというやりとりを7回

繰り返した後、ファイナル・ドラフトをプリントアウトし、ブックレットの形にまとめて全員に配布した。またリライティングの過程で観察されたドラフトの質の変化および誤りのタイプを分析し(Shizuka 1996),その後の指導に役立てている。なおコンテストのほうは幸いなことに人工的延命治療の是非を論じた作品が佳作に入った。

## (2) 検定教科書を使って

4月からは2年生のライティングの授業(2単位)を*Write On!*(東京書籍)に基づいて行っている。この教科書のレッスンは、前半にモデルパラグラフと表現集、後半にガイドのあるライティングタスクという構成になっており、これを2時間で1レッスンというペースでこなしている。

予習として生徒はモデルパラグラフを紙に書きし、授業の最初に提出する。1時間目の授業ではモデルパラグラフの内容と表現を簡単に確認し、すぐパソコン上でライティングタスクをこなす作業に入る。授業中に終わらない者は授業外の時間を使って仕上げ、3日後にD1の入ったフロッピーを提出する。これに対してエディティングコードを打ち込んでE1を保存すると同時に、「ファイル検索犬ポチ」を使って誤りのタイプ別に整理し、誤文訂正のためのプリントを作成する。2時間目の授業では、このプリントを使って全体に対するフィードバックを行い、またフロッピーを返却する。生徒はE1に入っているエディティングコードの種類と数を記録し、D2を作成し、フロッピーの次回提出時(つまり次のレッスンのD1提出時)に再提出する。これで1サイクルが終わる。つまり上述のエッセイの場合と異なり、この授業では1回のみのリライティングでファイナルドラフトとし、次のレッスンに進んでいる。生徒に自分のもらったエディティング・コードを記録させているのは、自分の弱点を意識させ、かつ進歩を自覚させるためである。

なお、パソコンとは関係ないが、この授業と平行してノートにジャーナルを毎日書かせ、週に1回提出させている。こちらは気軽に書かせるのが目的なので表現上のフィードバックは原則として与えず、読んだ証拠にサインするだけである。

## まとめ

- (1)パソコンはリライティングの徹底性を高め、結果的にライティングの質を高める。
- (2)汎用性、加工のしやすさなどから、テキストファイルを用いるのがよい。
- (3)フロッピーを用いる場合、DOS-1.44MBフォーマットにすれば異なるプラットフォームでも使える。
- (4)データをすべてハードディスクに保存すれば、学習者コーパスになる。
- (5)コーパスを活用するには検索ソフトを用いる。
- (6)エディティングに用いるコードを決めておけば、データを検索・加工することによって、手作りの誤文訂正教材が手軽にできる。

## 引用文献

- Connar, U. & Farmer, M. (1990). The teaching of topical structure analysis as a revision strategy for ESL writers. In B. Kroll (ed), *Second Language Writing: Research Insights for the Classroom.* (pp. 126-139). Cambridge University Press.
- Friedlander, A. (1990). Composing in English: effects of a first language on writing in English as a second language. In B. Kroll (ed), *Second Language Writing: Research Insights for the Classroom.* (pp. 155-177). Cambridge University Press.
- Hatori, H. et al. (1990). *Effectiveness and limitations of instructional intervention by the teacher.—Writing tasks in EFL—.* Tokyo: The Ministry of Education.
- Hult, C. (1985). A study of the effects of word processing on the correctness of student writing. *Paper presented at the Annual Meeting of the Conference on College Composition and Communication.*
- 板垣信哉 & McNamur, M. K. (1995). 英作文の訂正・推敲とフィードバック効果の心理言語学的分析と考察。「東北英語教育学会研究紀要」, 16, 67-77.

- Kanatani, K. et al.(1993) *The Role of Teacher Feedback in EFL Writing Instruction*. Tokyo : The Ministry of Education.
- (1996). *Teacher Correction and Lexical Errors in EFL Compositions*. Tokyo : The Ministry of Education.
- Keh, C. L. (1990). Feedback in the writing process : a model and methods for implementation. *ELT Journal*, 44(4), 294-304.
- Knoblauch, L. & Brannon, L. (1981). Teacher commentary on student writing : The state of the art. *Freshman English News*, 10, 1-4.
- Kobayashi, H. & Rinnert, C. (1992). Effects of first language on second language writing : translation versus direct composition. *Language Learning*, 42(2), 183-215.
- Krashen, S. (1984). *Writing : Research, Theory, and Application*. Oxford : Pergamon Press.
- Leki, I. (1990). Coaching from the margins : issues in written response. In Kroll, B. (ed). *Second Language Writing : Research insights for the classroom*. (pp. 57-68). Cambridge University Press.
- Mann, R. M. (1994). Creating writers who want to improve and know how to. *Proceedings of the 33rd JACET Annual Convention*, 294-295.
- (1995). Who is doing the rewriting, the student or the teacher? *International Journal of Teachers of English*, 1, 1-10.
- of English Writing Skills, 1(3), 157-173.
- Ross, S. (1982). The effects of direct and heuristic correction on first year level college composition. *JALT Journal*, 4, 97-108.
- 静哲人. (1996). ライティング指導における教師の添削の効果の過小評価に対する警鐘—パイロット・スタディの結果を参考に—. 「関東甲信越英語教育学会研究紀要第10号」. 25-33
- Shizuka, T. (1996). *Degree of improvements and types of errors in EFL revision on computer : An analysis of an essay project*. IRLT Bulletin, 10. (In print).
- Taniguchi, J. M. (1991). The Writing Process and Writing Classrooms. *Bunkyo University Women's College Annual Reports of Studies*, Vol. XXXV, 31-42.
- Tono, Y. and Kanatani, K. (1995). EFL learners' proficiency and roles of feedback : Towards the most appropriate feedback for EFL writing. *Annual Review of English Language Education in Japan*, 6, 1-11.
- Zamel, V. (1987). Writing : The Process of Discovering Meaning. In Long, M. H., Richards, J. C. (Eds.), *Methodology in TESOL : A Book of Readings*. (pp. 267-278). New York : Newbury House.
- (しづか てつひと／福島工業高等専門学校)

## English Teaching FORUMのマルチメディア関係論文

### "Modem" Times : How Electronic Communications are Changing Our Lives (英語授業と研究活動のためのマルチメディア案内)

世界の英語教育の情報と意見が、平易な英語で発表されているFORUMの33-4 (1995年10月) 号所収論文。

インターネットを中心に情報革命の歴史から近未来の情報スーパーハイウェーの可能性までを概略し、図書館、美術館、研究機関のデータベース利用 (person-to-data electronic communication) の方法、創造的な授業での利用法 (Internet teaching strategies) を述べ、著者自身が運

営しているフォーラム (TESL-L electronic network, 1995年4月現在で世界79か国、7000人の会員を持つ) の活動状況 (person-to-person electronic communication) を具体的に報告し、参考文献を収める。

この論文のほかに同号は "Revisiting McLuhan's Thesis : The Medium is the Message" および "Internet Idioms" (インターネット用語の解説)などを掲載。

## すぐに使えるソフト・CD-ROM情報

菅野 晃

### 英語授業で使える素材情報とインターネットによる情報収集・交換の方法

今やパソコンブームは花盛りで、特に「インターネット」という言葉は、日常生活のなかにいつの間にか入ってしまい、もはや既成の事実となっています。しかし、教育界においては、まだ思考錯誤の段階です。

本稿においては、パソコンを使った英語教育を進める上で効果的であろうと思われる様々なソフトを紹介します。

### CD-ROMソフトについて

CD-ROMソフトは、教材はもちろん、ゲームの種類がかなりの数にのぼっています。

英語学習の教材としては、個別学習用としてたいへん効果的なものが多く出ています。音声面だけでなく映像の働きが学習者に有効に働きかけ、学習しているというよりもゲーム感覚で気軽に取り組むことができて、繰り返し、間違いを恐れずにできるのが最大の利点です。以下にいくつかのソフトを紹介します。

#### 〈1〉 QUICK ENGLISHシリーズ

(Windows版、Mac版)

[発売元 コムテック株式会社]

このシリーズは、操作マニュアルの中で述べられているように、「目標は、学習者がアメリカでどんな状況におかれても、現地の人と対等に会話ができるようになること」であり、「会話を何度も聞き、聞いた会話を何度も発音する練習を効果

的に行なえる」CD-ROMであることが紹介されています。

構成は、「様々な展開を予想した10通りの状況が設定されており、それぞれの状況に身をおき、画面と一体となって会話を進めて行くことができ、リスニング、発音はもちろん、文法や単語の確認、テストやゲームなどさまざまな内容が盛り込まれて」飽きずに取り組むことができます。

#### ・ジュニア 1, 2, 3

アメリカ人の家庭をモチーフにして、日常生活の様々な話題をアメリカの文化、習慣、国民性を所々に入れながら進行していきます。シリーズは3巻からなり、それぞれが10の場面で構成されています。

スタートするとパソコンの画面にビデオ映像が音声と共に流れ、話しが進行します。マニュアルでは、「文字を見ないで、できれば10回以上、繰り返し会話を聞く」と記されています。これは、学習者個人のレベルによって自由に再生すれば構わないでしょう。

「ビデオボタン」を使うことによって、会話を区切って再生したり、「スロー再生」をする機能がついており聞き取れない部分をゆっくりはっきりと再生することができます。

さらに、自分の声で1文ずつ録音する機能もついており、実際の発音と聞き比べて確認することもできます。また、「発音ボタン」を使うことによって注意すべき語句の発音のアドバイスが得られ、「発音コーナー」によって子音や母音の発音を口蓋図を見ながら、舌や唇、歯の動きや位置を確認して練習することができます。さらに、音は、男性か女性を選択することができます。

「文法ボタン」を選択すると、会話の中で文法に注意する部分が緑色で表示されます。知りたい箇所をクリックすると詳しい説明を見ることができます。「文法コーナー」では、会話文中に含まれる文法事項を詳しく知ることができます。

「語彙ボタン」を選択すると、会話中の注意すべき単語や熟語の説明が表示されます。

さらに、「文化ボタン」は、文化的背景についての説明が、さらに「文化コーナー」では、詳しい項目の説明を見ることができます。日本の文化との違いをわかりやすく、より具体的に説明されます。

「翻訳ボタン」は、会話部分の話し手の名前を選択すると、その文の日本語訳が表示されます。内容の確認の際には便利です。

以上は、Quick Englishジュニアの基本的な機能についての解説です。このCD-ROMソフトには、さらに特徴的な機能がついています。

「苦手段階別学習」が、その1つです。練習問題には、文法EasyとHard、語彙EasyとHard、文化EasyとHard、役割練習、理解度チェック、ヒアリング単語、そして、苦手段階別学習の10種類があります。苦手段階別学習は、文法、語彙、文化の問題各2種類、計6種類のメニューと連動していて、間違えた問題を集中的に学習できます。これによって、自分の苦手克服になります。

「ゲームメニュー」によって楽しく学習できるように工夫されています。具体的には、「クリアーアップ」では、問題文の空所部分に当てはまる単語の綴りを入れ、6回間違えると画面の飛行機が墜落するゲームです。「マッチングパズル」は、トランプの神経衰弱と同じルールで、関連のある表現を連続で見つけるゲームです。「クロスワード」は、単語の発音を聞いて、その綴りを入れていくゲームです。そして、「ホッピーフロッグス」は、葉っぱの上にあるばらばらの単語を並べ換えて文をつくるゲームです。

レベルとしては、中学校2年生以上から高校生程度と思われます。音声面を集中的に学習したいという学習者には適しています。

〈2〉ケンイチ君の留学日記（アメリカ編）

（Windows版、Mac版）

[発売元（株）日本パソコンコンピュータソフトウェア研究所]

副題として「インタラクティブ英会話アドベンチャー」とあるように、画面に登場するネイティビスピーカーの話を理解しながら自分でその応答を選択し、ゲーム感覚で学習者が主人公のケンイチ君に学習者がなって、様々な問題を解決していくソフトです。主に、リスニングの能力の育成には効果的であると思われます。シナリオは、合計で6種類あり、リスニング力と推理力を働かせて進めることにより、話の結末も変わります。さらに、予定時間も設定されるため、のんびりしていると、時間切れになってしまい、留学スポンサーである伯父さんからの援助も断られることになります。

ストーリーは、アメリカのカリフォルニアに留学しているケンイチ君のもとに、伯父さんが訪れてきてマリコ伯母さんについて調べて欲しいという依頼を受けて様々なやりとりをしながらストーリーを進めていきます。

ネイティビスピーカーからの質問や自分のしたいことを選択肢の中から選び、適切ではない選択の時には、時間のロスとなり制限時間内で進めて行くことが難しくなっていきます。

ナレーションの切り替えは、（1）日本語、（2）英語＋字幕、（3）英語の3種類あり、英語のみの場合が、一番消費時間が少なくてすみます。

“Pardon”ボタンを使うことにより、直前の画面を繰り返し再生ができ、制限時間に影響はありません。よく聞き取れない場合には、気軽に使うことができます。

さらに、市販のゲームと同じように途中でシナリオを、Save & Loadができます。したがって、途中で終了しても、次に始める時には、終了時の所から進めることができます。

“Video Memo”ボタンは、その場面を録画できる機能で、“album”ボタンを使って録画した場面を再生することができます。

アメリカの大学生活、寮生活、学生の様子を体験しながら、Listeningの力を伸ばすことができます。高校生以上が適切なレベルです。

〈3〉 LISTEN? — Ten Interactive English Lessons  
(Windows, Mac共用版)  
[Heinemann]

タイトル通りListeningについて10の項目について学習し、クイズや自分の声を録音してモデルの音と比較することができます。

学習項目は、以下の10項目です。

(1)Time (2)Prices (3)Parts of the car (4) Days of the week (5)At home (6)Places (7) Town map (8)The Johnsons' house (9)At a restaurant (10)At the Park

すべて、音声と絵が提示され、True/Falseや該当するものをクリックすると、直ぐに正解なのか間違いなのかを知らせてくれます。

さらに、Quick QuizとRecord Yourselfです。Quick Quizは、学習項目の中からいくつかを選択された内容が出題されます。解答結果については、学習項目、Quick Quizともに100%で表示されます。

音は、アメリカ英語とイギリス英語のうちどちらかを選ぶことができます。レベルとしては、中学生から高校生が適当であると思われます。

〈4〉 TOEIC SUPER TRAINING 470, 730, TRIAL  
(Windows版, Mac版)

[アスク講談社]

TOEIC (Test of English for International Communication)は、英語によるコミュニケーション能力を測定するテストで、点数によって結果が表示され、実施年度や問題の違いに関係なく評価基準が一定のものです。中学生、高校生よりは、大学生や社会人の受験が多いテストです。

解答はすべてマークシートに記入する客観形式で、Listening (100問, 45分) と Reading (100問, 75分) の2つの形式から構成されています。

内容的には、中学や高校の段階で学習するものも含まれています。

このシリーズでは、まずはTRIAL TESTでまず学習者自身のレベルや弱点を確認し、TOEIC SUPER TRAINING 470 (日常生活においては、要点を理解し応答に関しても自分の意志を伝える

基本的な文法、構文そして語彙は身につけているレベル) で弱点を補強し、学習を進めます。さらに、レベルアップをめざす学習者は、TOEIC SUPER TRAINING 730 (どのような状況でも適切にコミュニケーションをはかることができ、話題が特定の分野でも対応することができるレベル) で学習することができます。3種類のCDの問題をすべてこなすと合計で、1800を超える練習問題を解いたことになります。

〈TOEIC SUPER TRAINING 470〉

学習項目は、以下の通りです。

• LISTENING

Dialog [Key Expressions]

- 1 Advice
  - 2 Agreement/Disagreement
  - 3 Asking about Time
  - 4 Asking about Place
  - 5 Asking about Quantity
  - 6 Commands
  - 7 Confirming
  - 8 Invitations
  - 9 Offers
  - 10 Opinions
  - 11 Plans
  - 12 Small Talk
  - 13 Suggestions
  - 14 Yes/No Questions
  - 15 Reasons
- Dialog [Vocabulary]
- 1 Finance
  - 2 Personnel & Labor Affairs
  - 3 Mail & Services
  - 4 Public Facilities
  - 5 Company Financial Matters
  - 6 Routine Company Matters
  - 7 Health
  - 8 Conducting Business
  - 9 Company Profile
  - 10 Managing a Company
  - 11 Travel
  - 12 Job
  - 13 Education & Sports

- 14 Economy
- 15 Sales Management
- Announcement [Listening Comprehension]
  - 1 Talk
  - 2 News Report
  - 3 Advertisement/Publicity
  - 4 Introduction
  - 5 Notice
- Announcement [Vocabulary]
  - 1 Political Action & Law
  - 2 Information
  - 3 Technology
  - 4 Personal History
  - 5 Sales Promotion
- READING
  - Rapid Reading [Reading Comprehension]
    - 1 Memorandum (Phrase Reading)
    - 2 Announcement (Phrase Reading)
    - 3 Club Membership (Phrase Reading)
    - 4 Article (Phrase Reading)
    - 5 News Article (Scanning)
    - 6 Notice (Scanning)
    - 7 Want Ad (Scanning)
    - 8 Letter (Scanning)
    - 9 News Article 2 (Skimming)
  - 10 Magazine Article (Skimming)
- Rapid Reading [Vocabulary Quiz]
  - 1 Office Memo
  - 2 Sports & Culture
  - 3 Club Membership
  - 4 Statistics
  - 5 Economy
  - 6 Warning Notice
  - 7 Job
  - 8 Mass Media
  - 9 Crime
  - 10 Medicine
- Grammar
  - 1 名詞 2 代名詞 3 冠詞 4 動詞 1 5 動詞  
2, 助動詞 6 形容詞, 副詞 7 分詞 8 動名詞
  - 9 to 不定詞 10 比較 11 関係詞 12 受動態
  - 13 接続詞 14 前置詞 1 15 前置詞 2

以上は、英語の基礎力養成のためにも効果的なレベルを設定したTOEIC SUPER TRAINING 470の学習項目です。中学3年から高校レベルの学習者でも十分対応できる内容です。

#### 〈5〉 TIME ALMANAC Reference Edition (Windows版, Mac版)

「タイム」の年鑑には、1989年から1994年1月4日までの5年分の全記事が収められており写真、地図なども収録されています。生きた情報が得られる点ではたいへん便利で貴重です。

#### INTERNETによる情報収集について

##### (1) Search Engine を利用しての情報検索

インターネットを利用して情報を収集するといっても、漠然と待っていてもなかなか効率良く集めることはむずかしいものです。クモの巣のように張り巡らされたウェブ、すなわちWWW (World-Wide Web) で、インターネット上に散らばる情報をあるテーマに基づきながら有機的に結合されたものの中で、必要な情報を得るためにサーチエンジンと呼ばれる情報検索システムを使うことが最短で効率の良い方法です。

サーチエンジンといつても種類によって得意分野、不得意分野があります。

###### a. Yahoo (<http://www.yahoo.com/>)

最も有名なサーチエンジンのひとつで、ヤフーと呼びます。ガリバー旅行記に出てくる人間の形をした獣の名前です。1994年4月に公開され、スタンフォード大学の2人の学生によって作成されました。

囲みスペースの中にキーワードを入れて、〈Search〉をクリックすると、検索が始まり、登録されているサイトの一覧が表示されます。検索結果はすべてそのサイトに接続されていますから青い文字をクリックすると目的のサイトに飛ぶことができます。

また、キーワードが不明でもジャンル別のインデックスから検索することもできます。

項目としては、以下のものがあります。

- Arts

- Business and Economy
- Computers and internet
- Educations
- Entertainment
- Government
- Health
- News
- Society and Culture
- Reference
- Regional
- Science
- Social Science
- Recreation

これらの中から知りたい項目をクリックしてさらに、細かく選択しながら検索することができます。たとえば、英語教育関係なら〈Education〉を選択し、次に〈Language〉を選択、さらに〈English〉というようにどんどん細かいレベルに飛んでいきます。

#### b. LYCOS (<http://www.lycos.com/>)

サーチエンジンとして現在世界で一番充実しているといわれるものが、ライコスです。その特徴は、収録数の多さです。全てのホームページの95%をカバーしているといわれています。

このサイトもキーワードを囲みスペースに入れ〈Go Get It〉をクリックすると、検索が始まります。検索結果については、ライコスの場合は派生語も自動的に検索されるため、関連性の高いものから低いものの順番に表示されます。したがって始めの方だけでも十分に検索項目の関連サイトです。

また、〈Search Options〉の設定で検索結果の関連性のレベルを深いものから浅いものまで選ぶことができます。具体的には、〈loose match〉から〈strict match〉までの5段階に設定ができます。

さらに、〈Display Options〉の設定では、1ページにいくつまで検索結果を載せるか、そしてどの程度の詳しさで表示するかが設定できます。

#### c. その他のsearch engine

その他のサーチエンジンとしては、以下のようなものがある。

- Galaxy (<http://www.einet.net/>)  
トピックスをたどりながらキーワードを入れて検索できるのはもちろん、検索したいサイトをどこで見つければいいかを表示してくれる便利なサイトです。

- Infoseek (<http://www.infoseek.com>)  
キーワードを入れる時に記号を使って検索条件を設定すると効率よく検索ができます。たとえば、以下のような記号です。

[1] キーワードの前に「-」(ハイフン)を付けるとその語を含まないサイトを検索してくれます。

[2] 2語以上でひとまとまりのキーワードは、「"」(ダブルクォーテイション)で囲むと1つのまとまりとしてその項目を検索してくれます。

[3] 2つ以上の名詞を入れる時は、「,」(カンマ)で区切ります。

[4] 2つ以上のキーワードの前に、「+」(プラス)を付けるとキーワードの一一致すべき語として指定することができます。

さらには、Personal Newswireという機能で検索する際の条件を登録することができて便利です。

- excite (<http://www.excite.com/>)

ライコス程は、収容数は多くはないですが、ヤフーのような使い易さがあり、以下のような項目があります。

- [1] NetSearch
- [2] NetDirectory
- [3] News
- [4] Cartoon
- [5] Columns

特徴としては、検索の結果が%で表示され、それぞれのdocumentのsummaryがついていて非常に便利です。

日本のサーチエンジンには、

- NIPPON SEARCH ENGINE  
(<http://www.JUNO.SFC.KEIO.AC.JP/NSE-N>)

慶應義塾大学湘南藤沢キャンパスにサーバーがあり、日本語でキーワードを入れると、それを英

語に翻訳して情報検索をしてくれる機能を持っています。また、逆も可能です。

他にもたくさんのサーチエンジンがありますが、使い易いものを使って、映像、音声、そして文字による情報を容易に手に入れることができますから、テキストに登場するどんな些細な事柄でも検索ソフトを駆使することでより具体的で詳細な情報を得ることができます。

## (2) 英語教育に効果的なホームページ

サーチエンジンを利用してnet surfingするのも、意外な発見があってそれなりに楽しいのですが、あらかじめホームページのaddressがわかっていてれば、時間の無駄にはなりません。以下には、4技能別にサイトを紹介いたします。

### a. Reading

#### [1] TIMEのサイト

(<http://pathfinder.com/@@SPRAfgVA9@oC8tXJ/time/timehomepage./html>)

週刊誌TIMEのホームページです。

#### [2] USA TODAYのサイト

(<http://www.usatoday.com/>)

アメリカの新聞USA TODAYのサイトです。内容が豊富で読みごたえがあり映像も多くどこからでも気軽に読むことができます。

#### [3] Impact Onlineのサイト

(<http://www.ed.uiuc.edu/impact/>)

アメリカのイリノイ大学が提供しているサイトで、英語の学習者に対してスポーツ、世界の出来事など様々なニュースを収集しています。音声でニュースを読んでくれる機能もついています。

### b. Listening & Speaking

#### [4] English as a Second Language-Listening and Speakingのサイト

(<http://www.lang.uiuc.edu/r-li5/esl/lisandsp.html>)

ListeningとSpeakingを中心に様々なレベルと内容が盛り込まれたサイトです。音声もダウンロードができ、繰り返し練習することができてたいへん利用価値の高い内容です。

### c. Writing

#### [5] Purdue University On-line Writing Lab

(<http://owl.trc.purdue.edu/by-topic.html>)

パデュー大学の提供しているサイトで、パデューユー大学の学生が書いた文を例にして表現方法について詳しく解説が載っており、参考になります。

#### [6] An Elementary Grammarのサイト

(<http://www.hiway.co.uk/ei/intro.html>)

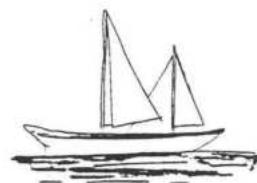
英文を書くための基本的な文法について解説がなされているサイトです。

## (3) Net Newsによる記事の購読と意見の投稿

さまざまなテーマについて意見の交換を行なうことができるのがNet Newsです。テーマごとのグループ（Newsgroups）は、世界中で1万以上もあり、自由に読むことができます。そして、そのニュースに対して自分の意見を投稿することができます。その投稿に対し誰かが意見を述べるというやりとりがなされます。

ただし、NetNewsを読むためのソフトが必要になります。Macintosh用には、NewsWatcher、Windows用には、WinVNなどがあり、ニュースを表示、保存、投稿ができる機能がついています。NIFTY-ServeやFTPから簡単に手に入れることができます。

(すげの あきら／東京学芸大学附属高等学校)



## 英語教育におけるマルチメディア導入の基礎

山内 豊

### I. マルチメディアと英語教育

マルチメディアやインターネットという言葉は最近もっとよく聞く言葉の1つだが、英語教師には、あまり親近感がもてず、授業にマルチメディアが導入されることに不安を抱く教員も少なくない。マルチメディアとは何か、それを使って英語教育でどんなことができるのか、その導入には何と何が必要なのか、それによって教員の役割や立場はどう変化するのか、などについての全体像が見えないことが、教員が不安を抱く原因の1つと考えられる。本稿では、全体像を見渡せるように、英語教育におけるマルチメディア導入のための基礎的知識を平易に解説する。

マルチメディアとは、文字と映像と音声を統合的にデジタル化して扱い、送り手と受け手の間でインターラクティブ（双方向的）に情報をやりとりできるものをいう。ここでは、近年、最も注目されているマルチメディアとして、CD-ROMとインターネットを取り上げ、これらにはどんな機能があり、英語教育でどのように利用できるのかを具体的に紹介する。そのとき、英語教師として、知っていた方がよいこと、できた方がよいことを解説する。ただし、授業以外に生徒指導、クラブ指導など多忙で、時間的にゆとりのない毎日を過ごす英語教師にとって、マルチメディアに関するすべての知識や技術を習得するのは不可能であるし、その必要もない。そこで、英語教師として、知らなくてもよいこと、他の人に任せればよいことも合わせて解説する。これらは、マルチメディア教育の推進校に文部省から選ばれた東京学芸大学附属高校での授業実践に基づくものである。

### 2. CD-ROM教材による授業展開

CD-ROMは、Compact Disc Read Only Memoryの略で、多くのマルチメディア型情報（500M以上）を収め、読み出すことができる。外形は、音楽CDと同じだが、文字や画像も記憶でき、急速に普及している。

#### 2.1 CD-ROM教材の分類と活用法

さまざまな種類のCD-ROMがあるが、これらは、電子ブック型、総合練習型、技能別練習型、百科事典型、電子辞書型、ゲーム型という6つに分類できる。

(1) 電子ブック型は、文章、カラーの静止画、native speakerの音声と音が提示され、楽しく物語を読んだり、聞くことができる。Kids Can Read Aesop's Fables (Discis, 1993) などが代表的だ。授業では、教科書でイソップ寓話やそれに類した物語を扱ったあと、発展学習として、個人または数人のグループで、各々好きな物語を選択して学習するのに適している。読んだ内容をパートナーや他のグループの人に報告し、報告されたことを書き取るような課題を与えると、読む、聞く、話す、書くという4技能を総合した練習ができる。『シンデレラ』や『ピーター・ラビット』など多くの種類が出ている。

(2) 総合練習型は、1つのCD-ROMで総合的な学習ができるよう工夫されている。『Quick English ジュニア』(アイ・エヌ・エス, 1995) は、ビデオ映像で示される英会話を視聴しながら、発音練習、単語練習、英文の意味解釈、文法説明、聞き取り練習、文化的知識学習ができる。各課の

終わりには、到達度判定テストもついている。放課後や家庭での独習に向いている。

(3) 技能別練習型は、各々の4技能を高める訓練に重点を置いたCD-ROM教材だ。速読訓練用として、Vortex (Tenax Software Engineering, 1995) がある。これは、英文を読むとき、モニタ一画面上に流れる単語の速度を学習者が変えられる(1分間に1~3000語まで)。徐々に単語が流れる速度を上げて読む練習を進めることで、速読力の訓練ができる。

(4) 百科事典型は、文章と写真と音を組合せたマルチメディア・データベースだ。Our Times (The Multimedia Encyclopedia of the 20th Century) は、映像とナレーションによって、世界大戦や東西対立などの20世紀の出来事が説明されている。授業では、「東欧の民主化」とか「20世紀の芸術」というような課題を与えて、CD-ROMから情報検索させ、英語で発表させる活動が有効だ。

(5) 電子辞書型は、コンピュータ上で辞書が引け、単語の意味だけでなく、関連したカラー写真やnative speakerによる発音まで聞けるCD-ROMもある。American Heritage Talking Dictionary (Softkey, 1994) は、American Heritage Dictionaryの電子英英辞書で、20万の見出し語、50万の類義語、20万の検索キーワードをもつ。定義、品詞、語法、語源、イディオム、同意語などの他に、個々の単語の発音がすべてnative speakerの発音で聞くことができる。

(6) ゲーム型は、ゲームをやっていく中で、英語を身につけられるCD-ROMだ。Sesame Street Letters (ABC/EA Home Software 1995) は、Sesame Streetの登場人物、音楽、テレビ番組の一場面などが登場するゲームを集めている。カラーの楽しい絵のいろいろな部分をマウスでクリックすると、その部分が変化したり、登場人物が話したりする。場面の変化を楽しみながら、形についての言い方(shape identification)をマスターさせるゲーム、文字と発音の関係をマスターさせるゲーム、ライム(rhyme)を含む単語を見つけるゲームが含まれている。登場人物の話す英語は、語彙レベルは平易でも、自然な速さなので、

生の英語の聞き取りにも適した教材と言える。早期英語教育や中学の授業に効果的だが、高校生以上でも、息抜き的な用途に使える。

## 2.2 CAI (CALL) と CD-ROM教材

CAI (Computer Assisted Instruction) は、コンピュータと学習者が双方的にやりとりしながら学習を進めるシステムである。コンピュータは画面上に問題を出し、学習者が誤答すると、同じ問題を再提示したり、ヒントを出したりする。学習者の正答率や理解の程度に応じて、コンピュータが次の適切なレベルの問題を自動的に選び出題する。このように、CAIは「個人差に応じた学習」が可能となる。語学学習用のCAIをCALL (Computer Assisted Language Learning) と呼ぶことも多い。カラー画像や音声を組み入れたCALL教材もCD-ROM版で多く開発されている。かつてのCALL教材の開発では、英語教師が英文を書き、写真を集め、プログラムを組み自作していた。これは、2、3分の教材を開発するにも、莫大な時間と労力を要する作業だった。最近では、さまざまなマルチメディア型教材がCD-ROMで提供され、総合学習型のように、CALLとして十分使える教材も増えている。一般の英語教師にとって、CALL自作用のBASIC言語やオーサリング言語などは、もはや必要性は低いと言えよう。今や、CALLは、かつての自作から、授業の目的に適したCD-ROM教材を選択し、使いこなす時代になりつつあると言えよう。

## 3. インターネットによる授業展開

### 3.1 インターネットと英語

インターネットとは、世界各地のさまざまなネットワーク(コンピュータが相互に結びついた集合体)が相互に接続した統合的通信網で、ネットワークのネットワークと言える。もともと1970年代にできたアメリカ国内の研究機関や軍事施設を結ぶネットワークが発展する形で、現在の地球的規模にまで広がり、今では6千万人の利用者がいて、世界中の約75%の国々で利用されていると言われている。インターネットは、文字ばかりでな

く映像や音声も扱えること、必要な情報を関連づけて自由に世界中のネットワークに接続できることが大きな魅力である。

インターネットでの使用言語は、各国の母国語のほか、共通語としての英語が一般的なので、地球的規模でインターネットを活用するには英語運用力が必要だ。逆に、多くの情報が英語で提供されるインターネットを英語教育に効果的に導入し活用すれば、学習者の英語力を高められる。

### 3.2 インターネットへの接続

インターネットに接続するためには、次の5つが必要だが、以下の専門用語を細かく覚える必要はない。大まかな仕組みと必需品を知っておくだけでよい。

- (1) コンピュータ本体は、子機としてウィンドウズ・マシンまたはマッキントッシュが多く使われている。利用者のアカウント (IDとパスワード) を自由に発行したり、ホームページを自在に開設するには、親機 (サーバ) としてのワークステーションも必要になる。
- (2) 通信回線は、アナログ回線、デジタル回線 (ISDN) の2種類がある。
- (3) モデムまたはTA (ターミナル・アダプタ) またはルータが、インターネット上でコンピュータ相互の情報をやりとりするために必要だ。アナログ回線にはモデルが、デジタル回線にはTAまたはルータが必要だ。モデルまたはTAはダイヤルアップ接続に、ルータは専用線接続に対応する。
- (4) ソフトウェアは、インターネットに接続するためのソフトと、電子メールやWWWなどのサービス利用のためのソフトウェア (EudoraやNetscapeなど) の2種類が必要だ。
- (5) アドレス (address) は、IIJなどのプロバイダ (インターネット接続サービス業者) と契約すると入手できる。

〈知っておいた方がよいこと〉

授業で活用するために、どの程度の設備が必要かと管理職などに聞かれたときのために、「インターネットのサービスを授業でフル活用するには、親機のワークステーションと子機のパソコンを組合わせ、デジタル回線の最低で64Kbps、可能な

ら128Kbps以上の速度で専用線に接続する必要があること」を知っておく。

〈他の人に任せればよいこと〉

コンピュータの設定や管理は業者に任せる。または、コンピュータ専任のスタッフに任せる。これは、理科の実験助手やL.L.助手と同様に必要不可欠だ。業者の対応が間に合わず、助手がない場合は、コンピュータのよくわかっている同僚に任せる。

### 3.3 英語教育におけるインターネットの活用

インターネットが提供している7つの主要なサービス (機能) を英語教育でどのように活用できるかについて、4技能に基づき、次のように分類できる。

#### インターネットのサービスと4技能

(R: reading W: writing L: listening S: speaking)

機能	R	W	L	S
(1) 電子メール (E-mail)	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>		
(2) ネットニュース (NetNews)	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>		
(3) 遠隔操作 (Telnet)	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>		
(4) ファイル転送 (FTP)	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>		
(5) 情報検索 (WWW)	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	
(6) ホームページ	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>		<input type="radio"/>
(7) TV会議			<input type="radio"/>	<input type="radio"/>

#### (1) 電子メール (E-mail)

コンピュータを介して、世界中の人々とやりとりできる電子メールを使って、国際文通を通して、reading, writing技能を高められる。現実の文通相手がいるため、書くことを通じての本来のコミュニケーションが実現される。自分のために書かれた英文なので、生徒は真剣に手紙を読む。相手から手紙の返事が届くという前提のもとに作文するので、生徒の書く意欲も高められる。

〈知っておいた方がよいこと〉

電子メールの基本的な書き方、相手を尊重する、プライバシーを守るなど基本的な通信上の約束ごと (netiquette) を知っておくとよい。また、

Intercultural E-Mail Classroom Connections (<http://www.stolaf.edu/cgi-bin/iecc-form-submit>)などの国際文通の相手校を紹介してくれるインターネット上のサービスの利用方法を知っているとよい。

〈他の人に任せればよいこと〉

電子メールのアドレスの発行は、親機（サーバ）の管理者に任せる。ただし、教員がサーバ管理者を兼任している場合には、この発行作業は時間と手間がかかることを知り、管理者への感謝の気持ちを忘れないようにする。個々の生徒の電子メールの英文添削は、ALT (assistant language teacher) に任せるとよい。

#### (2) ネットニュース (NetNews)

インターネットを介して全世界に無料で配達される電子ニュースのうち、学習者の興味・関心に合った分野 (Netgroup) を選択させる。購読することでreading技能を高められ、投稿することでwriting技能も伸ばせる。関心のあるNetgroupの検索方法を知っている必要がある。

#### (3) 遠隔操作 (Telnet)

自分が使っているコンピュータから、遠隔地にある他のコンピュータを操作できるTelnet機能を使い、世界中の図書館の蔵書目録やデータベースの検索が、英語を使ってできる。これにより、reading技能および情報検索技能を高められる。ニフティ・サーブやPC-VANなどのパソコン通信にも接続できる。ただし、Telnetの接続先でサービスを受けるには、相手先の使用権 (IDなど) をもっている必要がある。

#### (4) ファイル転送 (FTP)

必要なファイルを、他のコンピュータから自分のコンピュータまで転送して入手するFTP (File Transfer Protocol) 機能を使って、最新のデータ、ソフトウェア、電子テキストなどを入手できる。インターネット上には、『イソップ物語』『不思議な国のアリス』『ハックルベリー・フィンの冒険』『テス』『白鯨』をはじめとする、電子化された小説や雑誌が蓄えられている。各々の生徒の

興味・関心に応じた電子テキストを、FTPを使って無料で入手させ、副読本的に使用して多読指導することができる。ただし、容量の大きなファイルの転送には時間がかかり、有限な容量のインターネットの回線に負担をかけるので、できるだけ、近くのFTP情報源から入手するのがエチケット (netiquette=net+etiquette) であること知っておく必要がある。

#### (5) 情報検索 (WWW)

WWW (World Wide Web) は、世界中に広く (World Wide) 分散して存在するインターネット上の情報をクモの巣 (Web) のように相互に結びつけた (リンクした) システムだ。情報は、本をイメージした「ページ」という単位で管理され、関連した情報が相互に結びついている。学習者は関連した情報を次から次へと渡っていき (ネット・サーフィン)，求める情報へたどり着ける。

ホームページは、インターネット上に存在するさまざまなWWW情報源の入り口のこと、本では、表紙に相当する。さまざまなグラフィックや写真、さらには音声や音楽などを取り入れ、視覚的にも聴覚的にも魅力的なものになっている。

WWW上には、White HouseやNASAなど、さまざまな有名な機関がホームページを開設している。これらにアクセス (接続) して、英語の説明文を読ませたり、インターネット版のNew York TimesやJapan Timesなどを読んで、記事の概要・要点をまとめる学習を行わせることができる。

WWWでは音声、音楽も扱えるので、音声ニュースを提供するVOAやABCニュースや、スターダンスのインタビューを聞けるHollywoodのページ、英語の歌が聞けるページなどに接続して、自然の速さで話される英語の聞き取り練習を行える。

WWWの検索機能を使うと、学習者にある課題を与えて、情報を検索しながら問題解決させる「課題学習 (調べ学習)」を英語で行わせられる。学習者に「自分の好きな映画 (俳優)」、「現在の環境破壊の実態」というような課題を与え、インターネット上で調べさせ、その結果をレポートさせる。学習者は、多くのホームページを渡ってい

くことになるので、英語で書かれた多量の情報から、自分にとって必要な情報に着目して、迅速に読み進めていく（速読の）必要性に迫られる。これは、従来の日本の英語教育の主流であった、限定された量の英文を文法構造などを細かく考え、日本語に訳しながら読んでいくという「文法訳読」方式とは大きく異なる。欧米に留学すると、多量の英文を短時間で読んで要点をまとめる必要性に迫られるが、インターネットを英語学習に取り入れることによって、同じような環境に学習者を置くことができる。このため、学習者は、従来の遅読の習慣から脱却し、情報検索型の速読（scanning）技能および概要・要点把握（skimming）技能を高められる。

#### 〈知っておいた方がよいこと〉

インターネット上の膨大な情報の中から必要な情報を探し出すために、分野別とキー・ワード検索の2つの方法があり、情報の種類（WWW情報か文書情報か）によって、どの検索サービス（YahooかOpenTextかGopherなど）を使用すると効果的であるのかは知っておくとよい。画像や動画や音声を扱ったホームページを閲覧するには、回線速度にもよるが、かなりの時間がかかることを覚悟し、実際に授業で使う場合には、事前に画像や動画や音声ファイルをファイル転送して入手しておくと、待ち時間が少なくて授業がスムーズに進む。

#### 〈他の人に任せればよいこと〉

1つ1つの情報源のアドレスをメモしたり、覚える必要はない。検索サービスのYahooから、White House homepageとキー・ワードを打ち込めば、いつでもホワイトハウスのアドレスが調べられ、これに接続できることを知っていればよい。

http://www.whitehouse.govというような個々のアドレスは忘れてよい。

### （6）ホームページによる発信型学習

WWW上に学校のホームページを開き、学校紹介、学校行事紹介、クラブ紹介、自己紹介などを生徒に英語で書かせ、世界に向けて情報発信させることができる。適宜、写真やイラストや音楽や生徒自身の音声なども組合せると、魅力的な

ホームページが出来上がる。

先の課題学習で調べた結果を英文レポートにまとめ、自分の学校のホームページに掲載することもできる。相手校がある場合には、相手校とのメッセージのやりとりをする部分をホームページの中に作り、生徒の情報交換の場とすることもできる。このように、ホームページ作成を通して、writing, reading, speakingの技能を高められる。  
〈知っておいた方がよいこと〉

どんな手順でホームページを作成するかは理解しておく必要がある。静止画を撮るためにデジタル・カメラや動画を撮るためにデジタル・ビデオ・カメラがあり、写真をコンピュータに取り込むためのイメージ・スキャナがあることは知っておきたい。ただし、これらの実際の操作は、得意な同僚や生徒に任せてもよい。なお、ホームページ上に掲載する写真や音楽などの著作権（知的所有権）への配慮は十分に注意すべきである。

#### 〈他の人に任せればよいこと〉

ホームページを作るには、HTML（Hyper Text Makeup Language）という言語が必要だが、これを実際に書くのは、慣れた同僚や生徒に依頼すればよい。最近では、モニター画面上で文章を書いて画像や音声を貼り付けると、それをHTMLの書式に自動的に変換してくれるソフトもあるので、これを活用すれば、簡単にホームページが作成できる。

### （7）TV会議（CU-SeeMe）

TV会議（video conference）は、インターネットでつながれた複数のコンピュータの間で、動画（モノクロ）と音声によるリアルタイムの対話をを行うものだ。米コーンELL大学（Cornell University）で開発されたCU-SeeMe（シュー・シーミー）というソフトウェアを利用して実施する。一度に最大8個のウインドウ（窓）を開けるので、世界中の8カ所から会議に参加できる。TV会議を英語で行うことで、listeningおよびspeaking技能を高められる。海外の人々とリアルタイムで直接話し合えるので、伝達手段としての英語に対する認識が高まり、積極的にコミュニケーションしようとする関心・意欲・態度が養成

され、結果として、生徒の国際理解力を高めることが期待できる。

TV会議実施には、デジタル・カメラとマイクロフォンの追加と、通信回線速度が128Kbps以上であることが必要だ。実施準備として、お互いのコンピュータのアドレス、接続する時刻、話し合う話題などを、電子メールやファックスなどで事前に確認しておくことが必要だ。

#### 4. マルチメディア時代の英語教師の役割

今後、マルチメディアがますます普及していく中で、授業のあり方や教師の役割も変化していくと予想される。学習者は、CD-ROMを使って個々のレベルとペースに応じた学習ができるようになり、インターネットから最新の情報を検索し入手できるようになる。知識の直接伝授から、必要な知識をいかにして獲得するか、その方法を教えることが中心となる。従来の授業では教師が知識を伝え教え込む情報源であったが、マルチメディアを活用した授業では、教師は後ろに下がって援助役に回り、主役は学習者自身になる。したがって、授業形態は、教師中心の知識伝授型から生徒中心の問題解決・情報発信型へ変化していく。これにともなって、教師の学習デザイナーと学習支援者としての役割がより重要となる。さまざまなCD-ROMやインターネット上に膨大に存在する情報の中から、学習目的に有効な（素材）情報を吟味・選択し、生徒に適した教材になるよう再構成し、授業をデザインする技能が必要となる。学習展開の中での生徒のつまずきを予測し、学習を支援できる技能も要求される。

マルチメディアが教育に普及すると、コンピュータと学習者のインターラクション（interaction）だけで学習が進むので、教師は不要になるという話がある。これは、単なる知識伝達者としての教師は不要になることを意味している。逆に、すぐれた学習デザイナーや学習支援者としての教師はますます必要になる。すぐれた学習デザインや学習支援ができるためには、コンピュータやインターネットの知識があるだけでは不十分である。中高年のベテラン教師の現場での豊富な教育経験

が必要であり、大学教員などの研究者の第2言語習得理論や心理言語学に基づいた語学教育への洞察力も必要だ。教育者の要望を実現するための、メーカーの設計者や技術者の技術開発力も必要である。マルチメディア時代に効果的な教育を実施するためには、これらのさまざまな分野の専門家の連携が不可欠なのである。

機械操作が苦手な中高年の教師にとってマルチメディア時代は受難の時代と言わざる事があるが、これは誤りである。豊富な経験に基づく、彼らの授業設計力や生徒のつまずきを予測して学習を支援していく方略（strategy）こそ、マルチメディア時代の教育に必要不可欠なのである。知つておいた方がよいこと、知らなくてもよいこと、他の人に任せればよいことを区別すれば、情報の洪水に押し流されたり、無駄な時間と労力を費すこともなくなるだろう。ハードウェアとソフトウェアの進歩により、かつてより、機器操作は比べ物にならないほど簡単になり、プログラミングもほぼ不要となった。ここに紹介したCD-ROMやインターネットの基礎知識と簡単な操作は非常に短期間でマスターできる。いったんマスターすれば、マルチメディア時代は中高年のベテラン教師こそが、自信をもって存分に実力を発揮できる舞台なのである。

#### 【参考文献】

- 鈴木 博. 1995. 「マルチメディア時代への英語教育」『英語展望』No. 101. pp. 9-12.
- 村井 純. 1995. 『インターネット』 東京：岩波書店.
- 山内 豊. 1996. 「インターネットと英語教育—国際TV会議による新しい言語活動の展開」 *ELTAT (English Language Teacher's Association of Tokyo)* . No. 41. pp. 34-38.
- 山内 豊. 1996. 『インターネットを活用した英語授業』 東京：NTT出版.

(やまうち ゆたか／東京学芸大学附属高等学校)



## 『マルチメディア時代の子どもたち』

坂本 昇他著

A5判、381頁、2,800円

産調出版

尾関修治

## 教室の壁を崩すには

本書は主に3種類の執筆者（計16名）によって分担執筆されている。現場で実際にマルチメディア利用教育を行っている小中学校の教員と、教育工学などの研究者、さらには行政担当者などの三者である。内容もそれにあわせ、マルチメディア教育の理念の部分、実践報告の部分、それにマルチメディア教育を実現し推進する学校環境や行政措置などに関する部分で構成されている。さらに、マルチメディアが利用される場面を、教育現場、家庭、子どもたちの生活、と多面的にとらえているのも特徴である。

実践報告や取材レポートを読んでいると、マルチメディアを利用した教育実践を通して、生徒の主体的、協調的な学習活動が促進され、さらにクラス間の壁や、学校間の壁がなくなっていく様子が分かる。つまり、インターネットを含めて、マルチメディアとは学習者にとって自分の知識を教室の外へつなげ、学んだことを外在化し表現する道具となっている。一方で、教師は「子どもを外に出さないで、王様となっていはっている先生」ではなく、「開かれた先生」になることを求められている。

現在の教育の問題点とマルチメディア教育の可能性と課題は建築家の視点からも論じられている。

子どもたちは教室という百年一日の貧しい環境の中で自分のスペースを持っていない。私自身最近学生の席に数時間座ることがあって驚いたが、体格に合わない堅い座席と小さな机に1時間座り続けることが苦痛なだけでなく、小さな収納スペースに収まる教科書とノートだけで生産的な仕

事をするのは非常に困難である。子どもたちはこんな身動きのとれない環境でコミュニケーションを行ったり創造的な活動をすることを求められている。児童の就学が困難だった時代には子どもたちを社会から隔離して教育することに意義があったわけだが、高度情報化社会=生涯学習の時代に1日のかなりの時間を閉鎖的な環境で過ごすことが本当に学習活動にとって効果的なのだろうか。

この教室という空間が学校教育の硬直性を象徴しているように思われてならない。カリキュラムや教科書、教材、さらには教育手法や教育の目的にまで染み込んでいる硬直性・閉鎖性から生徒と教師を解き放っていくことが、マルチメディアという新しい学習環境に期待されている。

現在小学校での英語教育とマルチメディア導入が議論されているが、この2つが同時期に取り上げられているのは偶然ではないと思う。

小学校での英語教育が、受験英語に組み込まれてしまった中学や高校の英語教育の準備でないとしたら、それは日本をも越えた多様な社会と文化に目を向けていくことに意義があるのであろう。いつか出くわしてしまうかもしれない時のための「とっさのひとこと」を覚えるために英語を学ぶわけではなかろう。教育の場面を教室から世界へと開いていくこと、それが本来の語学教育と、これからマルチメディア教育に求められているはずである。

マルチメディアなど自分には関係ない、教育のスタイルを自分は変えるつもりはないとおっしゃる人にはぜひ一読をおすすめしたい。さらに、関係する参考文献として以下の3冊をおすすめしたい。

- ・戸塚滝登『コンピュータ教育の銀河』晩成書房、1995.
- ・浜野保樹『マルチメディアマインド』BNN、1993.
- ・ニコラス・ネグロポンテ『ビーリング・デジタル：ビットの時代』アスキー出版局、1996.

(おぜき しゅうじ／中部大学)

## 『インターネットで英語学習

——英語をモノにするための  
インターネット活用法』

岩村圭南著

B5判、190頁、CD-ROM付、3,500円  
アルク

笠島準一

インターネットは英語教育に貢献しそうだとは言うものの、コンピュータの苦手な人には近づきがたい点がある。しかし英語の教師であるからには、ある程度どのようなものかを知っておくことは大切であろう。

本書『インターネットで英語学習』は、そのような英語教師が読むものとして、あるいは「見る」ものとしてふさわしいと言える。「見る」と付け加えたのは、コンピュータのスクリーンの写真が多く掲載されていて、コンピュータを持っていない人でも大体の様子がわかるからである。どのような英語が使われているのか、どのような情報が得られるのか、またどのようにしてその情報を得るのかが視覚的に理解できる。

ある程度インターネットに通じている人には英語学習に関連するURL(住所)が紹介されている点が有益であろう。

第1章は「ネットサーファーへの道」と題して、ハードウェア、ソフトウェアならぬ、押し入れの中で眠ってしまうコンピュータ機器、クロゼットウェアにならないようアドバイスがある。

第2章は「英語力アップのためのインターネット活用術」で、本書の中心となる箇所である。現在最も人気の高いソフトNetscapeを使って説明されているので実用性が高い。

私は昨年の4月から1年間メルボルン大学で客員研究員として過ごした間、ずっとこのNetscapeを使っていた。つくづく、コンピュータの操作は実に容易になってきたと実感させられる。以前はマニュアルを見ながらコマンドを打つのが、今では画面から適当なものを選びさえすれば

よい。コンピュータの初心者にとっては、今は以前よりもずっと取り組みやすい時代なのである。

Netscapeでも打ち込まなければならないのは、いわば目的地の住所であり、例えば朝日新聞の英語版を読もうと思えば、  
<http://www.asahi.com/>

と打つ。在豪中はここに接続して、日本語を選び、その日の新聞をよく読ませてもらった。私がインターネットの魅力を最初に感じたのはこの、海外にいながら日本語でその日の新聞が読める、ということだった。購読料は無料である。

本書の第2章にはこのようなニュース・新聞から、娯楽・芸術・世界旅行をスクリーンで楽しむ方法が示されている。しかし本章で最も重要なのは英語学習で、例えばアメリカのイリノイ大学が提供するESLプログラムなどが紹介されている。テストを受けることができ、採点をし、間違えた箇所を指摘までしてもらえる。ReadingとWritingだけではなく、Listening and Speakingの項目もある。まさに、日本にいながら海外の大学で学んでいる感じである。

第3章は「電子メール；その仕組みと活用例」を取り上げている。一般的な説明と、英文電子メールの実際が示されている。

第4章は「ホームページで情報発信」と題し、自分のホームページを作る方法が示されている。

第5章は「インターネットの今後と21世紀の英語学習」が論じられている。この議論は本書だけのテーマではなく、英語教師一人一人が考えなくてはならないものである。より身近になった生の英語環境、より必要になった大量の英語に取り組む能力、より可能性の増えた英語でコミュニケーションする機会など、このような現実の変化を踏まえ、教える側も、学ぶ側もさらに効果的な英語学習を模索すべきであろう。

なお、本書にはCD-ROMが添付されている。ある程度のコンピュータの知識があれば、本書で取り上げられた内容の一部が疑似体験できるようになっている。

(かさじま じゅんいち／上智大学)

## 『インターネット・サーフィン —英語の海の泳ぎ方』

渡辺雅仁著

A5判、271頁、1,600円

ナツメ社

橋 俊一

本書は、「英語の敷居をより低いものにして」かつ、「インターネットを実用になる道具として使う」方法について解説したマニュアルである。「英語教師」かつ「インターネット初心者」向きに編集されたものではない。

本書の構成は、第1章「ふつうのパソコン通信ユーザーはインターネットをどう使うか」、第2章「アクセスせずにインターネットを知る方法」、第3章「e-Mail すべてができる」、第4章「ダイアルアップをより快適に」の4章からなり、著者のインターネット体験を通してインターネットの理解を深めていくように工夫されている。また、「英語が苦手な人」に配慮してか、各章に、実際の e-mailなどを題材とした英文読解の課題が与えられている。

本書の特徴は、旧来の技術である e-mail をインターネット利用の中心に置き、Netscape, MosaicなどのWWWブラウザによるWWW探索に関する記述は全体の1/3にも満たない点にある。CU-SeeMe や Real Audioなどの比較的新しい技術に関する記述もない。しかし、それも一つの見識である。WWWで得られる情報は一方的であり、百科事典的である。Lycos, Yahooなどの検索エンジンを利用すれば、手早くそれなりの情報が手に入る所以便利ではあるが、カタログを閲覧するようで深みに欠ける。WWWの利用は、「自分が本当に必要としている情報を、対話を通じて深めながら得る(P. 169)」というインターネット本来の目的には適合しないのかも知れない。

e-mailを利用して、インターネットをどう「実用になる道具」として使いこなすかに関しては、第3章に詳しい。e-mailによる Archie サーバー(アーカイブファイル検索システム)利用とその

意義、anonymous FTP サーバーの検索方法と検索結果、Mailing Listへの登録方法などが具体的に述べられていて、「研究」のためにインターネット利用を考えている人にとっては参考になる記述が多いと思われる。

しかし、私のような、「授業+趣味」のためにインターネットを利用しようと考えるユーザーは、「明日使える教材や情報」を求めて、ついつい手軽な WWW に頼ってしまうのが現状である。著者には、「授業」と「インターネット」とを絡めた視点からの統編を期待したいところである。

ここで、教育現場でのインターネットの活用に関する情報ソースを書き添えておきたい。

e-mail の授業への活用に関しては、Nifty-Serve の「教育実践フォーラム (FKYOIKU)」上で活発な実践報告を読むことができる。e-mail を、どの場面で、どのような形で利用していくかが具体的に示されていてとても役に立つ。研究利用だけでなく、教育利用においても、e-mail がインターネット利用の基本なのである。もちろん、WWWの活用についても全国の先生方の様々なアイディアが集まっている。WWWは日進月歩の技術なので、単行本よりは雑誌の方が、雑誌よりもインターネットそのものの方が、より新鮮な情報を得ることができるので有利である。通産省の100校計画などにより、Home Pageを持つ中学・高校が急増した現在、WWWは、情報発信だけでなく、リンクを張ることにより、生徒の意見交換の媒体に進化していく可能性がある。e-mail、WWWに関してはアルクの English Network も力を入れている。CD-ROM も添付されており、CU-SeeMeなどの最新版も手に入る。

インターネットはこれからも変化し続ける。未来の職業の約半分は、まだ存在せず、これから生まれてくる職業であると言われているが、同様に、私たちは未来のインターネットの姿のほんの一部しか見ていないのである。

(たしばな しゅんいち／筑波大学附属高等学校)

## マルチメディア関係新刊から

『図解インターネット』 杉浦洋一著, A5判, 206頁, 1,300円 ナツメ社

これからインターネットを始めようとする人を対象に、概念がつかみやすい図解・写真とわかりやすい解説・語句の説明を見開き2頁に収める構成の親切な入門書。インターネットとは何か、何ができるか、どう使われているか、基礎知識と接続の仕方、WWW・電子メール・ネットニュース・テルネットほかの実際的な使い方などを独立した11のパート、事典的に読める80の項目にまとめて解説。注は繰り返しをいとわずにつき、具体的なトピックやデータを扱っているコラムも参考になる。

『インターネット「英語」超ビギナーズ・ブック』 南 紀子・田中 亘著, A5判, 166頁, 1,500円 バベル・プレス

高卒レベルの英語でインターネットを楽しむための、実際的な例文と解説をまとめた使いやすい入門書。ゲーム、旅行、映画、本、ショッピング(Online Shopping)など、15のトピック別に単語・表現を説明し、ジャンル別 Vocabulary Check、インターネットの常識をまとめたコラム、WWWおすすめサイト、キーワードの解説を収める。

『インターネット「英語 E-mail」超ビギナーズ・ブック』 細部 充・M. D. マナー著, A5判, 174頁, 1,500円 バベル・プレス

E-mailの接続、送り方から、従来の手紙・ファックスとの比較で英語の特徴と書き方・使い方の説明、具体的なメールを例をもとに説明した書き方の手引き、用語辞典他を収めた入門案内。

『そのまま使えるEメールの書き方・使い方』 永綱浩二・石塚美佳・澤木泰代著, A5判, viii+206頁, 1,800円 日本経済新聞社

第I部は、類書を読んだが難しくて挫折した人にもわかるように、インターネットの仕組みと可能性、楽しみをエピソードをはじめてわかりやすく述べたEメールのすすめ。第II部は、実際に使う時に参考になる、お知らせ、お見舞い、問い合わせ、スポーツ、映画、買い物、年中行事など、機能・概念・トピック別の例文・説明と応用力を

つけるヒントからなり、楽しみながら上達をめざすEメール英語入門。

『インターネットの英語』 小林敏彦著, B6判, 236頁, 1,500円 明日香出版社

英語上達の秘訣として、インターネットの電子メールとWWWの活用をすすめる英語「強化」書。読解力、語彙力、作文力そして聴解力・会話力の4章からなり、CNN, USA TODAY, ホワイトハウスなど、アドレス(URL), 英語レベルを明示した実際の新鮮な例文をもとに解説、手引き、勉強のポイントを収める。

『ラクしてマスター! インターネットの英語』 沢田 博著, A5判, 188頁, 1,400円 講談社

インターネットの常識と英語の特徴を述べた「ラクするネット英語・20のポイント」、画面の写真をもとに使い方のこつを示した「アクセスしながら覚えよう」、あいさつ、勧誘・招待、注文・要求、賛成・反対、苦情・言い訳などの決まり文句を集めた「超簡単・使える例文ベスト60」、「ネット英語・ミニミニ辞典」、「おすすめショッピング&ジャーナル・サイト」他からなる入門書。

『すぐ読める!すぐ使える!インターネット・イングリッシュ』 伊藤穰一監修, A5判, 214頁, 1,400円 ベネッセコーポレーション

インターネットでは、Eメールだけでなく、音楽を聞く、映画やCNNニュースを見る、ルーブル美術館の名画を鑑賞するなど様々な楽しみができる。インターネットでの英語の使い方・使われ方の特徴の説明も詳しく、一步進んだ文化としてインターネットを楽しむのに最適。

『インターネット時代のネイティブ英語運用辞典』 Geoffrey Leech 編著/田中春美・樋口時弘訳, A5判, xii+783頁, 3,980円 マクミラン ランゲージハウス

言語学の権威による原著を良心的な業績で知られる英語学者が翻訳した信頼の置ける文法と語法の総合的な活用辞典。時制、受動態、進行形などの概念と使い方、「お詫び」「許可」などの機能的表現、丁寧・親密などの表現形態、あるいは英米の硬貨と紙幣の種類などの文化的背景を扱い、英語の疑問が氷解する教師と生徒の必備書。

## ELEC ホームページ開設

英語教育の情報、ELEC の活動と研修案内を紹介する ELEC のホームページが 6 月に開設されました。URL は

<http://NetCity.OR.JP/ELEC/>

です。英語教育の発展をめざし、インターネット英語講座の開設など、Interactive な活動を準備しております。皆様からご意見・提案をお寄せいただきたいと思います。



What's New  
What's new on web

就職のキーワードは「英語」と「インターネット」!  
就職を控えて即戦力となる英語を身につけたい方へのメッセージです。

講師のご案内  
ELEC's Programs & Schedules

7月10日よりスタートする夏学期各コースの受講申込受付中です。ELEC 英語研修所の「国際理解のための美会話コース」「専門コース」及び、英語教員研修プログラムを、開講します。

オンライン通話講座  
Online School

ELECでは、オンライン通話英語講座を開講する予定です。このプログラムをよりよい内容とするために、現在皆さんのが意見を伺っています。ぜひアンケートにご協力ください。

ENGLISH JAPANESE

アンケートは英語版、日本語版があります。  
内容は同じですので、どちらにお答えいただいても結構です。  
英語を選ばれの場合、ご希望の方には、ELEC 講師が英文を添削し、コメントをつけてお返しいたします。また、10月末までにアンケートにお答えいただいた方全員にテレフォンカードを贈呈します。

財団法人英語教育協議会 ELEC 英語研修所について  
ELEC's Activities

ELEC 財団法人英語教育協議会 (ELEC 英語研修所)  
〒101 東京都千代田区神田3-20 神田中央ビル9F  
フリーダイヤル: 0210-38-8888 Tel. 03-3219-5221 Fax. 03-3219-5488  
[MAP] [E-mail : [elec@NetCity.OR.JP](mailto:elec@NetCity.OR.JP)]

## 「英語展望」バックナンバー

### No.101 特集：英語教育の意識変革

マルチメディア時代への英語教育 鈴木博／「英語」の授業は何を教えるか、について 若林俊輔/Achieving Better Cooperation: Team-Teachers in Japanese English Language Classrooms Craig Jackson／文法と伝達態度 今井邦彦／コミュニケーション重視の視点 米山朝二／An Introduction to Communication Strategy V. E. Johnson／新しい教科書像を求めて 小泉仁

伊藤健三教授と戦後英語教育：清水謙・太田朗・牧野勤・下村勇三郎・隈部直光・佐々木輝雄

ELEC 創立40周年記念

1995年度

## ELEC 賞論文募集

◎テーマ：「21世紀の英語教育」

財団法人英語教育協議会は、日本の英語教育の質的向上、英語指導の実践に資する研究と実践を奨励する目的で1966年に「ELEC賞」を設けました。本年はELEC創立40周年を記念し、日本の英語教育のあるべき姿への建設的な提言を募集します。なお、応募論文のタイトルは上記のテーマの範囲で設定して下さい。

◎賞：1席1名賞状および副賞30万円。

受賞論文は『英語展望』に掲載する。  
版権は当協議会のものとする。

◎審査委員

委員長：

大友賢二（常磐大学教授・筑波大学名誉教授）

委員：

羽鳥博愛（聖徳大学教授・東京学芸大学名誉教授）

鈴木博（宇都宮大学教授・東京大学名誉教授）

大東百合子（明海大学学長・津田塾大学名誉教授）

田辺洋二（早稲田大学教授）

◎応募資格：特に問わない。

◎分量：

(1) 和文／横書原稿 (A4判) で、12,000字以内 (図、表などの資料も含める) に納める。  
(400字詰原稿用紙30枚見当)

(2) 英文／A4判にダブルスペースで15枚以内 (図、表などの資料も含める) に納める。

\*いずれの場合もワープロで打って下さい。

◎論文の形式：

(1) 表紙に、論文名、氏名、住所、電話番号、勤務先 (学生は在学) 名、およびその電話番号を明記する。最後に応募者の学歴、職歴、研究歴を添える。

(2) 2ページ目に、論文要旨を、和文は400字以内、英文は100語内で添付する。

(3) 論文本体。

◎論文は未発表のものに限る。

オリジナルとそのコピー2部、合計3部を送る。  
応募論文は返却しない。

◎論文締切11月30日 (当日消印可)

◎論文提出先／問合せ

〒101 東京都千代田区神田錦町3-20  
神田中央ビル9F

財団法人英語教育協議会「ELEC賞」係  
Tel. 03-3219-5221

# アメリカの 人種と民族

31

國弘正雄

一年ぶりでまたお出会いします。

一年に一度の連載というのはどうも気がひけるのですが、編集部というか、ELEC自体の都合ですのでやむを得ません。不悪お宥し下さい。

今日は比較的最近に出たアメリカのニュース週刊誌*U.S. News & World Report*誌の5月6日号の特集Military Injustice(軍部による不正義)から人種差別主義の一例を引くことで始めることにします。

第二次大戦中、黒人将兵に対しては戦場における勇気への最高の栄誉たる大統領勲功賞(the Medal of Honor)がついぞ与えられなかつた、という事実を取り上げ、50年にわたるこの不正義がいま訂されるかも知れない、としています。

同誌の表紙は次のようにうたっています。(大意は略しますが不悪)

No black soldier received the Medal of Honor, America's highest award for valor, during World War II. The reason was racism. Now that 50-year-old wrong may be redressed.

(*U.S. News & World Report*: May 6, 1996)

そしてこの特集は50年後にして漸くこの不正義が訂正されようとして、第二次大戦に参加した黒人将兵のうち7人が、この勲功賞の指名を受けたと、次のように書いています。

題してDebt of Honor, つまりは当然の栄誉を与えるこなった国側の借りを返す、ほどの気持です。

The last act of a grateful nation's half-

century commemoration of the Allied victory in World War II may be a simple and long-delayed act of justice: Seven black American soldiers, all but one now dead, will be awarded the Medal of Honor for their valor and selfsacrifice while fighting for a segregated country in a segregated Army.

While 1.2 million black Americans served in World War II, not one received the nation's highest military honor, and only nine were awarded the second-highest, the Distinguished Service Cross. Now *U.S. News* has learned that after a selection process nearly three years long, the Pentagon has forwarded seven names to Congress and the White House. Only the president may award the Medal of Honor, but in this case Congress must waive the time limit for awarding World War II medals, which expired in 1952. The waivers for the seven are contained in the 1997 defense authorization bill, and such measures ordinarily are not passed until October.

(*Ibid.*, p.28)

(大意: 第二次大戦での連合国勝利を50年後の今日、感謝をこめて祝おうという国民的行事の最後の一幕は、長いこと顧みられることのなかった正義を行なうという単純きわまりない行為という形をとるかも知れない。黒人と白人とが分離された国家の当時の陸軍にあって多大な勇気と自己犠牲とを示した7人の黒人将兵に対し大統領勲

功賞が授与されるはこびになるからである。もっともその7人のうちで現在生き残っているのは僅か1人にはすぎないが。

第二次大戦に従軍した黒人将兵は百二十万人にも上るが、軍功に対して与えられる最高の栄誉である大統領勲功賞を得たものは一人とてなく、それに次ぐ栄誉たる勲功十字賞(D.S.C.)を受けたものもわずか9人にとどまっていた。

3年にもわたる選考過程を経て国防統合本部は7名の氏名を議会ならびにホワイトハウスに送付したことを本誌は知りえた。

大統領勲功賞を授けることができるは大統領ただ一人だが、第二次大戦がらみの栄誉についてはすでに1952年に時効が成立したこともあり、今回は議会がその時効の取り消しを行なわねばならぬ。

彼ら7人に対する時効免除の手続きは、1997年の国防支出法案に含まれているが、通常これらの措置が10月以前に通過することはない。)

大体の意味はおとりいただけたことだと思います。なおいつものことながら大意として掲げる拙訳は、あくまでも大意という名の意訳であり、厳密な訳文ではありませんので、その点は改めてご諒承下さい。

なお第二次大戦で黒人が未受賞なのは、アメリカがかわった他の戦争と比べても異例なのです。ベトナム戦争では239人の全受賞者のうち黒人も20人、朝鮮戦争では131人中2人、第一次大戦では124人中1人、米西戦争では109人中6人、そしてかの南北戦争でも1,520人中24人、ということですから、第二次大戦に限ってゼロ名というのは、たしかに異常なのです。

チャップリンの有名なことば、自分の国で1人殺せば死刑になりかねないが、外国兵をうんと殺せば勲章がもらえ、外国人をうんと殺せば英雄として銅像が立つ、というすごい皮肉をふと思い出し、禍々しい思いに捉えられるのですが、なぜ第二次大戦だけは黒人の受賞がゼロなのか、という疑問は残ります。

なお上例でsegregated Armyとありますが、軍隊がde-segregateされたのは、1951年、ときのト

ルーマン大統領の命令によってでした。原爆を広島と長崎に落とした、かのトルーマンによってです。

なお現存する唯一の生き残りはVernon Baker中尉という76歳になるアイダホ州はセントマリーズという小さな町の住人で、第92師団370歩兵連隊の25名から成る小隊の長としてイタリー戦線に参加し、少くとも7名のドイツ兵を殺したという「功績」(?)により、この栄誉を受けるよう推されている、ということのようです。

ただここで一つ興味深いのは、黑白が分離された当時にあっても、あの国の陸軍が、少なくとも立て前としては黒人に対する平等をうたい文句にしてきたという点です。1940年、陸軍は*Leadership and the Negro Soldier*という手引き書——ふつうArmy Service Forces Manual 5として知られます——を出し、民主主義の軍隊においては人種のいかんにかかわらず全員に対し平等の扱いをするよう奨励します。

大量の黒人が陸軍に入るようになったのは1942年以降のことですが、51年に完全な統合が行なわれる以前も、この手引き書は各級の指揮者、とくに黒人兵を部下にもつ指揮官にとって必読の文書でした。そしてその際のキーワードは、Know your men(部下をよく知れ)だったといいます。

その手引き書について以下の引用をどうぞ。

Manual M5—which was classified “restricted”—repeatedly warns commanders of black units to apply the same principles of leadership to all troops: Know your men, set high standards, stimulate initiative, maintain military discipline and courtesy. “The officer will not be able to answer adequately all questions which Negro troops may ask concerning their relation to a democratic Army. But he can make certain that, within his own unit, the democratic principles which the Negro soldier has come to accept as an American ideal will operate. And he can assure his troops that Army standards of training, performance, and leadership of Negro and white troops are identi-

cal," the manual says. It cautions commanders about patronizing attitudes and warns that officers who "think either consciously or unconsciously that there is some special way of dealing with Negro troops... run the risks of failure on the job assigned"

(Ibid. : p.30)

(大意：手引き書M5は取り扱い注意扱いを受けていたが、しばしば黒人部隊の指揮官に対し、白人の場合と同じ指揮者としての原則を適用するよう、くりかえし注意していた。すなわち、部下をよく知り、基準を高くおき、自発性を刺戟し、軍務規律と礼節とを維持するように、というのがその内容であった。

「自分たちと民主主義を標ぼうする軍隊との関係について黒人兵が発するであろうすべての問い合わせに對し、十分な答えをすることはできないかもしぬ。だが少なくとも自己の指揮下の黒人部隊において、黒人兵士がアメリカ的理想と受けとめるに至った民主的な諸原則が実践されるように留意することはできるはずである。そして訓練、達成、指導性についての陸軍の基準は、白人部隊であると黒人部隊であるとにかくわりなく、完全に同一であることを部下に納得させることが肝要である旨を、この手引き書はうたっていた。

そして上官たるもの、相手を見下げたような態度をとることを警め、意識的にあれ無意識的にあれ、黒人兵を相手にするには、特別な方法があると考えるようでは、与えられた任務に失敗する危険を冒すことになる」と警告していた。)

いや小生もはつきりといっておどろきました。ましてやこの手引き書が遠く1940年の昔に作られたにおいておやです。

この手引き書はまた黒人に對し、ステロタイプなイメージをもつことを警めています。往々にしてハリウッド映画がまき散らかしていた、黒人(ほか少数民族)についての否定的な定型化です。

For the benefit of white officers whose image of blacks had been shaped by Hollywood stereotypes—"as a lazy, shiftless, no-good, slew-footed, happy-go-lucky, razor-toting, tap-

dancing vagrant"—the manual patiently spells out the falsity of this image and again admonishes officers of "know your men" as a way to avoid stereotypes.

(Ibid. : pp.30—31)

(大意：白人の将校の場合、彼らの黒人像はしばしばハリウッド製の「怠けもので、定まりがなく、ダメで、動きがにぶく、お天気もので、かみそりを振りまわし、タップダンスに明け暮れる住所不定者」というイメージに色どられているのだが、その啓蒙のためにこの手引き書はこのあやまりを繰りかえし説き、これらのステロタイプを避けるために「部下をよく知る」よう訴えていた。)

娯楽性と意外性を強調するハリウッド映画が、少数民族をどのようにお手軽で類型化されたイメージで描いてきたかは、その被害者でもあった日本人として、黒人や他の少数派に大きく同情できる点です。

日本人といえば、出っ歯で、めがねをかけ、目がひきつり (slanted-eyes), 隠陥な策謀家、というイメージが定型化していました。大衆娯楽のこととて多少の類型化はやむをえぬにしても、当時のハリウッド映画はいささか極端かつ意図的でした。いまはすいぶんよくなりましたが、われわれ日本人のたとえば対アジア観にもそういう不正確さがないかどうか、反省してみる必要があるでしょう。

何しろこの手のステロ化したイメージは、ややもすると、国の対外政策にまで影響を与えかねないので、要慎が肝要です。

アメリカ人の対アジア観があの国のアジア政策にどうかかわったかについては、今は故人となつたマサチューセッツ工科大学のHarold R. Issacs教授に、*The Images of Asia: American Views of China and India*という名著があります。

残念ながらここには日本は入っておらず、中国とインド(のアメリカ人のイメージ)でアジアが代表されているのですが、先年、小生、東京外国语大学の小浪充教授との共訳で、『中国のイメージ』と題しサイマル出版会から世に問いました。

インドの部分は省略して中国の部分だけを訳出

したのでこういう訳書のタイトルになったのです。原著は1962年刊という今となっては時古りたものですが、現在の中米関係ひいては日米中の三角関係を考えるに際しても実に参考になる本で、名著というのはなかなかdateしないことの見本のような存在です。

何れにせよ、大衆社会や民主主義国にあっては、国民次元での対外イメージがその国の外交政策にも少なからぬ影響を及ぼすという重要な機微を活写している点で必読書といえましょう。なお原著は*Scratches on Our Minds*というのがもともとの書名（1958年刊）で、英文でお読みになりたい向きは、この二つの書名のいずれかでお探し下さい。

さてこのように筆を進めていくと、世はすべてこともなかったかのごとくですが、ここまでくるのは大へんだったのです。

以下は七人の黒人兵の一人の旧上官で、部下に大統領勲功賞を得させるべく懸命の努力を払い、いままさにその52年間の労が報いられたとしているWilliamsという人にまつわる美談です。題して“One officer's 52-year quest.”

When David Williams, a brand-new second lieutenant fresh from Yale University and Officer Candidate School, reported to Camp Claiborne, La., 54 years ago to help train black soldiers, he was welcomed by Capt. Charles Wingo, a Virginian. Williams said he was looking forward to helping ready the men for combat. “No need for that,” Captain Wingo replied. “We're just here to baby-sit Eleanor Roosevelt's niggers.”

Midway through World War II, the fact that the 761st Tank Battalion was being formed at all was little short of a miracle. Black GIs had demanded the chance to fight for their country instead of being consigned to the menial jobs of cooking, cleaning and hauling. The first lady had championed their cause.

(Ibid.; p.40)

（大意：イエール大学と士官候補生学校を了え

たばかりのホヤホヤの、デイビッド・ウイリヤムズ新任中尉がルイジアナ州はキャンプ・クレイボーンに着任、チャールス・ワインゴー大尉に迎えられた。黒人兵が戦闘に赴けるよう、訓練する機会を待ち望んでいる旨申告すると、ヴァージニア州出身のワインゴー大尉のいわく「そんな必要はないね。おれたちはここで、エリノアばあさんのためにクロンボどものおもりをしているんだから。」

第二次大戦の半ばを通じ、761戦車大隊がとにかくにも編成されようとしたこと自体が、奇蹟というに近かった。料理とか掃除とか運搬とかいったこまごました職務につかされるかわりに、祖国のために第一線で戦闘に加わりたい旨、黒人兵の方から要求が出ていたのである。そして彼ら黒人兵をバックアップしていたのは、他ならぬ大統領夫人であった。）

懐かしい名前が出てきました。FDRとして知られニューディール政策でリベラリズムの旗手であったローズベルト大統領、その夫人で小児マヒの夫を扶け、公民権、福祉その他リベラルな諸施策を推進する上で大きな功績のあったエリノア女史。

でも南部中の南部であるヴァージニア出身のこの大尉どのにとっては、ローズベルト夫妻など、いまわしさの極みだったのでしょう。そして南部人たる彼にとっては、niggerという蔑称も日常的に何ということもなく使いなれていたのかもしれません。

このniggerということば、小著『アメリカ英語の婉曲語法』中巻（ELEC出版部刊）でも詳説したように、とくにわれわれ外国人は何としても避けるべき侮蔑語です。ただあそこでも故H.ハヤカワ博士の一般意味論の名著『思考と行動における言語』（岩波書店刊）を引いて紹介したように、黒人の青年にとても親切にしてくれた老人が、niggerということばを連発するので、たまりかねたその青年がお願いだからniggerといわないではないと要請したところ、「それは知らなかつた、自分のところでは蔑称としてではなく使っているものだから、知らぬこととはいえ申しわけないこ

とをした」と丁重に謝られて却ってその黒人が恐縮かつ面喰らった、というエピソードが現にあったのです。

この種のことは小生も十数年の滞米中に自ら体験しましたし、ふつうはJapaneseの蔑称とされているJapについても単なる略称と思っている英語国民がいる——アメリカとは限りません——などのことがあるので、いちがいに断罪するわけにもいかないのです。

ことばのもつ玄妙さ、とでもいいましょうか。言語社会学的な視点が欠かせない、ということでもあります。

さてここでそのniggerということばを取り上げ、いずれも数人の黒人の反応を見てみようと思います。

知的にお洒落な高級誌として世界的に著名なThe New Yorker誌の、April 29 & May 6, 1996合併号に出ていた記事で、題してThe “N” Word. 何せsophisticationレベルの高い同誌の文章ですので取り扱いは困難をきわめるのですが、トライしてみます。

#### THE “N” WORD

The days when the use of the word “nigger” was an occasion for unpleasantness are not over. But various cultural upheavals and the legacy of Richard Pryor have put a new spin on the old saw “It’s not what you say, it’s how you say it,” and some people are now using the less toxic “nigga” to connote affection. Herewith a few views on what ain’t, necessarily, your father’s slur.

(大意：Nで始まる例のことば。

かのniggerということばを使うことが不愉快でなくなったわけではまだない。でもさまざまな文化面での変動や高名な黒人俳優だったリチャード・プライア―の遺産もこれあり、「何をいうかではなくどのようにいうかが問題だ」という昔ながらのお決まり文句に拍車がかかったかのごとくである。現にniggerほどは毒性の少ないniggaということばを使うことで親しみやすさを表す向きもある。必ずしもあなたのおやじさんの時代の蔑称

とはいえないこのことばについて、いくつかの見方を以下に掲げる。)

いずれも芸術・芸能関係の人物の発言なのでアメリカ人一般の語感や用法を示しているとは必ずしもいえませんが、アメリカ的背景や文脈が垣間見られて興味を惹きます。

Ellen Gallagher (thirty, visual artist) : “When black men use the word with each other, it’s like that scene in Toni Morrison’s novel ‘Sula’ where these Irish boys are harassing Sula on her way to school and one day she takes out her pocketknife, very deliberately cuts off the tip of her finger, and says, ‘If I can do that to myself, what you suppose I’ll do to you?’ That’s what I think black men did with the word.”

(大意：エレン・ギャラハー：30歳ヴィジュアル・アーティスト：黒人の男性同士がこのことばを使うときは、トニー・モリソンの小説『スULA』でアイルランド系の男の子が通学途中のスULAをかまつていじめるので、ある日彼女がポケットナイフを取り出し、指先をわざわざ切り、「あたしは自分にだってこれだけのことはできるんだから、あんた達をどうするか見当がつくわよね」と脅してみせた一幕のようなもの。黒人男性がこのことばを使うのはそれと同じことよ)

うんと意識しましたが不悪。なおこの女性は苗字からするとアイルランド系(?)ただし奴隸時代の主人の苗字を使っている黒人はたくさんいますので、この人もその例かも。

次は黒人の男性、

Delfeayo Marsalis (thirty, jazz musician) : “In general, it’s not a word I use. Too many brothers use it as a false assertion of negritude. But in very specific situations I will use it as a political statement. Once, a white musician played with me in Elvin Jones’s band for two weeks. He was used to making more money and having better accommodations, so he complained all the time and was a complete drag. So I told him, ‘Man, your problem is you need to

be a nigger for a couple of days.' He clearly understood."

(大意：デルファヨ・マーサリス（30才：ジャズ・ミュージシャン：ぼくのふつう使うことばではないな。黒人であることを主張しようとして見当ちがいをしている。でも特別な場合にはある種の政治的な主張としてぼくも使うがね。)

昔々エルビン・ジョウンズのバンドで2週間ほど白人のミュージシャンと共に演したんだけど、この男、もっと金をとっていたらしい扱いになれたもんだから文句ばかりいってさ、やり切れないったらなかったんだ。そこで面と向っていってやったんだ。「2日ほどニガーの身になってみるんだな」って。ちゃんと判ったさ。)

N'bushe Wright (twentysomething, actress) : "I don't feel like it's a feminine word, but my friend Stephanie will see you and be like, 'Hey, nigg-ah !!!' with all the love in the world and a big smile and come hugging you and kissing you 'cause she hasn't seen you in forever. And that's the same exact way that I hear it in the barbershop or walking down the street hearing boyz talking to boyz."

(大意：ウンブッシュ・ライト（20数歳：女優）：女性向きのことばではないわね、でも私の友だちのステファニーは会うとHey, nigg-ahっていうのよ。ただし愛情一ぱいで私をハグしてキスしてね。だってうんと長いこと会わなかったんですもの。そして床屋さんや街を歩いて男どもが全く同じような調子でお互いこう呼びあっているのを耳にするわ。)

なおこのboyzというのは俗語的ないい方でオネエほどの気持。オネエことは、ということでしょう。

次は

Vernon Reid (thirtyseven, rock musician) : "I don't employ it in regular speech. I grew up in the shadow of the civil-rights movement, and being called 'nigger' had the threat of death behind it. To me, using the word is like the

scenario where a hostage starts to identify with his captors, because his survival depends on them. Using it also relieves people of their responsibility. A nigger ain't got to do shit. You don't have to learn anything or be anything more than what you are."

(大意：ヴァーノン・ライド：37才：ロックミュージシャン：ふつうはぼくは使わないな、何せ公民権運動の陰で大きくなつたものだから、ニガーと呼ばれると殺されるのではないか、という怯えがするんだよ。)

ぼくにとってはね自分をニガーと呼ぶのは、捕虜が自分をつかまえた相手の真似をするようなものだ。だって自分の生き死にはその相手次第なんだもの。

自分の責任を解除する、という面もあるよね。ニガーっていっていればいやなことをしなくて済むんだ。何かむりをして何かをやろうしたり、自分以外に自分をよそおってみる必要なんかないんだ。)

次もなかなか真剣な意見です。

Barron Claiborne (twenty-nine, photographer) : "If everyone had a decent job and the same rights as everybody else, people could call you 'nigger' all the way to your nice home and your nice car, and you wouldn't care. I'm sure Eddie Murphy feels a little hurt when he's called 'nigger.' But then he gets into his Jacuzzi, and I'm sure it soothes it a little quicker than if I go back to my project. If we eliminated racism, we could have Nigger University and Honkytown and Yellow Fever College, and my Chinese friend and my white friend and I could go to Sambo Burger and have some Whitey french fries and nobody would care, because everybody would have equal opportunity and the word would have no power."

(大意：バロン・クレイボーン：29才、写真家：だれもがちゃんとした職業につき、みんなと同じ権利をもっていたとしたら、ニガーと呼ばれようと、何せよいマイホームとマイカーをもって

いるんだから、どうということはないさ。

たとえばエディ・マーフィーにしてもニガーと呼ばれたら多少は傷つくと思うよ。でもね、高級車に乗りこんだら、ぼくが団地に戻ってウジウジするよりはすぐにそんなことどうでもよくなると思うな。

もし人種差別が完全になくなつたとするなら、ニガー大学であれ、ホンキータウンであれ、黄熱病カレッジであれどうっていうことないし、中国人の友だちとチビッコサンボーハンバーガーショップに行って、白んぽフレンチフライと一緒に食べようが、だれも意に介したりはしないだろうね。

みんなが同じ機会をもっている以上、そんなことばなんぞなんの力もありはしないものね。)

なおさいごの引用でHonkeyというのはふつうユダヤ人を指す蔑称語、一方、Samboというのは数年前日本でもちょっとした社会問題になったクロン坊漫画の主人公のこと。

一方Whiteyというのは、白ん坊ほどの、これまたある種の蔑称です。

つまりこの写真家のいうことは、ひとくちでいうなら沙翁の有名なせりふWhat's in a name?ということなのです。

換言するなら実体が問題なのであって名称などは二次的なものにすぎない、というわけです。

たとえば貧乏人は何と呼んでも貧乏人なので、それを低額所得者とかlow-income familyという風に婉曲語法(euphemism)や曲りくどい表現(circumlocution)を用いて表面を糊塗しても、実体を変えていく努力がなされなければどうしようもない、というわけです。

自身が黒人であるこの写真家の発言にはズシリとした重さを覚えます。

婉曲語法の陥ち入りやすいおとし穴はここに明らかに存在します。まさにWhat's in a name?なのですね。ましてやそれが善意の(?)婉曲語法をはなれて、日本ではインフレについて田中角栄が、アメリカではウォーターゲートやカンボジア侵攻についてリチャード・ニクソンが用いたような歪曲語法ということになりますと、はじめから権力者や行政が一般市民を欺慢しようという意図

でことばを操作することで世論を自分たちに都合よい方向に動かしていこうというのですから、悪質かつ危険です。

いまの日本にもこの手の黒い魔術師の手があちこちでうごめいてはいないでしょうか。あっけなく、彼ら黒い魔術師——マスコミや広告業界などにもこの種の手合いは政治や行政同様にゴマンといいます——の手に搦めとられることのないよう、ことばというものの本質について思いをめぐらしていくことの大切さを痛感します。日米安保「再定義」とやらがらみで頻用される「極東有事」などは、その最たる、危険きわまりない例の一つです。

このテーマ、前出の『アメリカ英語の婉曲語法』の上中下3巻で小生がもっともつよく訴えたかった点でした。

ことば、というものには本来、事実を明らかにする(reveal)機能と、実体を覆い隠す(conceal)機能が二つながら同時に存在するのです。

そしてこの写真家の発言とともに、いまはシンガポールの元老役として上級相のポストにあるリー・クアンユー元首相が、小生などとのNHKの鼎談で、自分たちは後進国なんだからcall a spade a spadeではっきりそう呼んでくれ、開発途上国などというおためごかしはご免蒙りたいと、決然と言い放ったことを思いおこします。あれはもう20年の余になりますが、往時茫茫々、いまやシンガポールは一人あたりのGNPでは、アジアで第2番目の富裕国になっています。GNPがどうした、という意見も大いに可能ですが、いまやあの国がどの物差しに照らしても後進国でないことははっきりしています。

(くにひろ まさお／英国エдинバラ大学  
特任客員教授 [D. V. P.])



# 普遍文法と第一言語・第二言語獲得

ELEC 情報・資料の収集および分析グループ 有元將剛

## 1. はじめに

本誌1989年秋号に「第二言語習得研究と言語理論」(大塚達雄), 同じく1990年秋号に「第二言語習得研究の誕生と発展」(田中春美)が掲載されてから約6年が経った。その間に生成文法は大きく発展し, それとともに第一言語・第二言語獲得理論も発展した。本稿は最近の生成文法の発展を踏まえて, 普遍文法と第一言語・第二言語獲得との関わりを V. J. Cook と Mark Newson による *Chomsky's Universal Grammar: An Introduction* の第2版(Blackwell より1996年に出版)を中心に, 適宜他の著作, 論文にも言及しながら, 概観する。なおこの第2版は1988年に出版された Cook 単独による第1版を2倍近くに拡大したものである。第1版には日本語訳があるが, 第2版には今のところ日本語訳はない。この本は入門書として書かれたものであるが, 言語獲得の諸問題に深く取り組んでおり, 言語理論と言語獲得についての大変優れた著作であるといえる。なお, 言語理論と第二言語獲得については他に, Lydia White による *Universal Grammar and Second Language Acquisition* (Benjamins より1989年出版)がある。これには大変分かりやすい訳者解説を含む優れた日本語訳があるので(リディア・ワイト著, 千葉修司, ケビン・グレッグ, 平川真規子共訳『普遍文法と第二言語獲得』リーベル出版), そちらも参照していただきたい。

## 2. 言語獲得と機能範疇

言語の範疇には語彙的範疇と機能範疇がある。語彙的範疇は名詞, 動詞, 形容詞など内容があるも

のである。機能範疇は語彙的内容を持たず, 文法的意味を持つものである。最近は多くの機能範疇が設定されている。例えば, 従来名詞句といわれていたものは, aあるいはtheという機能範疇(Determinerを省略してD)を主要部とするDPであると考えられている。これはDP分析と呼ばれる。従来は(1)のように a teacher of English は teacher という名詞(N)を主要部とする名詞句(NP)と考えられてきた。N'('えぬばー' と読む)は語と句の中間の段階で, 主要部と補部(主要部に密接に関係する部分)がまとまった部分で, 名詞句の中で冠詞を除いた部分である。DP分析では, (2)のように従来N'であった部分がNPとなっている。逆に言えば, 語彙的な句の上にDPという機能範疇が覆い被さっている。

(1) [ NP [ Det a] [ N' teacher [ PP of English]]]

(2) [ DP [ D a] [ NP teacher [ PP of English]]]

また, 文の主要部は, 助動詞あるいはテンスの要素であると考えられている。この主要部は機能範疇であり, Infl(Inflectionの略)という名が与えられている。文は, 従って IP ということになる。また, 補部(目的語)だけでなく動詞の主語も, 動詞を主要部とした動詞句(VP)の中に存在するという「VP内主語仮説」を採用すると, 文の構造は次のようになる。

(3) [ IP pres [ VP [ DP The pig] says oink]].

文の主語は VP の中から IP に移動する。文の構造と名詞句(DP)の構造はパラレルであるのに注意されたい。DPの場合, 語彙的範疇の投射である NP が機能範疇 D の補部となり, 全体として DP を構成しているように, 文の構造においても語彙的範疇の投射である VP が機能範疇である

Infl の補部となり全体として IP を構成している。

疑問文は IP の上に更に CP という機能範疇があり、疑問詞、do が IP の中から CP に移動する。

(4) [ CP What did [ IP you eat ] ] ?

また、否定の not は Neg という主要部であると考えられている。

(5) John did [ NegP not [ see Mary ] ].

以上、生成文法における機能範疇について説明してきたが、以下、第一言語獲得と機能範疇についての Radford (1990) の考え方に対する反論を見てみよう。英語を母語とする幼児は、発達の初期の段階に次のような文を発する。

(6) a. Slug coming.

b. Pig say oink.

そして Radford は、24か月(プラスマイナス4か月)までの段階の文法には機能範疇がないと主張する。即ち、大人の文法では名詞句は DP であり、文は IP であるのに対し、24か月の子供の文法では、(7)のように、名詞句は DP ではなく NP であり、文は単に VP であると主張する。

(7) [ VP [ NP Pig ] [ v' say oink ] ].

機能範疇がないので、the はないし、3人称単数現在の s がつけられない。又、疑問文も、CP という機能範疇がないから、前置できない。

(8) Daddy go? (Where does Daddy go? の意) また、Radford はこれらの幾つかの機能範疇がほぼ同時期に現れると述べている。

以上、Radford の24か月の幼児の文法には機能範疇がないという主張を紹介してきた。大人の文法には機能範疇がある、幼児の文法には機能範疇がないという Radford の主張は、大人の文法は幼児の文法と大きく異なるという主張である。喻えれば、おたまじやくしが変身して蛙になるという考え方である。これに対し、おたまじやくしが突然変身することなしに、徐々に発達して蛙になるという考え方もある。Radford の考えは幼児と大人の間は連続性がないという点で、不連続のモデルである。これに対し幼児と大人の間の発達は連続性があるという、連続のモデルも考えられる。

Déprez and Pierce (1993) は子供の文法にも機能範疇があると主張する。英語を母語とする幼児は次のような否定文を発する。

(9) a. No I see truck.

b. Not Fraser read it.

生成文法の初期には、大人の文法では否定要素を文頭の位置から右方向へ移動させるの対し、子供の文法では右方向の移動はないと考えられていた。しかし、Déprez and Pierce は、否定要素は大人の文法でも子供の文法でも同じ位置にあると主張する。即ち、大人の文法では(3)のように、主語は VP 内の位置から左に動かされ、その結果、否定要素は主語の右になる。ところが、子供の文法では、主語が VP の中にいる。すなわち、子供は主語を左に動かさないので、否定要素は主語の左にある。Déprez and Pierce は彼らの主張の証拠として、次のような文が子供の発話に見られないことを挙げている。

(10) a. Not/No can John leave.

もし、否定要素が文頭にあって、大人の文法では右に動かされるのに対し、子供の文法では文頭に留まるとしたら、助動詞を含む場合においても否定要素が文頭にあってもよさそうであるが、(10) のような文は観察されない。子供の文法から大人の文法へ移行するために、主語を VP の中から移動させなければならないということを学習するのであって、NegP という機能範疇を学習するのではないというのが Déprez and Pierce の主張である。

英語とフランス語の(大人の)文法の違いの一つに、否定要素(フランス語では pas)と動詞の位置の違いがある。

(11) a. John does not like Mary.

b. Jean n'aime pas Marie.

Pollock (1989) は、フランス語の場合は動詞が VP の中から Infl へ移動するのに対し、英語の動詞は VP の中に留まると主張した。

(12) a. [ IP John does not [ VP like Mary ] ].

b. [ IP Jean n'aime pas [ VP t Maire ] ].

(12 b) の t は、動詞がそこから移動したということを示す<sup>1</sup>。さて、英語を母語とする幼児の場合は、上記のように、否定要素を文頭の位置に置く。ところが、フランス語を母語とする幼児の発話の場合、かなり初期の段階から、定型の動詞(テンスの語形変化をした動詞)の場合は、動詞が否定

要素の左に現れる。これは大人の文法と同じである。Déprez and Pierceは、この事実は子供の文法にも Infl という機能範疇があるということを示していると述べる。フランス語の場合は子供の文法でも動詞が VP の中から Infl まで移動したと考えると、動詞が否定要素の左にあることが分かる。さらに、幼児がテンスの語形変化をさせないで、動詞を原形で使用した場合、動詞は否定要素の右にある。動詞がテンスの語形変化をしない場合は、動詞が VP の中に留まり、Infl まで移動しないと考えることができる。幼児の発話でテンスの語形変化があるかないかで、動詞と否定要素の語順に違いがでることは、Infl という機能範疇があるという主張の強い裏付けになると Déprez and Pierce は述べる。すなわち、テンスの語形変化がある場合に、動詞が語形変化を受ける場所である Infl まで移動する時に否定要素を越えるので、その結果、動詞が否定要素の左に來るのである。

さらにフランス語で主語が代名詞の疑問文では動詞が主語の前に置かれる。これは Infl から C への移動である。フランス語を母語とする幼児は、このような場合(13)のように、動詞を主語の後に置いたままにする。

### (13) Où il est? (=Where he is)

Déprez and Pierce は、フランス語を母語とする子供の文法で、V から Infl への移動は早くから認められるが、Infl から C への移動は遅れて現われると述べる。Déprez and Pierce はスウェーデン語などでも、Infl から C への移動は遅れて現れると述べているが、本稿では省略する。

しかし、英語では、(14)のように助動詞が主語の前に出ている文が、かなり早い時期から見られる。

### (14) What is Fraser doing?

Déprez and Pierce は、もし(14)で助動詞が C へ移動しているのなら、他の言語とは違って、英語では Infl から C への移動は早くから現われることになると述べる。そして Déprez and Pierce は、(14)では大人の文法のように助動詞が C へ移動したのではなく、大人の文法とは異なって、主語が VP の中に留まっていると主張する。(スペー

スの関係で議論は省略する。)また、子供は(15)のように、平叙文にも助動詞が主語の前に来ている文を言うことがあるが、この場合も主語が VP の中に留まった場合と考えることができる。

### (15) Was monkeys climb on that balloon.

また、助動詞が主語の前に来る疑問文の割合が 3 歳の頃一時的に減ることが知られている。減る前の時期は、主語を移動させないで疑問文を作っている時期で、一時的に減った時期は、子供が混乱している時期である。そして、減った後また安定した時が、正しく助動詞を C に移動する作り方を確実にした時期と考えることができる。

Déprez and Pierce は、Infl からの C への移動は V から Infl への移動より遅れると主張するが、彼らは子供の文法に CP という機能範疇がないと主張している訳ではない。CP はあるが、助動詞の C への移動が遅れると主張している。もし、CP という機能範疇がなかったら、Wh 疑問文で疑問詞を移動させる場所がない。しかし、子供は(14)のように、早い時期に Wh 疑問文を言う。これは CP という機能範疇があるということを示している。もし、CP がないのなら、Wh 疑問文を言う時に、疑問詞を移動させない文を言うはずであるが、そのような文(You saw what?)を子供が言うことはない。

以上 Déprez and Pierce の考えを紹介した。二つのことが明らかになった。一つは、子供の文法にも機能範疇があるということである。もう、一つは、変化は徐々に起こるということである。Infl から C への移動は他の移動より遅れるのである。Radford が主張するように、機能範疇が一気に具体化するのではない。人間の言語は非連続な発達をするのではなく、徐々に発達すると考えられる。

## 3. 普遍文法と第二言語獲得

生成文法は、言語は全ての人間言語に共通の部分である普遍文法と、各言語ごとに異なるパラメータの部分から成り立っていると考える。第一言語獲得は各パラメータの値を決定することであると考えられている<sup>2</sup>。

第二言語学習者が、第二言語獲得の際、普遍文

法を使っているかどうかについて多くの議論がなされてきた。Cookは3つの可能性があるという。一つは、(16)のように第二言語獲得の際に、第一言語獲得と同じように普遍文法に接近しているという考え方である。

(16) L1 learning → L1 Competence

↓

Universal Grammar

↓

L2 learning → L2 competence

普遍文法の一つに構造依存がある。これはあらゆる人間言語は、構造に基づいて移動などの操作をしており、単語を数えて、例えば前から4番目の単語を前に動かすということはないという原則である。これは言語獲得の際に学習できる性質のものではなく、普遍文法の一部とされている。(17 a)のような文を疑問文にする時に、第一言語獲得者は(17 b)のような間違いをしない。

(17) a. The man who is here is tall.

b. \*Is the man who here is tall?

日本語を母語とする英語学習者も、中国語を母語とする英語学習者も、(17 b)は英語の文ではないと考える。だから普遍文法のうち、構造依存の部分は第二言語学習者に知られていると考えることができるとCookは述べる。2番目は(18)のように、第一言語の言語能力を通して、普遍文法に間接的に接近しているという可能性である。

(18) L2 learning → L2 competence

↓

L1 learning → L1 competence

↓

Universal Grammar

英語は必ず主語を言わなければならない言語である。これに対し、スペイン語は主語を言わなくてもよい言語である。スペイン語を母語とする人は、「主語が必要かどうか」というパラメータを「主語不要」の方に設定する。スペイン語を母語とする人が英語を第二言語として学習する際、最初の段階では主語不要というパラメータを第二言語にもあてはめようとする。これは第一言語に現れた普遍文法を間接的に使用しようとしたものである。第三の可能性は(19)のように、第二言語学習では、

普遍文法の原理は全然利用されないというものである。

(19) L2 learning → L2 competence

L1 learning → L1 competence

↓

Universal Grammar

英語のWh疑問文は疑問詞を文頭まで移動させなければならない。その時(20)のように複雑な部分からの移動は不可能である。

(20) \*What did Sam believe the claim that Mary had bought t?

ところが、日本語、中国語のWh疑問文は、疑問詞を移動させる必要はない。そして(21)のように複雑な部分でも尋ねることができる。

(21) あなたは何を買った人を捜しているのですか？

中国語を母語とする人の約半数しか、英語では(20)のように複雑な部分は疑問にできないということを知らなかった。だから、普遍文法の原理は第二言語学習では使われていないとCookは述べる。しかし、私見では、中国語で可能であるにもかかわらず、半分の人が(20)が不可能であると考えたことこそ、普遍文法の原理が使われていることを示しているとも考えることができる。

色々な外国語教授法は、この3つの可能性のどれかを前提としているとCookは述べる。直接法、コミュニケーション・アプローチは、一番目の普遍文法への直接の接近を考えている。また、翻訳法は第一言語に頼るという点で、普遍文法への間接的な接近を考えている。文法の説明を中心とする教授法は、普遍文法への接近がないという立場であろう。(17 b)についての日本人の判断も、普遍文法の問題というより、「主語」という概念を教えられているからとも考えられる。

#### 4. 代名詞と再帰代名詞と言語獲得

英語では(22)のように目的語の位置にある代名詞は、主語と同一人物を指すことはできない。

(22) John patted him.

生成文法では再帰代名詞の用法を規定する条件として束縛原理Aを、そして代名詞の用法を規定する条件として束縛原理Bを想定している。

束縛原理A 再帰代名詞は近くで先行詞に束縛されていなければならない。

束縛原理B 代名詞は近くで先行詞に束縛されていってはいけない。

(束縛するとは、先行詞が代名詞・再帰代名詞をc統御しているということ。c統御とは、簡単にいえば、文中で優位な位置にいること。)なお、束縛原理は生得的であると考えられている。言語間の違いは、「近くに」という時に「どの程度近くか」という点でパラメータ化されていると考えられている。

さて、英語を母語とする子供は、発達のある段階で、再帰代名詞は正しく使えるのに、(22)のような代名詞は充分使えないということが事が知られている。英語を母語とする6才半の子供は、再帰代名詞に関しては能力が大人とほぼ同じであるに、代名詞については5割か7割かの正答率しかない。再帰代名詞が正しく使えるようになった後でないと代名詞の用法について発達することはないようである。何故なのだろうか? 子供は、代名詞を再帰代名詞と考える段階があると主張する人もいる。この見解によると、代名詞を再帰代名詞であると考えるので、(22)のような場合、代名詞と先行詞が同一人物であると考えるのである。しかし、この考えには、問題がある。Wexler and Manzini (1987)は先行詞から遠く離れた代名詞の使い方を子供ができるので、子供が代名詞を再帰代名詞と考えるという考えに反対している。また、別の考え方として、再帰代名詞に関わる束縛原理Aが発達の初期の段階から存在するの対し、代名詞に関わる束縛原理Bは後になって発達するという見解がある。しかし、Grimshaw and Rosen (1990)は、発達のある段階では子供は束縛原理Bを持っていないという考えに次の理由で反対している。今まででは、子供が(22)のように代名詞が使用できない時にも代名詞の使用が可能であると誤って考えることがあるという事実に基づいて、発達のある時期には束縛原理Bがないと主張されていた。しかし、もし束縛原理Bが全くないのなら、子供は、束縛原理Bに合致する文に対しても、合致しない文に対しても同じような反応をするはずであると、Grimshaw and

Rosenは主張する。しかしGrimshaw and Rosenの実験によると、子供は、束縛原理に合致する文と合致しない文では明らかにちがう反応を示した。(23)は場面1を正しく表わしている。そしてそれは束縛原理Bに合致している。この場合は、8割以上の子供がこの文が場面1を表わしていると正しく指摘できた。しかし、この文は場面2を表わしていない。場面2の状況ではこの文は束縛原理Bに合致していない。この場合は、従来の研究と同じように、約半数の子供が間違ってこの文は場面2を表わしていると判断した。

(23) Big Bird patted him.

場面1 Big BirdがErnieを叩く。

場面2 Big Birdが自分を叩く。

もし子供が束縛原理Bを全然知らないのなら、場面1と場面2で違いが出ない筈であるとGrimshaw and Rosenは考える。そして、Grimshaw and Rosenは子供は束縛原理Bを「知っている」が、それに「従わない」のであると主張する。それでは何故子供は束縛原理Bを知っているのに、それに従わないのだろうか? Grimshaw and Rosenは、まず(24)のような文と較べると、実験に使われる(23)のような文は、先行詞がないという点で不自然であるということを指摘している。

(24) John said that Mary came in at 6. He saw her.

そして、子供は代名詞には先行詞があると信じている。そうすると、(23)のような文を示されると、「代名詞には先行詞が存在する」という原則と、「代名詞の先行詞は代名詞の近くにあってはならない」という束縛原理Bのどちらかを破らなければならぬ。だから約5割の子供が束縛原理Bに違反して、(23)を正しいと判断しても、彼らが束縛原理Bを知らないということを意味しないとGrimshaw and Rosenは主張するのである。だからGrimshaw and Rosenは束縛原理Aより束縛原理Bが遅れて発達するという考えに反対し、この段階でも束縛原理Bは存在していると主張するのである。

しかしGrimshaw and Rosenのこの考えに問題がない訳ではないとCookは述べる。例えば、

代名詞を正しく使うことが発達するのは、再帰代名詞が使えるようになった後であるということは Grimshaw and Rosen の考えでは説明できない。

Grodzinsky and Reinhart (1993) は、子供は束縛理論 B を知っているが、それに従わないという Grimshaw and Rosen の考えに反対する。Grodzinsky and Reinhart は、GB 理論(統率・束縛の理論)で想定されてきた束縛理論は正しくないと主張する。束縛理論 B に違反しても文法的な文があることは指摘してきた。

- (25) Everyone has finally realized that Oscar is incompetent. Even *he* has finally realized that *Oscar* is incompetent.

Grodzinsky and Reinhart は同一指示のルールは束縛原理とは別のモジュールに属すると述べる。代名詞以外のすべての照応形は束縛されなければならぬ。また、every がついた名詞の後では代名詞も他の照応形と同じ振る舞いを示す。

- (26) \*A party without *every actress* annoys *her*.

(以下、代名詞という時、every がついた名詞の後の代名詞は含めない。)これに対し、代名詞だけが束縛関係なしに先行詞との同一指示関係に入れるのである。

- (27) A party without *Lucie* annoys *her*.

だから、Grodzinsky and Reinhart は束縛理論と同一指示規則を別のモジュールのものとした。同一指示の規則(本稿では略)により、(23)で Big Bird と him は同一指示になれない。Grodzinsky and Reinhart は、この段階の子供は束縛の原理は分かっているが、同一指示の規則はまだ知らないため、この文で同一指示が可能であると誤って考へてしまうと述べる。

(28)においても、(23)と同様同一指示は不可能である。

- (28) Every boy touches him.

しかし、この場合、この文について子供が間違えることはない。子供は同一指示が不可能であると考える。every がついた名詞の場合は、一見複雑であるから、子供がこちらを間違えないで、(23)を間違えるのは、興味がある。Grodzinsky and Reinhart のように、束縛と同一指示は別と考え、

(23)だけに同一指示ルールが関わっていて(その結果、同一指示は不可能)、そして子供はこの段階ではまだ同一指示のルールが分かっていないと考えると、このことは説明がつく。(28)は同一指示が関わらないから、間違えないのである。

以上、第一言語獲得についての代名詞と再帰代名詞の問題を述べてきた。Grodzinsky and Reinhart の新しい考え方での第二言語獲得における束縛、同一指示の原理の研究が待たれる。日本人の大学生の多くの者が(29 a, b)で二つの John が同一人物である解釈が可能であると考える。

- (29) a. John likes John.

- b. John loves John's mother.

また、(30)のように代名詞が名詞の左に来ている時は、代名詞は名詞と同一指示ではないと考える日本人学生が多い。

- (30) People who know *him* hate Nixon.

日本語と英語では、同一指示のルールまた束縛原理のパラメータはどこがちがうのであろうか?また、英語を第2言語として学んでいる日本人は、代名詞、同一指示に関し、どのように普遍文法に接近しているのだろうか?今後、明らかにすべき点が多くある。

### 注

1. Pollock は Infl を Tense と Agreement に分けて説明するが、本稿では Infl のままでおく。なお、英語の be 動詞と完了の have はフランス語の動詞と同じような振る舞いをし、フランス語の動詞と同じように、Infl へ移動すると考えられている。

- (i) John is not t happy.

- (ii) John has not t lost his way.

2. チョムスキーは、文法があらかじめ定められた生物学的時計に従って人間の心の中で成長する(grow)と述べている。その意味で、「獲得」という言葉が本当に第一言語の場合に適切な言葉かどうか問題であるが、よく使われる言葉であるので、本稿でもそのまま使用する。

### 参考文献

Déprez, Vivian and Amy Pierce. 1993. "Nega-

- tion and Functional Projection in Early Grammar." *Linguistic Inquiry* 24: 25-67.
- Grimshaw, Jane and Sara T. Rosen. 1990. "Knowledge and Obedience: The Developmental Status of the Binding Theory." *Linguistic Inquiry* 21: 187-222.
- Grodzinsky, Yosef and Tanya Reinhart. 1993. "The Innateness of Binding and Coreference." *Linguistic Inquiry* 24: 25-67.
- Pollock, Jean-Yves. 1989. "Verb Movement, Universal Grammar, and the Structure of IP." *Linguistic Inquiry* 20: 365-424.
- Radford, Andrew. 1990. *Syntactic Theory and the Acquisition of English Syntax*. Oxford: Basil Blackwell.
- Wexler, Kenneth and M. Rita Manzini. 1987. "Parameters and Learnability in Binding Theory." In Thomas Roeper and Edwin Williams (eds.) *Parameter Setting*. Dordrecht: Reidel. 41-76.

(ありもと まさたけ／南山大学)

A Journal for the Teacher of English outside the United States

## English Teaching FORUM (米国広報・文化交流庁発行)

### 内容案内

#### January 1996 (Vol. 34 No. 1)

Vocabulary Learning and Speaking Activities/  
The Ripple Effect: Word Meaning Expansion  
and its Application in Teaching Vocabulary/  
Helping Students Help Themselves: Using  
*Personalized Teaching Aids*

The Prominence of Transfer in Translation  
(China), How to Motivate Learners of English  
(Congo), Adapting Readings to Encourage  
Slower Readers (Czech Republic)

Teacher Resources: *Plays for Reading/New  
Ways in Teaching Vocabulary*

#### April 1996 (Vol. 34 No. 2)

Teacher Supervision: Moving Towards an  
Interactive Approach/Managing In-service  
Training: A Japanese Case Study/Note-taking:  
A Useful Device

Teaching Organisational Writing (Cameroon),  
Using Simulations to Enhance Oral  
Competence (Greece), Using Story Jokes for  
Real Communication (Spain),

Teacher Resources: *Building Better Language  
Programs/From Practice to Performance*  
The Best of Forum

年4回刊行

年間購読料2,000円（含送料）

お問い合わせはELECまで

財団法人英語教育協議会（ELEC）

〒101 東京都千代田区神田錦町3-20

神田中央ビル9F

Tel. 03-3219-5221

## 新刊書評

### 『国際化の中の英語教育』

羽島博愛著

四六判, 206頁, 2,000円

三省堂

荒井正道

本書は、筆者が英語教育学について今まで各種雑誌、講座等に発表した論文をまとめたものであると同時に、「国際教育協議会(CIE)認定教育学博士(CIE・EdD)」の認定を受けたことを機に、その提出論文に他の一編の論文を加えて公刊したものである。

30数年間にわたって、筆者が追求してきた、教科教育学として英語教育学を構築し確立しようとする教育者及び学者としての情熱、誠意、研究心が随所に現れており、これまでの英語教育をさらに高い次元に引き上げようとする意欲作でもある。筆者の背景に一貫しているものは、「日本における英語教育の改善」である。学術書というよりは、現在英語教育に携わる者、あるいは、これから英語教育に携わろうとする者に対する、筆者の冷静で客観的な、そして豊富な経験と実証的研究に根ざした英語教育に対する熱い想いが一字一句伝わってくる良書である。「コミュニケーションための英語教育」を実践する前に、そこに到達する背景として必要な事柄が述べられており、ふだんの英語指導に役立つだけでなく、教員研修においても英語教育の基礎・基本となるものとして推薦したい本である。

第Ⅰ章の「英語教育観の変遷」は、指導法の観点から平易かつ明快に書いた英語教育史であり、今、日本の英語教育が向かっている方向性が明確である。また、「主体的・創造的学習活動のススメ」「生徒の主体性と学習意欲」「外国语教育における国際化の問題点」では、たえず学習者中心の英語教育の立場に立ち、どのようにすれば生徒の主体性、創造性、学習意欲、表現力等を引き出し高めることができるかについて、広範な知識に根ざした示唆に富む概括的な提言の書である。

第Ⅱ章の「英語科教育学の立場」では、筆者の「英語教育学」の領域・方法を明確にしようとする意欲的な小論である。また、「英語科教育の課題」では、筆者の英語教育に対する願いや思いが具体的に示され、提言されているという点で特に興味深いものである。

「LL指導をめぐる諸問題」では、「ALTとLLの授業」とあわせて、LLの活用について具体的かつ豊富であり、他に類をみない優れた指導例を余すところなく提供しているものである。また、ALTをLLの活用の観点から述べていることも、実際の英語指導に携わるものにとっては、興味深く、ぜひ実践してみたいという意欲をかき立てるものである。

第Ⅲ章の「日英両語比較研究の観点について」と「日英両語の相違の背後にあるもの」については、英語教育に携わる者の教材研究の分野として貴重なものである。文法、発想法等の違いによる日英両語の比較は、客観的な資料を豊富に提供している。ただ、若干残念に思われたのは、このどちらかの章に、レジスター(register)の観点からの日英両語比較があるならば、コミュニケーションに向けた日本の英語教育にとってかけがえのない示唆を与えることができたのではないかと評者は感じている。

最後の「私の英語学概論」は、英語教育者を目指す大学の学生に対して、どのような内容を大学では教授していくべきか、という観点から読むとおもしろい。ここでも、筆者の英語科教育法の哲学観に立脚する「英語学概論」というべきものが提言され、英語教育学を確立しようとする筆者の意欲的な論文といえる。

筆者も述べているように、別々の論文を編集しているため、ところどころに重複する内容が記述されていることがあるが、よく推敲された、読みやすい、説得力のある本である。

(あらい まさみち／岩手県教育委員会)



## 『定着重視の英語テスト法 ——長期的視野に立った中学英語評価』

金谷 憲編著

B5判、183頁、2,500円

河源社

豊田尚正

### 英語教育への貴重な提言

コミュニケーション重視の英語教育が教育現場を席巻し、Fluency（流暢さ）の時代が来ている今、本書はCorrectness（正確さ）に正面から向き合い、テストにおける文法事項の評価をとことん掘り下げている。金谷哲学一流の「疑問」と「発想の転換」を受けたプロジェクトチームが、2年間費やして本書の発行に漕ぎ付けた。この本は3つの疑問から始まる。

第1の疑問は「文法事項等が、教えた順序で身につくか」というものである。導入と定着には時差があり、必ずしも教えたからといってすぐに身に付くものではないのではないか。それならば時差を考えない現今の評価体制（定期考査等）を見なおす必要があるのではないか。第2の疑問は「大筋をつかんで教えてるか」ということであり文法事項によって比重のかけ方が違ってくるのではないか。とすると、繰り返し指導する基礎・基本的なことと軽く扱う周辺的なことを意識する必要があることになる。第3の疑問は「ではどれだけ研究が進んでいるのか」ということになる。そこで、本プロジェクトの拠り所となる先行研究を振り返り、その説明を加えている。Interlanguage（中間言語）という視点で見た英語力に注目し、「言語が習得される」状況とはCareful Style（構造や組み立てに頭を使う）状態ではなくVernacular Style（繕わない自然な）状態と定義し、今後一層この点に関する日本の英語教育のデータが必要ではないかと力説している。

3つの「疑問」と「発想の転換」から出発したこのプロジェクトチームがスタートしてから（1991年4月）、複雑な議論の過程で軌道を修正し

て行くのである。最初に、指導の「大筋」は何かが論争となり、「時制」ではなく「語順」ではないか、ということになった。だが、それを更に突き進めると「句の把握」という概念に行き着いた。

一例を引いてみよう。「The book on the desk new.という文にisを入れるとしたらどこになるか」の正解を導くためには「句をまとまりとして認識していること」が必要になる。更に、もう一步進めて、この文をProductionさせた場合On the desk the book is new.と書いた生徒がいるすると、この生徒は「句」は認識していても、「内部構造」が分かっていないことになる。「句の把握」、「内部構造の理解」という「大筋」がここで見えた。これを軸とした8回の定期テストの提案が具体的になされる。

ここで、導入と定着の「時差」を明らかにするためにはテスト中繰り返して表れる事項（例えば前置詞の後置修飾は第1・3・5・8回）の結果分析が必要となる。巻末の「文法事項の導入時期と定着チェック時期の対応表」を生かし、8回の診断テストが工夫されて作成されている。これは具体的で非常に参考になる。しかし、テスト問題は学年を追うに従って、それに付随する事項が複雑（語彙の増加、概念の抽象化、他の文法事項の増加等）になり、このテストの結果から単純に時差を割り出せるとはいえない点が気になる。例えば、まったく同じ出題も含めてテストを作成する等の工夫も考えられる。

本書は、Fluency（流暢さ）を基調とするコミュニケーション重視の英語教育に、一石を投じたといえよう。しかし、実は、文法事項のCorrectness（正確さ）に向き合ったことは、コミュニケーション重視の英語教育とは対局的な位置からの反論ではないのである。本著で明らかにしたいことは、Correctnessに近付くための過程である中間言語（Fluency）の存在を、日本の中学校の3年間で具体的に明らかにし、今後の英語教育への提言したいと考えたからである。この本が（コミュニケーション重視の）これからの中間言語教育に大いに役立つことは言うまでもない。

（とよだ なおまさ／埼玉県花園町教育委員会）

### *Cultural Understanding and English Language Education*

服部孝彦著

A 5 判, viii+139頁, 2,400円

青磁書房

ジェマ・バーネット

服部孝彦さんは慶應大学を卒業して早稲田大学、上越大学、グレニチ大学（イギリス）で英語教育の研究を続けました。現在、大妻女子短期大学や早稲田大学で教えており、英語教育、国際理解教育に関する本や論文を数多く出しています。

私は島根県宍道小学校で国際理解教育を担当しているので、服部孝彦さんの「Cultural Understanding and English Language Education」を大変興味深く読みました。本書を書く目的に関しては著者は次のように述べています。「これから10年以内に、言葉や価値観が日本と異なる国に住む日本人は急速に増加するでしょう。国際語である英語はより大事になるし英語の授業での異文化の勉強はますます必要となります。この本が日本での英語教育、異文化理解に役立てば大変喜びます。」

本書は英語教育と異文化理解に関する8つの論文からなっており、3部に分けてあります。

「第一部」には日本とアメリカの異文化理解に関する2つの論文がのっています。それはアメリカ人と日本人のボディーランゲージの使い方やコミュニケーションのとりかたの違いに関するものです。

「第二部」は国際理解教育と英語教育というテーマであり、著者が実践したことから具体的なアドバイスと教訓を導いています。

「第三部」には日本、アメリカとオーストラリアの高等学校での研究の結果が説明され、分析されています。「第三部」の「日本人とアメリカ人がお互いに持っているイメージ」は特に興味深い論文だと思いました。著者がアメリカの高校生118人に有名な日本人の名前を聞いたところ、答えられない学生が驚くほど多かったようです。なおその上

に、答えた学生でも Bruce Lee (香港), Ho Chi Minn (ベトナム), Buddha (インド)などの日本人でない名前を挙げた者が多かったとのことです。しかし逆に日本の高校生に有名なアメリカ人の名前を聞いたらほとんど答えられたそうです。

著者の研究は大変広い範囲にわたっており、英語教育、異文化理解の分野の多様な論文がのっているこの本は英語教師に興味深い新刊に違いありません。しかし、頁数が短い割にテーマが多すぎると感じました。

又著者の研究の結果が詳しく説明されていますが分析が少なくて物足りないと言えるでしょう。例えば「第二部」の「大学生の英語教育に対する態度」の最初の14頁には研究の説明や結果表がわかりやすくのっていますが結論が僅か20行です。もうちょっと長くてもよいではないかと思えます。

もう一つ言わせてもらえば、スペルや文法の間違いを直していただければと思います。本書の日本語版があるかどうか知りませんが、英語版を出版する前に外国人にじっくり校正してもらえばスペルや文法の間違いは避けられるんじゃないかなと思います。実はそういう間違いが各頁にあります。「第二部」の「パラグラフの書き方」には次のように書いてあります。'Proofread the paragraph carefully; correct grammatical and mechanical errors'(パラグラフをじっくり校正し、文法の間違いを直しなさい)。著者が自分のアドバイスに従えばよかったと思わざるを得ませんでした。スペルの間違いが数えられないぐらい多かったです。例えば shool (school), ro (or), excersise (exercise), scoress (scores), as a matter of facts (as a matter of fact), thr (the), inverstigate (investigate)。そういうスペルの間違いは文章の流れの障害になりました。英語が母国語である人には大変読みにくいくと言えるでしょう。

著者が言うように「英語の授業での異文化の勉強は必要となります。」その面では本書は全ての英語教師にとって貴重な参考図書だと言えるでしょう。

(Gemma Burnett／島根県宍道町教育委員会)

## 新刊案内

『現代英語教授法総覧』 田崎清忠責任編集, A5判, 373頁, 3,708円 大修館書店

代表的な教授法を網羅した語学教育に携わるすべての人に必備の便利なマニュアル。19世紀後半の Direct Method から, GDM, オーラル・アプローチ, そして, ナチュラル・アプローチ, 概念・機能的アプローチ, さらに, ESP, 变形生成文法, コンピュータ利用の外国語教育など28の教授法を取り上げ, それぞれ, 理念, 歴史的背景, 教授理論, 特徴, 今後の展開予想, 参考文献等をまとめる。

『第2言語習得への招待』 D. Larsen-Freeman, M. H. Long著／牧野高吉・萬谷隆一・大場浩正訳, A5判, xii+386頁, 4,800円 鷹書房弓プレス

第2言語習得研究について, 最新の理論と主要トピックをも含め, 例をあげてわかりやすく解説した定評ある概説書の邦訳。

『英語教育における語彙習得——発話動詞の分析』 阿部 一・清水由理子・霜崎 實・長嶋善郎・町田喜義・松井 敬著, A5判, viii+289頁, 3,200円 南雲堂

発話の基本となる speak, talk, say, tell の4つの動詞の意味分析のアメリカの大学と日本の中学校・高校での実態調査を中心としたコミュニケーションのための英語教育の基礎研究。

『英語の文法』 村田勇三郎・成田圭市著, A5判, xii+172頁, 1,648円 大修館書店

英語研究の知的楽しみの世界に導く「テイクオフ英語シリーズ」の文法編。伝統的な五文型, 時制と相, 受動態と能動態等について最新の研究成果をもとに文例を提示して見直し, また談話レベルにおける旧情報・新情報の伝達の力学, 前提と断定などを扱う。

『新しい読みの指導——目的を持ったリーディング』 渡辺時夫編著, A5判, viii+237頁, 2,900円 三省堂

ELEC同友会長野支部の研究成果を結実した文法訳読を超えるリーディング指導のあり方の提示と実証的な実践報告。第1部は, 情報収集と内容理解のための reading strategy, スキーマ理論, トップダウン方式, 内容理解による文法概念の納

得・定着, 異文化理解等を扱う。第2部は, 速読, 徹底理解, ディベートなど, 指導目的を明確にした実践にもとづく成果と課題の提起。

WRITING POWER 大井恭子・上村妙子・佐野キム・マリー著, B5判, vi+101頁, 1,850円 研究社出版

和文英訳を超えたコミュニケーションのための英文ライティングのあるべき姿を示すテキスト。学習者の興味を引き出し, 創造的な表現意欲を適切な発想・表現形態に導き, 読み手が的確に理解しやすい英文に仕上げる方策が順次身につく構成をとり, ライティングの指導計画作成にも参考になる。

『頭を鍛えるディベート入門』 松本茂著, 新書判, 217頁, 740円 講談社

主張・理解・対話という言葉の機能を考えれば, 資料を読み, 意見をまとめ, 反論に応え, 判断・分析を行なうディベートこそ知的活動の基本といえる。建設的な話し合いの方法から, 英語教育のあり方, 指導法までを視野におさめた明快なディベートのすすめ。

NTC's *Dictionary of DEBATE* Jim Hanson著, A5変形判, viii+196頁, 3,481円 マクミランランゲージハウス

英語での明確な表現そして文章・スピーチの適切な理解に, 英語の発想と論理を理解し体得することは重要といえる。ディベートを中心に, 英語の論理展開とその構成の理解に必須の概念を800の項目にまとめた包括的な辞書で, コミュニケーションのための英語教育の利用範囲の広い参考書となっている。

TALKIN' AMERICAN : A Dictionary of Informal Words and Expressions Ronald Harmon著, A5変形判, viii+373頁, 3,800円 SIGNAL PRESS 判, インターナショナル・トムソン・パブリッシング・ジャパン販売

テレビや映画を楽しむために生きた英語の理解は欠かせないが, 標準的な口語表現, 新鮮な表現, スラング6000項目を網羅した現代アメリカを知るのに不可欠な辞書。多数の例文をあげ, 文脈での使われ方, ニュアンスもわかりやすい。

# 展望通信

## 1996年度夏期 ELEC 英語教育研修会（文部省後援）

教授法、指導技術、教材研究、授業研究、評価そして異文化理解とマルチメディアなど、コミュニケーションのための英語教育に求められているテーマを選び、掘り下げて検討を行う以下の9つの短期集中セミナーを開設します。

### 1. オーラル・コミュニケーションの指導法

7月29日（月）—7月30日（火）

内 容：「積極的なコミュニケーション活動の工夫」「コミュニケーション型授業の実践—導入から評価まで」「Team-Teaching: How to Vitalize Your English Classes」「ディベートとディスカッション」

講 師：緑川日出子（昭和女子大学）、Craig Jackson（東京都立国際高等学校）、志村修司（東京都立立川高等学校）、松本茂（神田外語大学）

### 2. 基礎学力の定着をはかる授業

7月31日（水）—8月1日（木）

内 容：「言語能力を着実に育てる授業の方法」「興味・関心・意欲を高める授業—楽しみながら基礎を定着させる指導のあり方」「言語材料の定着をはかる指導法」「コミュニケーション能力を育てる授業の実践」

講 師：原田昌明（江戸川女子短期大学）、豊田尚正（埼玉県花園町教育委員会）、田口徹（三鷹市立第四中学校）、高橋敦子（千葉県立松戸高等学校）

### 3. ライティングの指導法

8月2日（金）—8月3日（土）

内 容：「英語の論理構成とその表現法」「多量の英文を書かせる指導の工夫」「パラグラフ・ライティング／プロセス・ライティング／ライティング指導のまとめ」

講 師：石井敏（獨協大学）、古川法子（文教大学付属高等学校）、和田稔（明海大学）

### 4. 教材の効果的活用法

8月5日（月）—8月6日（火）

内 容：「ピング、バーコードなどの活用」「中学生のスピーキング教材」「英語の歌の利用」「すぐに使える簡単なパソコン教材」「放送番組を効

果的に利用するアイディアとヒント」「リスニング教材」「リーディング教材」「教材活用のまとめ/Q&A」

講 師：谷口幸夫（筑波大学附属駒場中・高等学校）、小林泰義（所沢市立東中学校）、直井一博（武蔵大学）、日臺滋之（東京学芸大学附属世田谷中学校）、本多彩子（埼玉県立寄居高等学校）、毛利孝夫（東京都立鮫洲工業高等学校）、金谷憲（東京学芸大学）

### 5. 授業に役立つ指導の工夫

8月7日（水）—8月8日（木）

内 容：「コミュニケーション指向の授業の方法」「言語活動の指導法—ゲーム、ペア・ワーク、アクティビティの工夫」「英語を使いこなすための指導と生きた素材の導入」「理解力を高める効果的な指導テクニック」

講 師：佐野正之（横浜国立大学）、石川賢司（千代田区立練成中学校）、山西廣司（早稲田大学高等学院）、齋藤誠毅（神奈川大学）

### 6. コミュニケーション能力の評価

8月9日（金）—8月10日（土）

内 容：「指導と評価の統合的検討—入試問題の分析と妥当なテストのあり方」「コミュニケーション能力をどうとらえるか」「コミュニケーション能力の評価とその指導法へのフィードバック」「観点別評価の実際」

講 師：渡辺寛治（国立教育研究所）、小川邦彦（山梨大学）、新里眞男（文部省）、古家貴雄（山梨大学）

### 7. コンピュータの英語教育への活用

8月19日（月）—8月20日（火）

内 容：「英語教師のマルチメディア入門—入門案内から素材の紹介と多様な利用法まで」「インターネットの授業への活用」「マルチメディアは英語教育をどう変えるか—その大きな可能性を考える」

講 師：山内豊（東京学芸大学附属高等学校）、朝尾幸次郎（東海大学）、金田正也（名古屋学院大学）

# 展望通信

## 8. リーディング指導と教材の選び方

8月21日（水）～8月22日（木）

内 容：「リーディング指導の新しい理論」「教科書を活かすリーディング指導」「リーディング指導の実践的方法」「多様なリーディング教材の選び方・使い方」

講 師：田近裕子（津田塾大学）、伊藤元雄（東京家政学院大学）、伊部哲（専修大学）、名和雄次郎（拓殖大学）

## 9. 国際理解・異文化理解教育

8月23日（金）～8月24日（土）

内 容：「国際理解教育の総合的検討－英語教育が担う役割」「教科書・教材を生かす異文化理解の指導法」「国際交流の具体的方法－ホームステイから交流事業の実際まで」「異文化コミュニケーションの理論と実際」

講 師：中西晃（目白学園女子短期大学）、和田稔（明海大学）、仲野友子（国際教育交換協議会）、久米昭元（神田外語大学）

各セミナーとも

時 間：午前9時30分～午後4時20分

参加費：¥20,000（教材費、消費税込）

会 場：ELEC 英語研修所

東京都千代田区神田錦町3-20神田中央ビル9F

問合せ：財団法人英語教育協議会（ELEC）

Tel. (03)3219-5221

## 語学ラボラトリー学会（L L A）第36回全国研究大会

期 日：7月29日（月）～31日（水）会場：拓殖大学八王子キャンパス

主な内容 わーくしょっぷの広場：「コンピュータ初步の初步」「インターネット体験」「L L 授業教授体験」、講演：Robert T. Henderson（ピツバーグ大学）、対談「脳から見た外国語教育」植村研一（浜松医科大学）・鈴木博（宇都宮大学）、情報交換の広場：「オーラル・コミュニケーション」「評価」「L L 教材」「早期英語教育」「外国語（英語を除く）教育」「CALL」「インターネット」、シンポジウム：「学習環境の変化と外国語教育－国際化とコンピュータ化にどう対応するか」大谷泰照（滋賀県立大学）、松本青也（愛知淑徳大学）、見上晃（東洋女子短期大学）、他

参加費：2,000円

問合せ：〒270-01千葉県流山市鰐ヶ崎1660

東洋学園大学視聴覚教育センター内

L L A関東支部全国研究大会事務局

Tel. 0471-58-6424

## 英語発音・表記学会

基礎研究に基づく体系的な発音指導法の開発が国際社会に通用する英語運用能力養成に欠かせないとの認識から「英語発音・表記学会（English Pronunciation & Transcription Association）」が4月に設立された。7月6日茨城キリスト教大学で第1回大会を開催し、さらに充実した活動を展開する予定。

会 長：島岡丘（茨城キリスト教大学教授）

事務局：〒319-12茨城県日立市大みか町6-11-1

茨城キリスト教大学3号館3517番教室

Tel. 0294-52-3215

## フォーラム "Transitions in English Education"

宮崎国際大学、鹿児島JALT共催で11月30日（土）フォーラムを開催、日本人学習者への英語教育に関する発表論文を募集（8月31日締切り）。

問合せ：宮崎国際大学 Ros Blanck

〒889-16宮崎県宮崎郡清武町加納1405

Tel. 0985-85-5931

## ELEC賞

本年は、ELEC創立40周年記念特別テーマ「21世紀の英語教育」のもとに論文を募集いたします。応募の詳細は52ページをご覧下さい。なお、1995年度のELEC賞は該当者がありませんでした。ただし、B部門「テキスト理解における学習者の英語脚注の利用方略分析について」（古家貴雄・山梨大学）に「奨励賞」を贈呈しました。

英語展望（ELEC Bulletin）

第102号

定価650円（本体631円）（送料240円）

1996年8月1日発行

◎編集人 太田 朗

発行人 清水 譲

印刷所 相馬印刷株式会社

発行所

財団法人英語教育協議会出版部（ELEC）

〒101 東京都千代田区神田錦町3-20 神田中央ビル9階

電話・(03)3219-5221 FAX・(03)3219-5988

振替・00130-9-11798

# ELEC

THE ENGLISH LANGUAGE EDUCATION COUNCIL, INC